

11480

百家說林

卷十

兔園小說



115549

兔園小說目錄

○第十一集 七百冬十月廿三日於海榮庵集會席上各披講

(承前)

○丙午丁未

著作堂 一頁

○消夏自適天明荒凶記附錄

全 三十二頁

○第十二集 七百冬十二月朔於著作堂集會席上各披講了

○助無

龍珠館 四十三頁

○參考太平記年歷不合 若附考

全 四十四頁

○漂流人歸國

乾齋 四十五頁

○大酒大食會

海棠庵 五十頁

○風流祭

海棠庵客編 西原晁樹 五十六頁

○邪慳の親

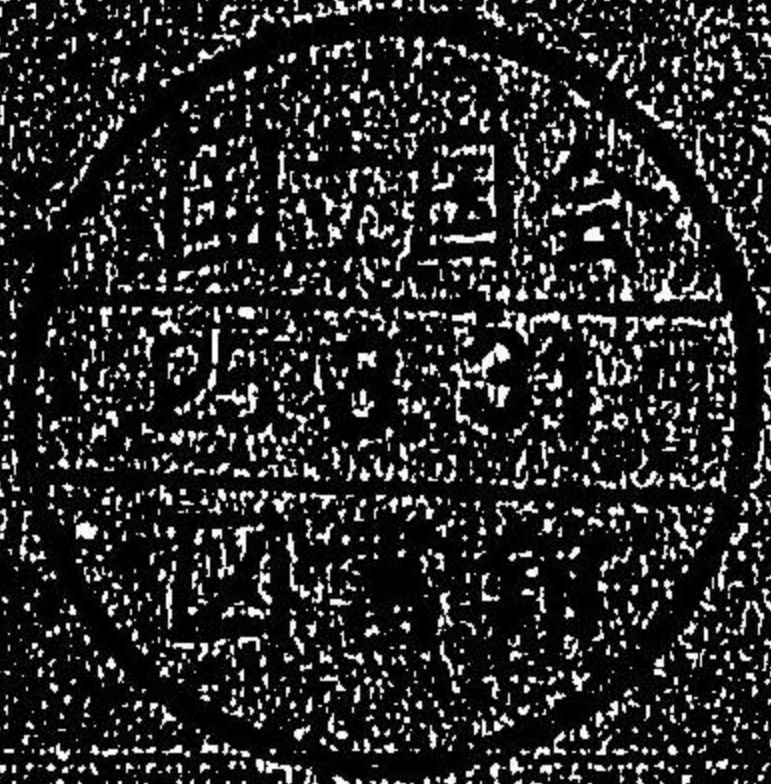
文賢堂 六十一頁

○犬猫幸不幸 若老長番附

全 六十四頁

○警婦殺賊

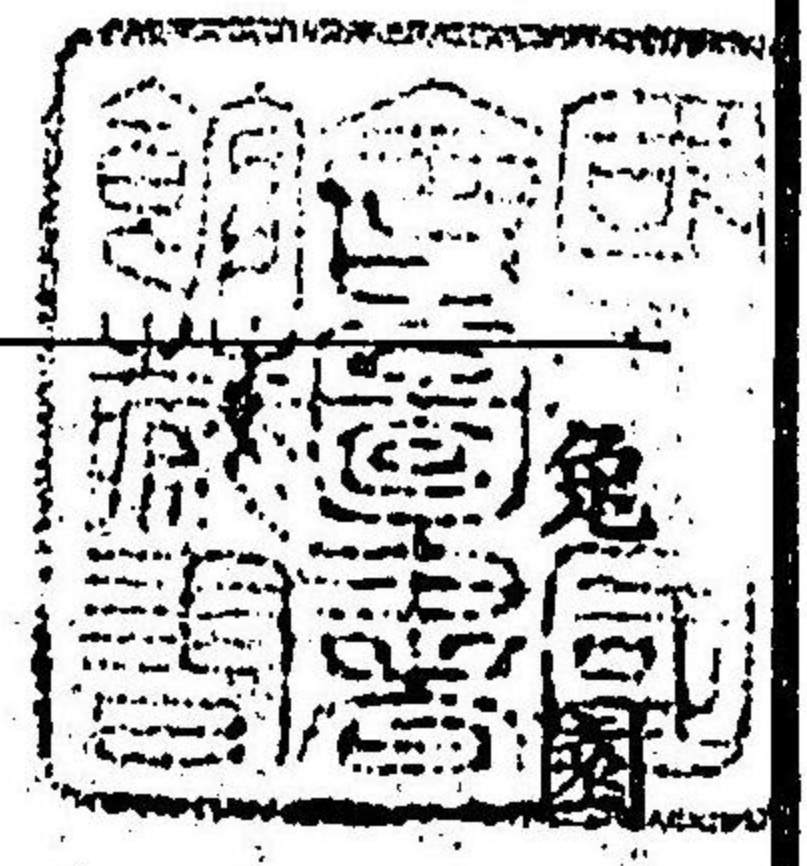
遼 卷 六十六頁



- いさの数 三十一字附
- 麻布の異石
- 五時參詩歌
- 文政乙酉御幸記
- 騙兒悔非自新
- 破風山の龜松が孝勇
- 瑞龍が女兒
- 賀茂村の坂迎
- 希有の物好 古代の
時名附
- 蒲の花かたみの上

輪池堂	六十七頁
麻布學究	六十八頁
客編 輪池堂	七十二頁
全	七十三頁
琴嶺舎	七十九頁
全	八十一頁
全	八十四頁
客編 青李庵	八十七頁
全	八十八頁
著作堂	九十頁

兔園小説 第二集 目錄 大尾



小説

瀧澤馬琴等編

○丙午丁未

愈文約吹細録云。丙午丁未年。中國過之。必有災。謝肇淛五雜俎載是言。曰。亦有不盡然者。粵
 放清王士禎池北偶談。又有其辨云。丙午丁未。從古以爲厄歲。陰陽家云。丙丁屬火。過午未而
 盛。故陰極必戰元。而有悔也。康熙丙午冬 天朝光
文六年 戶部尚書蘇納海。督撫尚書王登聯等構死。丁
 未春災稔疊見。彗星出。太白晝見。白晝出西北經月餘。是歲七月。輔臣蘇克薩拉死。吾友程職
 方謂。予欲哀輯前史所載丙丁災變徵應爲一書。頃見宋理宗淳祐中。崇望所上丙丁龜鑑十卷。
 自秦注履王五十二年丙丁。迄五季後漢天禧十二年丁未。通一千二百六十載。中爲丙午丁未
 者二十有一。備撫事實。係以論斷。元至正中。又有續丙丁龜鑑者。補宋元事之闕。前人已有此
 二書。當考據。故明三百年中事應。以續二書之後といへり。解いそく。天朝もいしへより
 丙午丁未の年毎。さるるしのこりけるや。いまだ考索いとまなければ。見ぬ世の
 事の始く措きつ。只予が親しく耳に聞き。目に見しまゝをもてすれば。天明丙午の火災洪

9/4.5
4997
Z

水。丁未の饑饉はまきものなし。この速からぬ世の事にて。五十已上の人々より。めづらしげなく思われんを。四十以下なる人々の。故老の語説によるのみなり。まいて今より後の人々。昔がたりは聞きながして。警め慎むころ薄くば。遂は又荒年の憫ることもあるべし。この故は只見聞のまゝに記して。もて後生に示すのみ。まかれども。老邁よろづは遺忘多くて。記臆の壮年及びがたきをいかにせん。かゝれば。漏らをも多かるべく。思ひたがへし事もあるべし。抑この歳の凶荒は。京の人原氏が。五穀無盡藏とかいふものもあるしついたりとい聞さしかど。予はいまだその書を見ざりき。さむれ只その書は。諸國の米の價をのみをさくゝあるしものとなん。まからんより。予が編のいと淺くかよて。疎齒なるも考據の爲なるよしあらんか。されど己のみを月より。己が身異特の憂あり又丙午の禁月より。仲兎夭折せられたり。かくうれしく物がなしき折なりければ。世上の事を只よそのみ聞き捨て。書きつけおさしことなきを。こゝよとつかよ思ひ出で。その大かたをえるすよし。嚮は好問堂の出だされたる天明癸卯の秋のころ。南部領なる凶荒の文署の編よちをみてなん

天明六年丙午の春正月元日の己のときばかり。日蝕皆既なり。貴賤となく。貧富となく。

六合

立ちかへる年のはじめをなべてことぶくとさなるよ。くよのうち忍よとこやみとなりしかば。心あるもころなきも。驚き恐れをといふものなし。この故は殿中にて。總出の時刻などを。例年よりたかへさせて。蝕し果て。後よこそ。年のはじめの御禮を受けさせ給ひしと聞えたれ。かくてこの日。火災あり。これより後。雨は稀よて風のまばら吹ければ。江戸の中。日毎くよこゝかじことなく。兩三ヶ所づゝ火火延焼してければ。人みな駭き惑ひつゝ。ぬりごめをもてるもの。家財雜具を索もてからげ。衣裳調度を葛籠籠篋よおしいれて。所せきまで積みかさねつゝ。今や焼けぬと待つがごとし。こゝをもちいただ類焼せざるものも。焼さいだされ異ならむ。客ある家のもまれば。茶碗よをらことをかきたり。さればとておのもく。遠謀遠慮あるよりあらで。人そよめきの勢ひなれども。これも時變の一端なるべし。かう罵りさるゝこと。正月二月甚しく。三月に至りてもなほ人こゝろまづかならず。四月をかむよなりてこそ。世々やのどかよなりたれ。されば南政子の四方のあか集よ。あらそれたる春日泉亭詠雜煮餅狂歌の序よも。ことしひのえのあら竹。うまよのれるとしなめりと。人々つゝしみおそれしが。そたして春日野のどぶ火よあらで。もるてふ水の手あやまちより。市人のかりをまるも野守がいほの

心地し侍りて。今いくかありてされどといひてんなど。いひまらふもほいなしと書かれ
たり。とよもかくよも。この春の花見てくらを人の稀よて。只火事の噂をまつ。ありくら
し。もうるさかりき。當時焼原場所附とかいふものを費りあるさしも多かりけれど。見
たるも忘れて。思ひいでむ。今もなほ好事の家よ。穢奪したるもあらんかし。かくて夏よ
もなりよければ。火災の噂のやみたりしよ。この年七月十二日より。雨のふりそぐこと
おびたゞしかりしよ。十四日より十六日に至りて。又洪水のまごてひあり。まづ江戸の本
所。深川。木場。洲崎。登川筋。牛島。柳島のほとりの洪水いへばさらなり。下谷。淺草。外神田
いづこも水よ浸されぬいなし。予が叔父田原米岳翁の。本所林町なる武家上仕へたりし
が。その身の立の先途よ立ちて。家族を見かへるよいとまあらむ。家の内のものども。長
屋の屋根よ登りつ。そが儘船よ乗りうつりてからくして脱れしとぞ。又次の叔父兼子
翁の。御船手組の同心なれば。水のうへよころを得て。船も亦自由なれば。これもやから
をいちとやく。所親がり遣し。危きことなかりしといへり。又予がめのをんなの。大
洲侯當時加藤作内と申しき。彼の母うへよみまづかへせしころなりければ。これも又御徒町なる
遠江守に任せられたりの母うへよみまづかへせしころなりければ。これも又御徒町なる
邸中より。船よ乗せられしが。まのむせの池のこたなる同家加藤氏の邸中へ。みまへよ俱

して参りしよ。かしこも水の中なりきといへり。予もそらからも當時みな山の手よをり
しかば。この水難よあそねども。親戚のうへ心もとなし。ゆきて訪ひむやと思ふものか
ら。永代橋。大川橋の往来をとめられて。柳橋も亦人をまたさむ。この他新大橋の中の間破
損して。和泉橋の落ちたり。只恙なきもの。兩國橋一ヶ所なれども。本所。深川の水高けれ
ば。船ならざるものゆくこと得ならむ。凡。下谷のいつみ橋筋。あたらし橋筋。外神田御成
道など。商人の見せさきを船よて往還まつ事。まらざるもの。そらごとく。や思ひん。只
これのみよあらむして。小石川御門外。牛込揚端。どんと橋の邊りまでも。前もて聞かぬ出
水高くて。溺死のものも少からむ。かくて兩三日のうち。牛込の水の退きしを。仲兄鶴忠子
が見んとてゆきし折

けさひきしわたちの水のふなかそら。泥どろふみこむ跡もどろ龜
當時鮒泥鰯などの泥よ塗れてありけるを。まのあたりよ見てよまれしなり。さうこの
狂歌の絶筆よて。次の月の初の四日よ。ときのけよて身まかりよき。享年廿二歳なり。いと
かなしともかなしかりしを。身よしみくぐと忘れがたきよ。言のこよよ及べるなり。只此
ごたりの水のみか。日本堤をうちこえて。田町へ水のおしたれば。聖天町。山の宿。淺草

反敵もひとつとなりて。金龍山の裾を透れり。まいて千住松戸の邊。葛西。行徳。千葉のま
 たり。熊谷。浦和に至るまで。みなこの水を受けぬをなし。されは十七八日のころよりし
 て。水見まひの良職奔走しつゝ。辨當ハナシ。偏提ハナシ。坐具。調度を。おもひくゝ一齋らして。ゆくもの
 ちまたに陸續たり。又關東御郡代伊奈氏のうけ給りて。馬喰町のあき地に假屋をしつ
 らひ。水厄のものを入れおかせて。日毎に粥を下されけり。當時市中を賣りあるまじ大水
 場所附といふ地圖二本。予が織奪あり。舉して左りに出だすもの是なり

丙午七月十八九日の比より市中を賣りあるまじもの
限字并にかまらひ本本のまゝあり。是より下の四
 頁も。二百十月廿二日臨寫す。皆同時のものなり

上野下野 山水荒増記 上

▲ころは天明六のとし七月十二日夜より大雨しきりよふりつゝきて同十四日
 明方より江戸川すぢ出水して十五六日甚しく目白下の大といながれせき口の
 とし中のとしみんとし其外小とし不残おちよけり小日向水道丁牛天神の下通
 り御大小名様方のまへ四五尺つゝも出水を又龍けいむしどんとむし小石川御
 門水戸様御屋敷の前通り水道橋凡五六尺つゝも水上り候へば往來のならざり
 けり御上水の大といよの鐵をつみ石を置きつゝなを附水をふせく人足おびたゝ

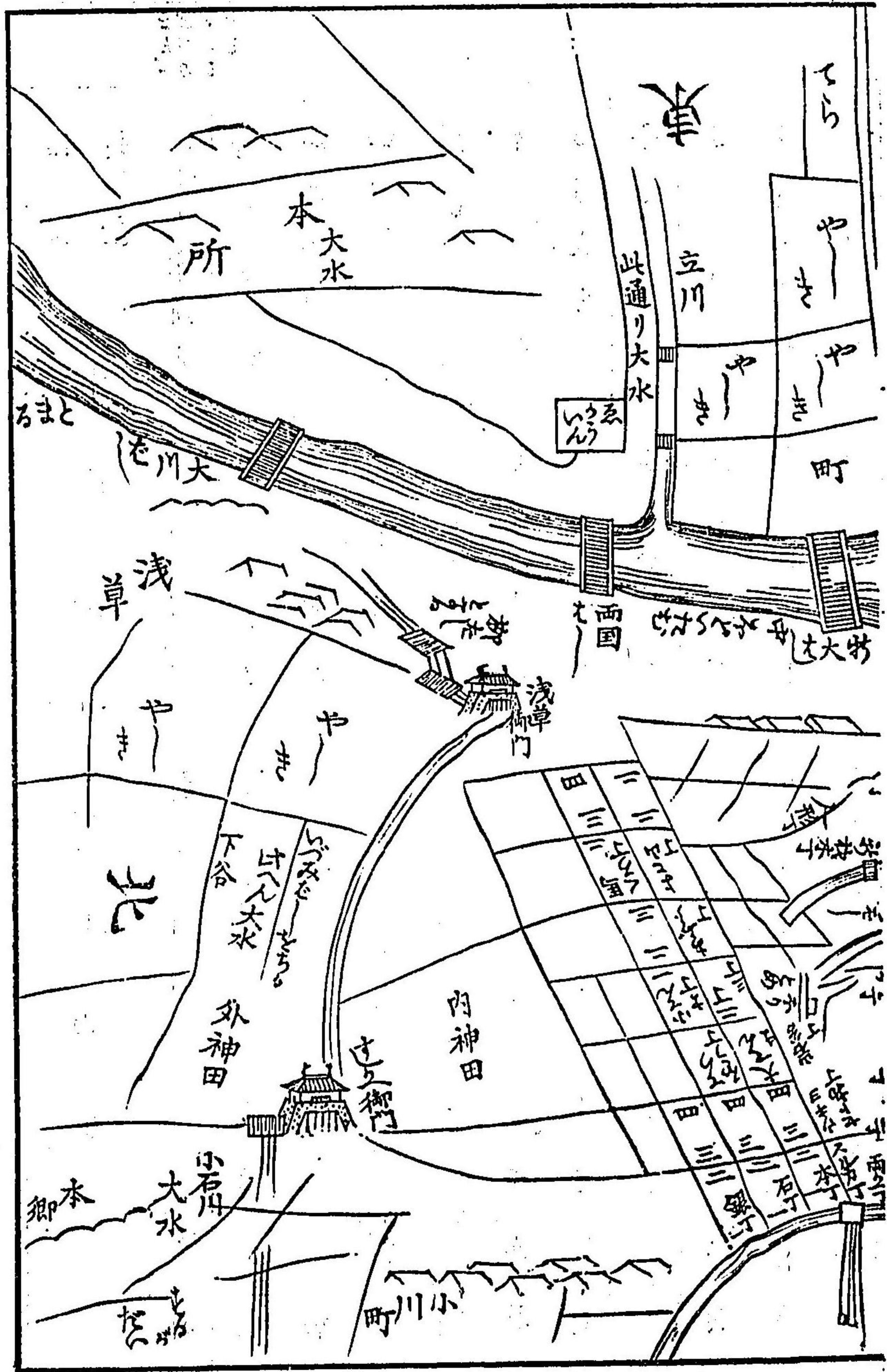
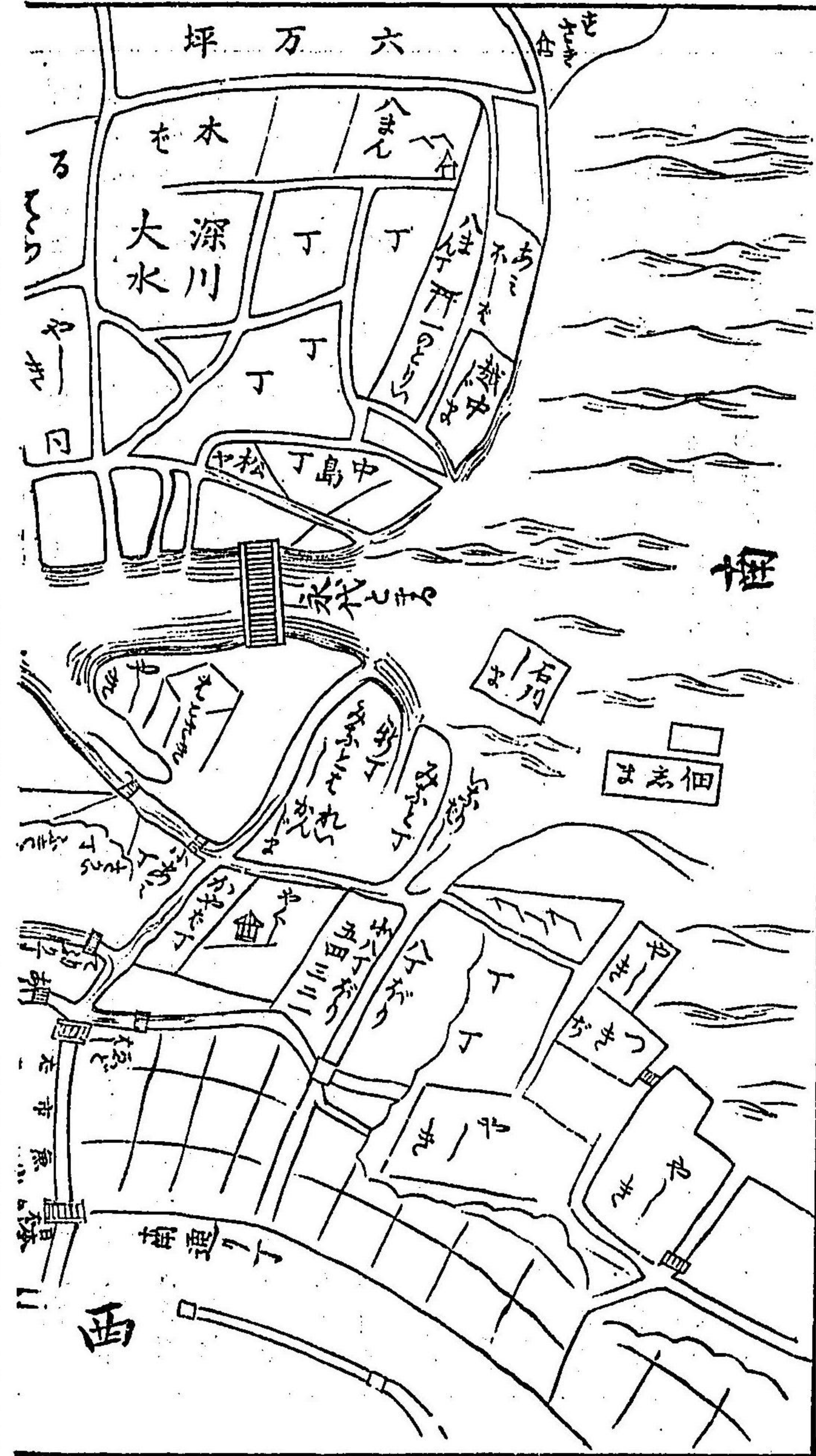
し御茶の水通りの土手二ヶ所くづれ夫よりせう平むしをぢかい御門のえしき
 わより押上る水凡四五尺つゝも有ければ一向往來のなりがだしいつみむし
 十六日四つ時よおちけり新むし淺草御門柳むしの人とめ大川の筋本所へん少
 し水まし候所ふりつゝ大雨よ上野下野秩父領の山水押出せぬからを川かん
 を川戸田川とね川坂東むしことく出水を近江近邊の村々在々あるい四
 五尺六七尺高水まることおびたむし時よ戸ね川の堤への左りよ切て行とくの
 浦へ押出を人々あつてさわく内を水せいしほやくこまへ押あけてしほか
 ま不殘としけり叔梅若の土手つゝさくまかの土手ときこへし日本無雙
 の大づゝみこけてあふれかゝりし萬水よあやせのつゝみ戸田づゝみ十七日の
 卯こくをぎ水せいつよさよせひもなやみを一どう相切れし近江近村人々のあ
 りてふためき立さわく寺々よてのこやがねつき宿老店屋のほらがいふきたす
 け船くゝと命をかぎりよけうせたり誠よ水せいのをきこと三つばの弓矢
 のごとくよてきつてくり橋古河なごとし木藤おか佐の行田關やど御領をこ
 じめとしてかまかべこしがや杉戸邊うつまく水よ人々の親の手を引子どもを
 せかいみな山林よかへらせけりいよゝ水先のそうかより千住通りへおし出
 しかもんつゝみを打としてかさいりう二合半今井ねとさね一の井二の井さか
 さいさね川本所邊平一めんよ海となる先隅田川向じま秋葉三廻り牛じまへん

小梅竹丁中の江なり平横ぼり割下水吉岡町吉田町三笠町邊の家居家根迄水上
れば人々あわて立ちあきとせせんかくやとろたへる其あり様のあされさ
目もあてられぬふせいなり寶龜井戸天神の御やしろのよほど高き所ゆへ人
々よふくゞのびて助船をぞ待よけり又立川通りよりきく川町おなき澤の
近へん橋も平地もあらざればいかゞあせんと人々せん方なみだくれば時
中よも心さゝたる人五百らかんの御寺こそ高き所候得に此所へよげたまへ
と申人の言葉よつれあるいひさへつさ人いかたおよぐもあれいざい水よとり
つきながれ渡るもありよふくゞらんよたとりつきさゝいどうの家根よのり
たすけ給へとねんぶつこのこへよりあわれもよふせり此時にやくも御慈悲みな
んどの諸人を助んと御用船數百をうこき来あり様みるよりも水入の人々の二
階家ねからひさしより飛のりく數萬人あやうき命を助しも誠よきみの恵な
りみなくうへよかつかつへしことなれり早速勘三郎相座兩芝居の者共よ焚出
御付させられ焼飯として被下し猶ありかたきことなれり又大川の水せ
いつよく候へば新大橋永代橋いつれも落て往来なし兩國の御としの御用人足
あつまりて橋をふせき候事をさまじかりける次第なり叔廣小路中通りよ御小
家を掛させられ欠来る水入の者どもを御すくいたまわること誠よ仁惠の御こ
となり寶龜伊奈半左衛門様御屋敷の前通り同様小家掛させられ水入の百姓を

御すくいたまわる事ひとへ御じひふかき事どもなり又千住大橋小つか原ま
ろき橋の今どのへんさんやとりこへ田中をぞ水十萬せしことなれば中々往来
也がたし水せいひ吉原の土手こし候へば郭の者ども此つゝみ切てはほんよ叶
まじと日本つゝみよ土俵を上げ又大門のまへ通り壹丈あまりよ土俵をつき水
ふせぐことおびたゝしみの金杉三河しま水入候事をねみまゝくゞげうせ
候なり寶龜田町の通りも水まじ三四尺づゝも是あるなり又淺草くゞんかん御
寺内もよほど高き所ゆへ少々水出候へば此所へ人々のあまたあつまり水引を
いやくおとしと待けり並水こまがた近へんも少々水附御藏米八町天王こし迄水
つよく往来舟よて通用を又下谷門せままへこりとく寺の近へんも右同斷の大
水なり叔東海道の川々の六こり馬よりさ川をぞいづれも川留鶴みのこし落候
てかを川新町藤澤しゆく萬水のことなれば往来一面ならざりけり程なく雨も
やみければ水も段々引よけりときゝぬ御代のことぶきと水入御すくいたま
ること廣代の御むひなり叔大雨よてくづれ候所をみるす芝あたこ山同切通し
まみ穴井伊様御屋敷の土手山王の御山春日の山其外少々つゝの所は筆よつく
しがたし

大尾

道筋方角順道下



免圖小覽

十一

十

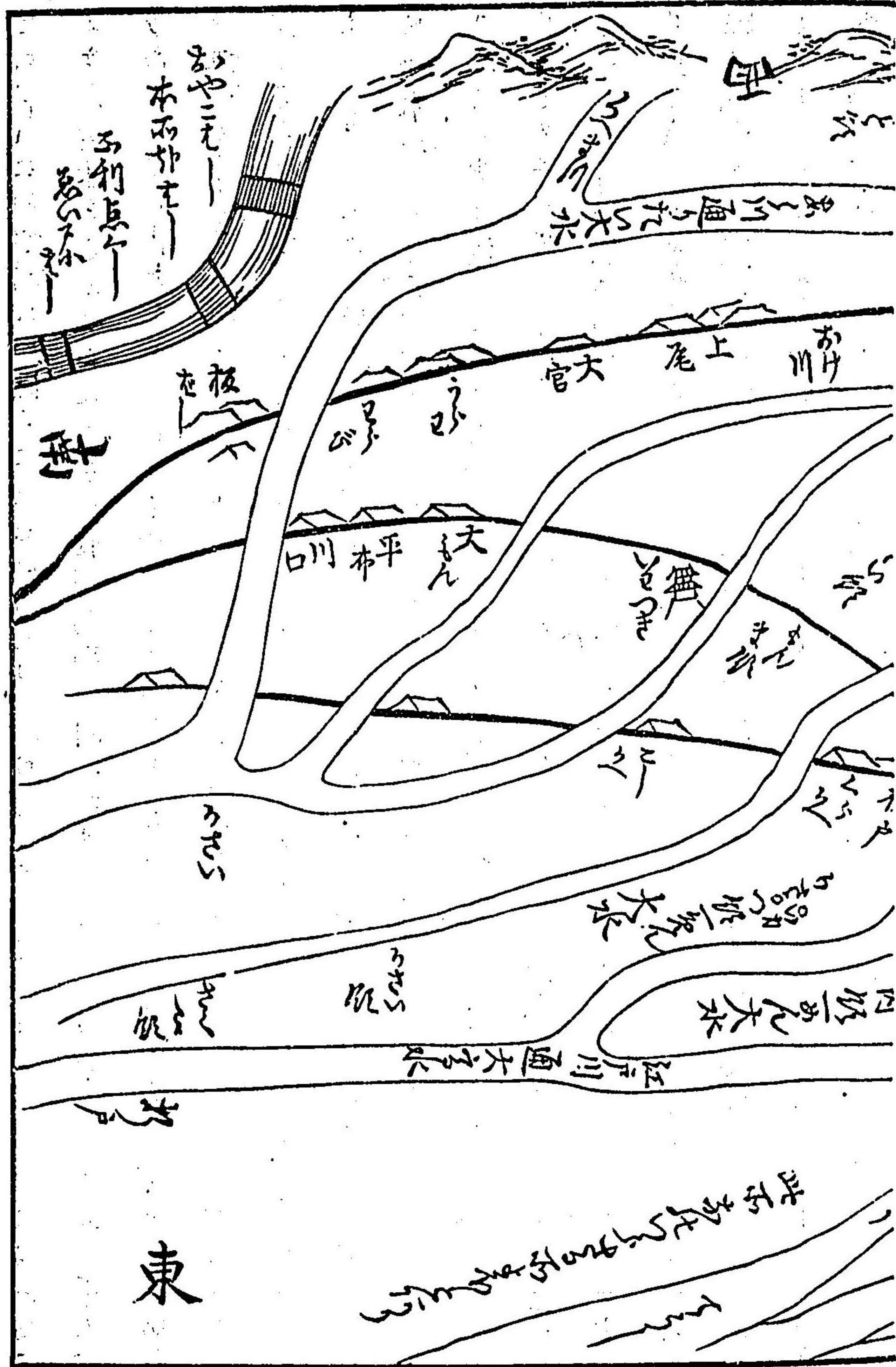
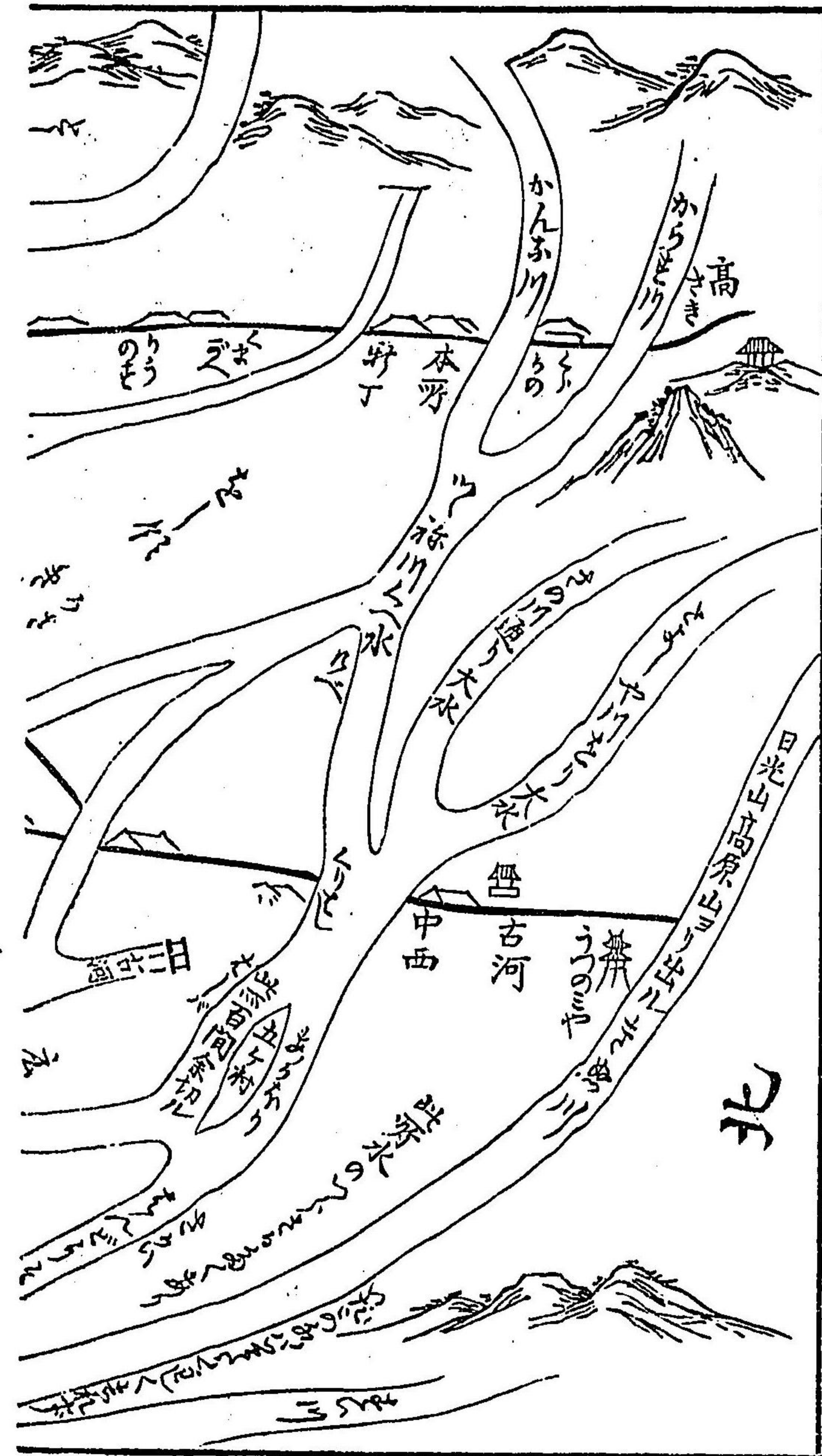
僧補
新全
村所附并二道の記

○まん本所 <small>まづん へしもの</small>	小むめ村	押あけ村	うけち村
柳しま村	うめたむら	こらじま村	さなへ村
かめあり村	まさき村	若みや村	千む村
四ツ木むら	大どむら	まぶへむら	善右衛門新田
龜いど村	おむらい村	平井むら	小松川
石き村	松もと村	小いと村	笠つか村
かまたむら	ほり切村	寶木づか	小まけ村
小やの村	柳原村	あやせ村	水どとしおち
あのみきど	大とら村	すのまた	とま又村
うたむ村	長田村	川とた村	大とたむら
木下川	木下むら	彌五郎新田	長とつ新田

かまくら新田	嘉兵衛新田	久左衛門新田	八右衛門新田
おとと新田	萩まん田	深川出村	まよりも
貳合半領	大水よて	船こし	行とく
市川邊	ハじ	たぐまか	谷木下風
松戸	小かね	みな利根川	の道をしなり

右水入の者不殘伊奈半左衛門様御屋敷のまへ通りは御小屋をかけさせられ御すくい給ること誠は廣代の御慈悲なりちう夜御見廻りの上病人ていの者よの御藥を被下置小どもよのせんべい五枚つゝ女ともよの鬘の油元結差紙迄被下事ひとへは御慈悲深き事をりけり

大水志子附出全



そもくこの水前より聞くことなかりし。かう夥しく出でぬるよし。必ゆあると
 なる。安永のまゝつかた。町奉行改野隅州の聞えあげて。新大橋の西の岸を。南へ貳町四
 方あまり築き出だして。これを中洲町と唱へたり。この處夏の夜毎に百あまりの茶店軒
 を並べて數多の灯燈を掛け置たし。おのく前より棧橋を投げ置たして。船の客の登るに
 便りとき。仙臺河岸よりこれを見れば。衆星の晃くごとく。月なき夜半も金波流れて。玉兔
 もこゝに走るかと怪しまる。大橋の南の袂より。四季庵といひし酒樓あり。或は異形の見
 せ物。水からくり乞兒鶴市が身ぶり聲色をなんといふ。あせ俳優に至るまで。かどへ擧ぐる
 一連あらむ。小濱侯の邸のむかひに。米屋。酒店。煙草商人。薪屋。錢湯。太物店。棟木をまじへ。
 檐端をならべて。物としてあらぬがなし。されば夜毎にこの河水は劣らじとのみ集ひ仇
 るやかた。屋根船のいと多なる。さしも廣かる大河に。楫とりなやむむかりなり。そが中よ
 花火くくとよぶ船あり。間酒さかなを賣る船あり。くだものを賣る船もあり。こよひに誰
 殿の花火あり。翌の夜の何がしが花火ありと罵りつゝ。水陸ともは人群集して。錐を立つ
 る地もなかりき。昔し三股河のおどり船と唱へたるも。いかよしてこの中洲にますべき。
 當時兩國河の。けおされて貧女の一燈ともいひました。冬の又地獄とか唱ふるかくし費

女のことよつどひて。婿を賣り客をむかへて。あだし仇浪よせていかへせ。淺妻ならで淺
 ましき。世にたりをまと閑えしかば。見し夕靨の冬枯るゝ。五條にたりは似るべくもあら
 ざりき。當時昔時仙鶴堂が。北尾政美と書せて板にせし。中洲の納涼の浮世あり。熊石雜志に載せたるものなり。この他。兩國橋の東の岸を西へ一町むかり
 築き出ださして。こゝにも亦茶店ありけり。この二ヶ所の出洲より。大河の幅狭くを
 りぬ。こゝをもて。川上より推しくだき水の勢。これらの洲崎よきとえられ。洪水の時。當
 りて。水のますこと前より三尺はあまるから。その水四方へあかれ溢れて。下谷。淺草の
 濕地はさらなり。神田川の水逆流して。牛込。小石川の果までも。その蔽を受くるなりと。
 水理よくしき人のいひけり。これ理りを官にもみこゝろつかせ給ひよけん。寛政の初
 り至りて。彼兩國の出洲を廢して。もとのごとくは渡せ給ひ。次は中洲を掘りとりせて。舊
 のごとくよし給ひき。このとし秋より冬まで。江戸中なる屋形船。屋根船もみなその屋根
 をとりてをち。茶ぶねもたりようちまじりて。土をかきのせつゝゆきていかへる。その船
 いくそむくなるをしらす。まいて鋤鎌を把る人夫等の。數百人日毎よつどひて。潮退けて
 掘りうがち。潮みちくれば休らふも。そてしなままでらうかむし。當時四方山人のこの玉
 揚舟を見て。よめる歌

屋根舟もやかたも今の御用船。ちつんやんでつちつんでゆく

これらの後のことながら。福も基あり。禍も胎あり。およそ丙午の洪水。兩國中洲の出崎よれり。その言たがらざりけるよ。件の二ヶ所の廢されてより。洪水はなほまばしなれども。本所。深川のみよして。御成道を船もて渡り。小石川。牛込よて。溺死するものなしか。かればこの水理の説を物よしるさば。後の世の人のこゝろ得よなるよしもあらんから。予は深川よて生れしかひよ。をさなかりし時。兩三度。人となりてもふたゝびまで。出水屋を浸されて。その進退よこゝろ得たれど。江戸よてかゝる洪水。前代未聞といひつべし。又この洪水の夜七月十日。猿江よたりの民の女房。ふたつよなりける兒を抱きて。いかよかしけん。溺れつゝ。半町あまり流されしよ。ゆくりなく巨樹オオキの杪ウツよ右の手をうちかけて。からくも推しのり留りたり。さりけれども。兒は左りよ抱き揚げたる。腰より下の水を得いでむとむかりよして。人のしらねば助けらるべき命よあらむ。益なく臍を冷さんより。母子もろ共よ死むやとて。樹よすがりたる右の手をこなたんとしたれども。手の凝着コウカクたるやうよおぼえて。心ともなく絶えをなれむ。とかく来る程よ。天の明けてたすけ船の漕きよせつゝ。船よ乗らしてぞ將てゆきぬ。このときよじめて杪を見しよ。いと大き

きなる蛇の。わが右の手を木の枝もろ共。いくつともなく巻きてをり。さてはわが手のとなれざりし。この故なりきとかもふよも。忝きこと限りもあらむ。そが船よ乗る程よ。蛇の怨巻ほぐして。ゆくへもしらむなりしとぞ。或いふ。この女房の舅姑よ孝順よて。且年米神佛をふかく信じるものなれば。その應報よと聞えたり。そが村の名も夫の名も。まさしく聞きたることながら。あるしもつけむ。年を経て。いふかひもなく忘れたり。この餘。溺死のあはれなる。當時の風聞耳を盛てたり。思ひいでなむいくらもあらんを。みを傳聞のみよして。定かならねば。心よとめむ。今さら思へば。夢よ似たり。かりそめの事をりとも。その折録しかかざれば。後よ悔しき事多かる。されば丙午の一とせむ。火災。洪水よ狼狽して。そまなく月日をおくる程よ。九月よ至りて大喪あり。この故よ神田明神の祭禮を。十一月十五日渡されよき。十五日の朝。白雪殿々たり。まかれども程なくやみたり。雪中に祭のむたりしゆづらし。とよもかくよも上下の爲よ。いとうれしき年よぞ有りける

明くれば七年丁未の春より。米穀の價登躍して。はじめに錢百文よ。白米六合を換ふと聞えしが。五合よ至り。四合よ至り。五六月よ及びて。三合よなるものから。それすら買ひんとほりたるもの。容易くは得がたかりき。米穀かくのごとくなれば。麥。大豆。小豆。粟。黍。

稗の類まで。これに稱うて其價貴し、このもとを原る。三年癸卯の秋、淺間山焼けて
 關東に焦土を降らせしとき。上野。下野。信濃。美濃。武藏。武藏の北下總上野の北の國々。熱湯
 砂石を推し流して。田畑これが爲に荒土となりし處少からむ。この年興の仙臺。南部。津
 輕。出羽の果まで。五穀登らむ。餓草相食ひし事。後聞くすら駭嘆したり。この他も。五穀
 不熟して。稻毛みつがひとつといへり。四年甲辰の秋のみいりぞ。去歲のいさゝかま
 したれども。なほ豊作といふに足らむ。この歳七月。六日十地震地震なみふること兩度して。米門
 高廈も柱傾き。墜落ちざる處少からむ。只人々の恙なきを祝するのみ。幸ひして元禄癸
 未の凶變に似ざりしを。自他おこなべてよろこびまき。予が東西をおぼえしより。震の甚
 しかりし。この甲辰の七月兩度と。文化壬申十一月四日とのみ。しかれども甲辰の壬申
 よりも猶甚しかりしなり。かゝるに六年丙午の火災。水損。既上よりしるをが如し。かゝ
 荒凶のうちつゞきて。四五年を歴しことなれば。米價のたかきことよりながら。高貴のな
 ほ利を射ん爲。あちこちの米粟をいちとやく買ひとり積めて。糞み朽つるまで出ださ
 る。中買。小賣の商人までも。おのもく彼に倣ひて。且利の上より利を見ざれば。あれども
 なしとて賣らざりけり。この故に貧士。賤民露命を繋ぐに由なくして。ことの上しを奉行

消夏自適
 地。この大
 實年七月十
 四日丑の
 刻。翌十五
 日兩度とあ
 り。予が
 不えたかへ
 たるにやあ
 らむ

所へ蘇出でつ。あはれ米商人等が隠しもてる米を出だして。賣らしめ給へと願ひまう
 せしもありしとぞ。これより先は良賤をべて粥をたうべよと徇させ給へり。このときの
 町奉行の。曲淵甲州と。山村信州なりしが。信州は新役にて。甲州は故薦なり。この夏五月
 のころにやありけん。甲州件のねがひ人等をよびのりして。汝等が願ひより。米商人等
 を穿鑿したれど。彼等も米のなしといへり。げにあき人の事なる。ある米ならば賣るべ
 き。賣らぬのなきがまことなるべし。かゝり賑らぬ折からの。糧を食ふにまをことなし。こ
 れ一方を誨んか。味噌豆をよく熬て。汁の底もて推すとき。碎けてふたつよならぬいな
 し。扱其豆も麥も。稗も。野菜も。多く加へて炊きてたうべよ。その腹もちのよきも
 のなれば。一食も足らんむと。ねもごろよいれしを。誰とて承伏するものなく。稠人
 の後邊をりて。速く隔りたるもの。なかくは憚らず。惡口もつるも少からぬ。多人
 數の事なれば。アビ捕ふるに得およむて。ひとしく追ひ立てられしとなん。これぞこの人
 氣の寄立はじめなるべし。このあはれひ春米屋等相謀ひて。春米を買はんとて。来る人別に。
 百文或は二百文と定めて。その外を賣り與へむ。それすら黎明より巳の時まで。或は巳の
 時より正午までなど。時刻を定めて賣りしかば。買ひ後れじとして。立ちつどふ老弱男女

驚しく。罵るもあり。推さるゝもあり。果に突き倒し。腫みあうて。泣き叫ぶも少からず。それも後より札を出だして。何處の米屋も賣らずなりぬ。この故に麥を買はんとはりまれども。麥を得がたく。野菜を求めんとほりすれども。その價廉ならぬ。こゝをもてせんかたもつぎ。寒民に昆布ヒロメ。海帶アラメ。鹿尾菜ヒロメなどを食として。一兩月を凌ぐもあり。又藁家と習へらるゝ三井越後の呉服店。茶店。兩替店とも。琉球芋を多く蒸して。半切の桶に入れ店の四隅便宜の處にすゑ置きて。十五歳以下の小厮の走り廻りをするもの。恣にとり喫せしかば。日毎に穀をこぼさしこと。大かたならぬと聞えたり。又兵法をもて世にたりとせし。其氏あり。この避穀の方をもて。夫婦共に穀を喫らざること十五日にして。恙なかりしといへり。その何の方を用ひたるかまらねども。救飢避穀の方の少からぬ。只予のいだし経験せざるのみ。こゝにその二三をいふ。

一方に云。白茅根チガヤを洗ひ淨め。細かよして。或は石の上で晒し乾し。搗きて粉として水をもて。壹匁を服すれば。穀を避けて暫不餓といふ。又一方に。赤小豆一升。大豆一升。各その半を炊て。共に搗きて粉となして。一合を新水もて服すること。日々に三度。その三升を用ひ盡すとき。十一ヶ日を経て。不飢といふ。一説に。小豆をくらへば。津液小便より去りて。人をして瘦せしむるとも見えたり。

又一方に。松樹のあまをたて白茅根壹斤。人參一兩。白米五合。右三種を粉となして。よき程に丸し。蒸籠もてむして。軍兵十五人に配分すれば。一劑をもて三日づゝたもつものど。この竹中半兵衛が救飢の方なりといふ。これらのちか比。水府の警官原氏が菅草イノコも見えたり。又原氏の家方なりとて。同書に載せたるに。

白蠟一斤。南天燭子。氷砂糖各半斤。

右蕎麥粉の粥もて。桃の實の大きに丸し。日々に一杓を服すれば不餓。戰陣に臨みて。嚼みくだき。水もて服すれば。氣不欠。もし飯を食んとほりせば。鹽湯をもて解すべし。このその先人の傳方なりといへり。この他。救荒本草を考ふべし。さのみを録し盡さざるのみ人まらかくのごとくなれば。犬猫の瘦せ衰へて。骨立して道路に卧したり。五六月のところよやありけん。松島町なるむかひの武家の大濶ウツに。瘦せたる犬のうちつとひて。草を喫ひあたりしを。予のまのあたりに見たることあり。かゝる類多かるべし。さる程に。五月晦日のことよやありけん。この夜戌の比ヨシ及に。俠客どものむら立ち起りて。麴町なる米商人の群いちくらを理不盡に破却せり。これぞ世よりちこわしといふものゝ手とじめとぞ聞え

たる。かくてその次の日より。或は四五十人。或は百数人。一隊となりて。江戸中なる米屋の店を破却せること。日として間斷をかりけり。はじめの夜中もしくは早朝のみなりしが。後より白晝もこの騷劇あり。その破却せる物の響。罵り叫ぶ人の聲。弗撥露塵として。十町の外に聞えたり。予は京橋南傳馬町なる。米商人萬作が店を破却せられし迹へゆくりなくとほりかゝりて見てける。米穀のみを俵を斫斷て。その店前より引きちらし。衣類雜具の篋筒。長櫃をうち破りて。路中へ投げ棄てたれば。ゆくもの道をさりあへず。その米を拾ひんとて。貧民の妻婆々小女さへ乞兒と共うちまじりて。袂に廻みこみ。粟より有さまの。耻をあらざるもの似たり。さりとて制せるものもなし。このごろ小日向水道町にて。豊島屋といふ米商人の。其店を破却せられし有さまを。予がめのをんなに見たりし。そのことの爲體。これかれ同じかりさといへり。この故に米あき人ならざるも。店のさまの相似たる。破却せられしも間々ありけり。これより。市のかみより寄騎同心を出だされて。制せさせ給ひしかども。勢當るべくもあらむ。只今こゝにあるかと思はば。怒馬として隣町もあり。あふれものどものが中。年十五六の大それたの。いつも衆人より先きたちて。櫓に手をかけ。煙囪に飛び入り。奮撃せること大かたならむ。これに人間

にぞならで。必。天狗なるべしとて。牛若小僧と唱へつゝ。人みな戦き怖れしが。後よその素生を聞きし。大工とらといふものにて。渠十二三のところよりして。身軽く力あり。つねは好みて梁をこたるものなりとぞ。はじめの兩三日の程。甲州も馬を出だして制せんとせられしかど。彼等いかにか角ひけん。搦み捕れしものありとも聞えむ。そのいく隊なる蓋れ者を。いづれの町の誰が店子ぞと。定かよまれるものもあらむ。この故に。うちこわしの奴原あらむ。速に搦み捕るべくも。手よあまらば撃ち殺し。所殺すともけしうのあらむと。いと嚴し町ふれ有りけり。これより町々なる家主よ。おのゝ竹鎗を用意して。夜の暮六つより路次を閉ぢ。店番といふものを輪番せしめて。店中を巡らす物から。もしその店の米屋が家。件のものどものむらたち来て。破却せることあるとき。店番のあてまどひて。拍子木だも鳴らし得む。家主の竹鎗を引き提げながら。路次の戸内よふるひあて。阿容たしくこいさせけり。この事只江戸のみならず。京。大坂も亦かくのごとし。凡米屋といふ米屋の。米をもてるも持たざるも。破却よあひしの關道なすと。六月の末に聞えけり。こと未曾有の奇事といひまし。かくて米屋のなごりなく。破却せられて。そのこといいつとなく。凡一句あまりよしてかき消まごといふ鎮まりぬ。さればとてそのものと

もの召し捕れしとも聞えず。只湯島なる米商人津輕屋三右衛門今の報濟が養父がいち宇のみ破却を免れて。かへつてその一人を撃殺せしといふ。この津輕侯より足輕許多遣して。護し給ひし故とも聞え。或は蔭の者等も。多く錢を取らして。日夜防禦せし故ともいへり。昔享保十七年壬子の秋。五穀熟せず。これより江戸中の米の價。錢百文より白米一升四合を換へしかば。衆俠忽ち群り立ちつどひて。伊勢町なる。坂間といふ米商人のいちくらを破却したること。未曾有の珍事なれとて。故老の口碑に傳へたれども。その只坂間一箇のみ。天明丁未の奮撃に。京攝。江戸の三都會。同月一時より立ちて。進退符節を合せたるが如し。彼坂間のともがらをして。なほも世に在らしめば。將これを見て何とかいこんや。かもふも。享保。元文中に。金壹兩を錢三貫八九百文。或は四貫文よかへたり。天明中の八九合に當るべし。それすら貧民の憤りも堪へざりし事。右の如し。まいて百文より白米三合を換ふよ及びて。破却のなごりなかりしも。おのづからなる勢なるべし。この頃。丁未御藏をひらかせられて。江戸中へ米の價下直よして下されけり。大約一人よ玄米一升五合と定め。隈なく頒下されたる。この御仁政よ人氣感激し奉りて。市中靜謐なる程よ。新麥も既よいで来。古米も諸國より運送入津するより。八九月に至りては。百文より白米六七合よな

りよけり。まかれども。その日稼さとかいひるゝ寒民は。なほ白米を求むるよちから及びて。或は虫をみたる陳米。或は穀麥を一二升づゝ購ひ求めてこれを日毎よ一升徳利とかいふ酒器よ入れ。春精げて炊て食ひけり。この年八九月に至りても。小まへの商人の妻子どもが。おのもく店前よて。いさゝか恥づる色もなく。彼徳利よて米を舂きてをりしを。折々見たることぞかし。されば次の年戊申の春の季よりして。小人の曲子コトバよ思ひだしたよ。去年の五月とくりて米ついたこともあると唄ひけり。これらに里巷の曲子をねども。今も折くうたひせて。魚肉なくて飯のくらわれをなといふ世のよか人の。警よせまほしく思ふなり。まかるよ。丁未の夏饑たる最中。伊豆。上總より鯉の生節を出だし。こと限りもあられむ。その市中を賣りあるくものを買うよ。いと大きな生節一つを。十四文。或は十六文よ買ひけり。又糟小鯛とかいふ小鯛を。日毎よ賣りあるくものも多かりしかば。是も價のいたくやすかり。よりてこの魚肉をもて。飢よ充つるも少からず。天の生民を養ふこと。彼よ虧けば。こゝよ盛つ。等閑よを思ひと。こゝろある人はいひけり。予はこの市中の艱難よありむ。當時某侯よ仕へて。切米の外。月俸をつかよ三口を稟けたり。その月俸のうち。三斗の米を月々よ售る毎よ。價のますこと漸々よして。五六月に至りては。虫の

粟^{フク}にて糶りたる。陳米をのみわたされし。その玄米三斗の價。金壹兩三分^{なりたり}なりたり。されば出入と唱ふる町人等。月俸の^{りたる}日^は未明より宿所へ来て。おん扶持米を拂^せ給^はり。其^は給^はり候へ。餘人より價よく申しうけ候^{はん}などいふもの多くて。粟^はこれかれせりあひつ^ふ。ことばをまひを起^まもありけり。そつかの月俸を^らかくの如し。大祿の人々をさぞ有りぬべき事ながら。よき夢^は又覺むるも^とやさや。これよりて衆^く審みたりといふ人をも見ざりき。かゝる中^はも唐津侯の封内^に。去歲豐作なりしより。かこひ米多くあり。世上米價の貴きこと。今の時^はまもものあらんや。されば年中の月俸を。只今一度^は取らせなば。家臣等の爲^はなるべしとて。その年十二月までの月俸を。五六月のころ^はたされしかば。みな歎^はすといふものなし。あかるも^とかきともがら^ん。俄^は徳つきたる心地して。後々の事を思^はむ。多くの品川がよひをしつ^ふ。秋をもまたてなごりなく。違^ひたりしかば。米の價のさがりしころ。饑^ゑてせんかたなきもありしと。ある人の話^をなり。ことの盛實^は定かならねど。筆のついで^に識すのみ。當時の米價を考ふる。或書^し。五穀無盡蔵を載せて云。天明丁未夏六月上旬。諸國米穀の價左の如し

現米壹石 價銀貳百匁

- 江都^の金壹兩^は米一斗八升或^は貳斗
 - 加賀米石^は 百六拾壹匁
 - 肥後^の 百九拾匁
 - 筑前^の 百七拾六匁
 - 廣島^の 百七拾四五匁
 - 中國米二俵^の價銀百五拾壹貳匁
 - 柴田米七月四日入札貳百壹匁八分
 - 大津澤米石^は 百七拾三四匁
 - 白米一石^の 價銀貳百拾五六匁
 - 小費一升^は 錢貳百三拾八文
 - 岡大豆壹石^は 價銀八拾匁
- こゝの崖略のみ。なほ詳なるものあらんかたづぬべし。又家伯^{シガキ}兄羅文居士の録中^に。近世荒饑略考の一編あり。謄寫^をること左の如し
- 寛永十九壬子年春より夏^は至り。飢饉餓死多し
- 今年迄百四十六年

延寶三乙卯年天下飢饉餓死多し

將軍家下命從三月至五月。於北野七本松原四條河原。貧人を集。粥及米錢施行

今年迄百十四年

天和元辛酉年十一月。江戸飢饉爲御救米三萬俵被下之

今年迄百三年

同二壬戌年二月飢饉餓死多し。三月洛陽大雲寺普願寺法輪寺。此外。於諸寺錢施行。又餓死

今年迄百二年

の爲。一七日施餓鬼供養於北野松原從將軍家粥施行

元祿九丙子年自夏至秋。中國稻虫生す。西國大名衆拜借餓民御救

享保十七壬子年關東五穀不熟。依之窮民御救

今年迄五十四年

寶曆六丙子年五穀不熟。窮民御救

今年迄三十七年

天明三癸卯年關東五穀不熟。江戸及奥州飢饉。此節五千俵田沼山城守に被下之。信州淺間

山燒崩。溺死多し。窮民滿道路。依之被命於領主以鐵砲追之。或ハ打殺之

今年迄五年

同七丁未年自春至夏江戸及諸國飢饉。至五月白米三合代錢百文に及ぶ。都下の使者及餓

民等。江戸中の米屋を破却闕遺無し。京。大坂も亦如此。至秋鎮る。追日爲御救米。直段下

直に被下之

右友人吉岡雪院録して予に視之。因謄寫了といへり。解云。當時を考ふべきもの管窺鏡にこれらにすぎむ。天明の季より寛政中に至りても。米穀の價いまだ廉ならず。これより關東地廻りの酒造を禁めさせて。且池田伊丹も醸酒の斛高を減じられたり。是より先寛政二庚戌年。江戸町中の法則を定め下され。數ヶ條のくだしぶみを彫刻して。一冊となし。入銀百廿四文と定めて。町役人及家持の町人等も頒ち取らし給ひき。この時、當りて。江戸柳原の東北あたらし橋の向に。義倉を建てられて。これを物藏町會所と唱ふ。をな^即ち江戸中町入用の中。無益の雜費を省かしの給ふこと。凡八分。その中七分を毎月物藏町會所に納めしめて。窮民を救はせられ。且荒年、備へしめ給ひぬ。無量廣大の御仁政これを仰けはいよ、高し。孔聖仁を先よして。食を後よるもの。定よゆあるかな。星移り物換りて。御規定の町法も頗變替したりといへども。義倉は猶巍然として。向柳原の外。又二ヶ所。その礎と共に朽つるときなき。假令今より後。凶荒年を累ぬとも。天明丁未の夏のごとき。四民困窮して屋を壊り。物を損ふに至るべからむ。且丁未の念劇も。餓民等唯米商人の奸詐貪婪を憎み恨みしのみ。露むかりも野心のものなし。便是神州忠直の人氣の

のづからなるものにして、異朝の及ぶ所はあらむ。あかしながら、亦かけまくもかしこき。上への御至徳御威光によるものなれば、萬民各々業を奨めて、驕を祛け、泰平のうへもなほ泰平を樂ふべきこと勿論なるべし。よりて録して、みづから警め、人を廣むること伴の如し。

再いふ。予丙午丁未和漢災變當否の辨あり。あまりは編の長くなれば。その又別あるをべし。この餘。文化以来歳豊作りちつゞきて。米穀の價。或は金壹兩一石二三斗。或は石五六斗。又所よりて二石餘なるもありし事。是より。諸家命ぜられて。米粟を多くかこひしめ給ひ。又江戸町中も。その分際應じて。戸毎に米を買ひ入れさしてかこひしめ。いく程もなく。その事やみて。その米を御あげになりし事。文政に至りても。江戸中の商人等。物の價を一より引きさげて賣れとふれられし事。當時士農豊年を憂ひとせし事。今致に至りて。奥州半熟の聞えあり。美濃の洪水よりて。人多く溺死せし事。甲州の蝗の風聞のある事まで。悉くあるし盡さば。その間も亦論辨のなきはあらねど。かゝる事への憚の關をいかゞせん。予は壯年より筆とる毎に。謹慎を旨として。禁忌に觸るゝこと記載せむ。見ん人これをおもひぬかし。

附けていふ。この兔園の集建り。必。月の朔日よをなるを。米ぬる霜月。文賢堂のあるじをべきを。さゝることありとしも聞えし。けふなん。關東陽の誕節なればとて。その祝席を相兼ねて。社友を海棠庵につどへられしなり。よりて。いさゝかことほどのこゝろをよみて。おくり物よかふ。予がたこれ歌

よきたねのみむとし日とて筆柿のこぎも燕せし君をことぶく

黄鳥いまだ谷をいでむといへども。時今小春にして喬木も遷るのおもひあり。交遊無愛の情こゝよ言なきことあたはむ。莫逆風流の佳席。燭を續ぎて長夜の關なるをおぼえむ。そもく亦愉快ならむや

文政八年乙酉十一月の兔園小説第十一集中の一編

同年の冬十月廿三日

玄同陳人 解識

右校編數萬言楷數二十有五頁。所臨寫印本五頁亦在其中矣

著作堂云。丙戌春正月下浣。關嶺南の通家宇多氏名良直の隨筆。消暑自適を聞せし。

その編末に。天明荒凶の一編あり。こゝに抄録して。もて比較し充つると左の如し。龍齋云。予が犬馬の年つもるうち。天明の頃ほど凶年の繁きことなし。先天明二寅年七

月十四日の夜。丑の刻もやあらん。当地の地震おびたし。翌十五日夜戌刻前夜の地震よりも甚しく。老人子供など足よわなるは。歩まんとして倒れたり。あかきものとても氣力の弱きは。目くるめきて。漸く這ひ出で。行燈などのみをゆりこぼし。山林は響き震ふ音。物まごく。予が幼き頃なりしが。外は戸板をならべて家内打ちこぞりて。夜を明し。なり。翌朝に至るまで。ふるふこと十五六度。及べり。とりまけ相州小田原邊殊に甚しく。箱根山及城中石垣崩れ。民家多く破損し。人馬のそこなふもの多し。大山よては三四間。又は七八間もあるべき岩石崩れ落ちて。人々膽を冷せりといへり。八月四日。江戸海邊は津浪の變あり

天明三卯年早春より。四月頃に至るまで。当地のいふに及ばむ。諸州諸所は大小うちませて。火災またおほし。三四月頃京都及五畿内。時候の寒きこと冬のごとく。時雨降りて暗曇久しく定らむ。六月十七日關東筋其外諸州洪水。北國。西國は海上大風よて。通船破損多し。大抵米相場も引き上りて。上方よりかけて。一石は百二十目ぐらゐなりき。當地に至りては六七十兩迄も至りしなり。七月朔日より八九日に至りて。北國。東國及京都。大坂。江戸。伏見。大津等山谷鳴動を。同日より上州。信州の地影しく。震動して雷鳴のごとく。

砂石降り下ること雨の如し。六日夜に至りて。殊に甚しく。七日は白晝闇夜の如く。岩石を飛ばし。其近國諸國熱灰を降らしぬ。此時淺間山及草津山等燃え出で。烈火散亂す。八日未の刻。熱沙熱泥を涌出し。利根川の水の上は溢れ。其近國の諸村を漂没し。民家を破損なし。人民及牛馬鳥獸魚鼈死亡し。或は水火の爲に死せしもの四萬餘人といへり。七日夜より九日に至りて。江戸表も一天くもりて。日の光を見む。灰降ること雪の如し。廿四日北國西國の海上大風あり。冬御切米百俵四十六兩の張紙なりき。十月二日北國九州の洋中大風。同じく十一日大坂雷鳴甚しく。同所大手御門雷火よて焼失を。此後冬中大小の火災度々なりき

天明四辰年正月より。未申の方には彗星あらはる。米價甚しく。春御借米百俵四拾八兩の張紙出。夏御借米も四拾八兩なり。町相場なるもの。上米に至りては六拾兩以上なり。公より米を出だして貧民に賜ふ。世の人横田火事といへるも。十二月廿六日鍛冶橋御門内横田筑後守より出火よて。殊に大火なり。此年の奥州南部。仙臺。津輕。八戸領等大に飢饉なりき

天明五己年。米價百俵は五十兩前後なり。八月十二日。五畿内及東海道筋洪水

同六丙午年正月朔日日蝕皆既。大小の諸星東方にあらそよ。白晝くらきこと黄昏よも過ぎたり。此春中火災繁きこと。其數をあらむ。其中に正月廿二日湯島よりの出火。殊更おびたゞし。五月頃より天氣甚不順にして。土用見舞に綿入をかさね。老人のともがらの猶寒さよたへむといへり。さればいやしき口をさびよも

春の火事夏のをゞしく秋出水。冬の飢饉とかねてあるべし

七月十二日より大雨篠をつくがごとく。一向に止みなく。十四日より。當地洪水にて。目白下大槻崩れ。牛天神下小石川邊満水。其深きこと五六尺に及べり。御茶水昌平橋。淺草御門柳橋邊一面に大水にて。往來もとゞまりぬ。又上野。下野。秩父等の山水俄に發し。烏川。神川。戸田川。利根川等大水漲ること數丈なり。同十七日曉に。熊谷の土手裂けて。栗橋。古河。關宿。越谷。杉戸。千住。大橋。小橋。小塚原。淺草邊。本所。隅田川。向島。秋葉。三國。牛島邊に偏に海の如しといへり。天橋。永代橋流れ落ち。其外小橋の類にふるまよいとまわらず。兩國橋に數百人の人夫をもて。漸に防ぎ留めたり。淺草。並木。駒形。御藏前。八町。天王橋邊。船にて往來す。同所觀音堂他所よりも高し。諸人此堂舎に登りて。水を避けしもの多しとなん。又此頃東海道の。酒匂。馬入。六郷等の川々往來なし。鶴見橋も已に流落し。神奈川新町。藤

澤の宿々。満水にて往來止め。十八九日に至りて。諸方の水勢漸く減む。此時分。愛宕山切通の土手。山王山。三田春日山。麻布狸穴等の土手又崩れて。人多く死せり

此秋の洪水に溺死せしもの。萬をもて算ふべし。濁水に乗じて。蛇蝮の類に幾千となく漂ひ來りて。人身につくこと甚しく。誠にあわれなることいふむかりなし

此年のそやり唄。「天然のあまの川に白小桶が流れた」とうたひしが。天に口なし。人をもていひしむるならひよ。果して其あるしむなしからずして。洪水の變ありき。いよしへ。孔子も童謡にて考ありしこと。家語等にも見ゆ。濟きたることよにあらし

米價打ちつゞきて貴く。冬御切米百俵四拾三兩の張紙出でしなり

九月に倭明院殿かくれさせ給ふ。ならびなき大山の年といふべし

天明七末年打ちつゞきたる米直段。當春に至りてはますます貴く。春御借米百俵五十兩の張紙出。上米の相場に七十兩以上なりき。夏御借米五拾二兩にてありしが。五月に入りて米價いよゝ貴く。百三四拾兩となり。今日を送る市人等。已に飢に臨めるもことごとくぞかし。五月十九日より。江戸中米穀の商ひを業者の見せよ。打ちこひし亂妨なまこと甚しく。百人二百人。その黨を結び。時々ときの聲をあげて。晝夜のどかちなくさどさあるく

米屋からぬ
家をも物と
りの爲に亂
妨せしむ
あらむ。そ
の世の米
屋に似たる
あき人。或
は酒屋解屋
を切や。
をべて食物
もの見世
の打ちこ
にされしも
有りしな
り。そのと
は杖を打た
れしとて。
銘々見世
先へ。さ
り水かど出
だしおき
て。あふれ
もの等よの
ませよき

體。さながら戦世の如しとおもてる。夫より端々に至るまで。皆人氣かくの如し。後よ米商賣よかゝそらむ。見ほしき町家よ打ち入りて。手よあたるものを持ち出だして。其町内よても防くべき手段なく。或は酒を樽ながら呑口をそへ。或はかゞみをぬいて。柄扱をそへてもてなしとせり

此時名の忘れたりしが。何がしといへる大名。家中へ渡すべき扶持米とて。其本家へ無心して。貳拾俵計車よて。警固も大勢附き添へ来りしよ。鯨ヶ橋よて打ちここのの一むれ。百人計も追取巻きて。車の米申し請けたし。もし異議ある上の。カづくよて請取るべしとて。きそひかゝれる大勢のやうすよ。なすべきやうなくて。宰領の足輕三四人も。命からくぐりまぜ。追取刀よて馳せ至りしが。車ともいづくへ持ち行きしか。其行方あるべきやうなければ。各齒がみをなじつゝ。手をむなしく歸れり。因りておもふよ。人心一たびうごきて。何様の事をまいたすべきもまれず。されば。前漢の賈誼が言よ。安民可與行機。而危民易與爲非とあるの。ならびなき名言なり

此時町奉行曲淵甲斐守。山村信濃守なりしが。町家のやうを見廻らんとて。大勢よて出で

しかど。西河岸邊よ三百五百の組を立てたるあふれ者。大毛など積みまうけ。無事なる時の奉行を恐るべし。此節よ至りて。何の憚るべきことあらん。近付けば打ち殺すべしと。口々よのしりし故よ。兩奉行もすごとくと引きとりきとぞ

日々かくのごとき故よ。御先手十組の面々。安部平吉。柴田三右衛門。河野勝左衛門。安藤又兵衛。小野次郎右衛門。松平庄右衛門。長谷川平藏。武藤庄兵衛。鈴木彈正少弼。奥村忠太郎。各與力同心を召し具して。江戸中端々まで廻りしが。何の仕出したる事もなかりき。其頃の取沙汰よ。御先手の面々。物馴れたる同心よ道をそらひせ。打ちここのの一むれある所をば通行せむして。脇道をのみ廻りきといへり

予がまれる御番衆。五月十七八日の頃か。御借米を受取りしよ。其日の相場貳百五兩なりき。われら其頃の。小普請よて。六月の中旬頃よ。玉落ありしが。そや大よ直段も引き下れりといひしが。九拾八兩貳分よてありき

此時分。町家よて。白粥。あづきかゆ。黍挽りりを以て。最上とし。豆めし。そら豆めし。芋めしを上食とし。ひむめし。さらき飯。或はうどんの粉のつといれ等を。その次となま。甚しきよ至りて。得たらぬ野菜をおほく鍋よ入れ。鹽よて少し味をつけ。其中へひえの粉様

此町觸れよ
 よりての打
 まりし江
 戸中の米
 共を不残
 入氣ゆる
 入上る米
 下直は
 下といふ
 開より風
 漸々より
 鎮まりし
 り鎮まりし
 多く入牢
 しこの打
 て。物を
 盗み。中
 と閉きぬ。
 此打このし
 の五下初
 初より六
 一初より
 全く鎖り
 也。その中
 甚しかりし
 の程。四五
 日

の物をふりちらして食とま。又さらすきの如くは切りて。ほろろくへかけて。よきほど
 よこがし。それを挽春よてよくひき。だんどとなしてくらへり

予があたりの土手原もある。可なりは食となるべき草。みなとりつくせしなり
 奥州筋よて。鳥獸を食し。或は子をとりへて飢を志のげりといへり

此打ちこそしの時。公より一町内の人別をあらため。其人數程竹鎗一本づゝもたせ。白き
 手拭を志るしと定め。もし他より亂妨のもの来れば。拍子木を以てうちならす時。一同
 は集ふべしと觸れられしが。程なく騷動止みたりとなり。是全く其町内より出でしもの
 も。他の者よ交りて。こが町内よも夜分など亂妨せしゆゑ。町切よかゝる觸出でし故。一
 皆志づまりし。當意即妙の事とぞ

此節あふれ者共も。召し捕れて。入牢せしものおびたしく。假し牢をも志つらひしとい
 へり

此打ちこそしの騷動。五月十九日より廿二日まで。鎮まりしが。廿四日頃より廿六七
 日の間。米穀の賣買更まなし

米商賣の者。六月二日頃より米賣り出だすべき合ありしが。一體米拂底なる故。手段

なくて。只其町ざり番屋へよて。百文よつきて四合づゝ賣りしなり

百俵五人扶持以下の御家人への。御救米拜借被仰付之。六月に入り。町々への御まぐひ米
 御救金壹人よ付三匁貳分。米豆合而五合づゝ被下之

米穀拂底よ因りて。津々浦々迄御救方の事。關東御郡代伊奈半左衛門よ被仰付之。半左衛
 門計ひよて。大麥兩よ壹石。米の兩よ四斗の積りをもて。江戸町中へ御まぐひ米あり。尤右
 代物の五日め。差出候へば。又候其跡の米麥とも賣りわたし觸れられしなり。但壹兩
 なり。四斗の相場百俵よて。ハ拾七兩貳歩の積りなりとぞ

此米直段の至りて貴かりし時。をかしま物語有り。吉原よて何がしとかいへる雙びを
 さ名妓ありしが。常の文雅風流なる客を愛し。文才なき野俗なる人物よ。殊に愛相も
 薄かりき。此飢饉よ至りて日頃と違ひ。入り来る客をば雅俗をえらまむ。もてなしも厚か
 りし故。一家のもの共大に不審し。其操のかとりしことを難せし。名妓のいへる。不
 審し給ふこと道理よ聞え侍る。必竟此頃しも日々雜食のみよて。いか快らむ。客来れ
 ば。米の飯を食しまらする故。客を愛するよてなし。只口腹を愛するなりといへる
 よて。此時分の米の賣なるを志るべし

予が方へ出入する大工作事を。外より受け負ひし。焚出しの米をととのへんとて。拾兩付の金をふところよし。米商人の方へ終日あるきしよ。やうやく五升三升づゝ買ひ集めて。三斗よの足らざりしとて。常ノ物語せり

此年のいづれの人とても。空腹となり易きこと至りてこやく。朝飯すみぬればこや晝飯を待ちかねしなり
米をくなき時節よ。北斗よさゝふる程の黄金白銀ありとも。更ニ益なし。米の壹ケ年も。二ケ年も餘りある程よ。手當ありたきものなり。前漢の晁錯が論よ。珠玉金銀饑不可食。寒不可衣とい。古今不易の確言といふべし

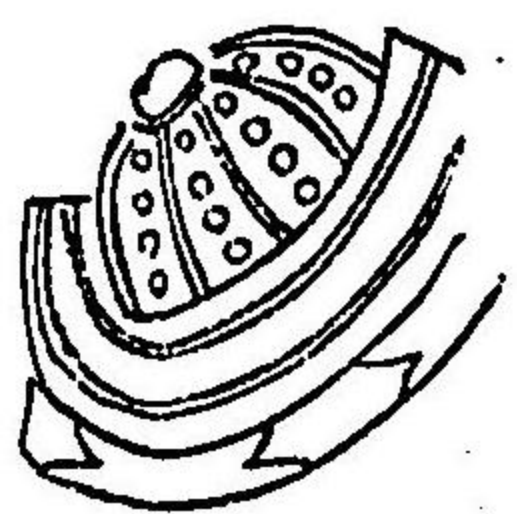
天明八申とし正月晦日。禁中及堂上衆武家寺社市中等火災の大變あり
神祖海内を統御ましくしてより。二百年の今日まで。四民其所を得ざるものなく。三代の治といふとも。恐らく此うへよ過ぐまじ。昇平の世よひとり恐怖をべきもの。火災よますことなし。平賀源内の工夫せし天龍水といふもの。製作をしたらば。雙なき防なるべきよ。其舎の内よ。なき人の數よ入りし。惜むべきこととして。司馬江漢なる蘭學者語りき。いかなる防きの器なりしよか
消夏自適天明の凶年編全

この記を筆せし鱗齋ぬし。その職分官府の御舊記を窺ひ見る事の自由なる故
よ。當時の御沙汰と地名歲月時日まさしくも具よあるされたり。但市中の事。風聞の説よ至りて。いかよぞやかもふよしなきよあらぬを。そのくだりよ聊かしら書を加へたり。前編と彼は比較せば。後生の爲よ裨益あるべし

文政九年丙戌春二月十七日雨窓よ謄寫了

○助無

後三年繪詞よ云。伴次郎備杖助無といふものあり。さななき兵なり。常ノ軍のさきよたつ。將軍これを感じて。薄金といふ鎧をなんさせたりける。岸近くよせたりけるを。石弓をこなちかけたりけるよ。すでよあたりなんとしけるを。首をふりて身をたぬめたりけれむ。かぶとむかり打ちおとされよけり。冑落つる時。本鳥されよけりとあり。接するよ。此時助無本鳥を冑のてへんより引き出だして。着たる者なるべし。繪巻物よあり。此圖のごときあり。助無もこの如く。かぶとを着たる故よ。大石の落つる勢よ。本鳥ともよされたるなり。冑の下よ本鳥を折り曲けてあらんよ。大石ようたれたればとて。冑と



ともよ本鳥のされがたかるべし。又源平盛衰記。志の原合戦の條よ。入差小太郎。高橋判官と組みたる所よ。入差が叔父落ちあひて。高橋が胃のてへんよ手を入れて。首をかくとあるも。高橋本鳥をてへんより引き出だして。着たるなるべし。折り曲げてあらば。てへん大なりとも。本鳥を志かとりがたからん。是をもて。助無の胃をきたるさまをおもふべし

○参考太平記年歴不合

参考太平記元弘三年。後醍醐帝船上山へ潛幸の條よ。伯耆の巻を引きて。奈和長高が三男乙童丸とありて。小注よ。正六位上。四郎左衛門尉高光。建武三年十一月一日。於西^{ホノ}の第^ノ三番の第の乙童丸十四歳なるべきやうなし。其うへ次男の孫三郎基長^ノの。土用松とて三歳の男子あり。これをもて見れば。高義たとひ若年なりとも。二十あまりなるべし。悉く小注の誤なり

○若鷹

群書類從 定家卿鷹三百首

あまたとやふませて見むや。いまだよも古木居よ似る秋の若鷹

此四の句。予が藏本よと。ふるとびよ似るとあり。これに古鷹よ作るかた勝れたり。古木居よてい。歌の心何とも聞えむ。すべて大鷹の今年生ひの若鷹の。形容さながら鷹よかいらざるものなれども。一とや経れば。毛色淺黄よなりて。夫より鳥屋を出づる毎よ。次第よりるいしくなるものなり。歌の心もあまた。とやをかへたらば。毛もかひり。うるいしかるべきよ。今の鷹よ似て。きたなげなりとよめるなり。此四の句。とびと假名よてありしを。こひとよみて。やがて木居と書きたるなるべし

乙酉臘月朔日

龍珠 志るナ

○漂流人歸國

乙酉八月の頃。五島侯の藩士横山慶吉の談よ云。今茲五月水戸沖へ異國船来て。日本の漂流人十一人を送りかへしたる中よ。水夫一人。主人領處。五島目井津の者よて。重次郎といふものなり。官府の御吟味済みて。當八月本藩よ引き渡しよなりたり。年三十恰好よて。随分利根よ。物の分りたる者なり。其者よ五島侯より。異國船中の事共尋ありし口書の寫。左の如し

乙酉八月廿一日。重次郎を呼び出だし。問ひて云。其方事。御在所何方之者よ候哉。雖船よ

遭ひ、異國船へ乗り移り候一件、御詮議相成。此度御勘定奉行より御引渡有之候。是迄之次第。始終具可申聞候。

答へて云。如仰私儀。目井津出生御座候。水夫之義御座候へ。十六七の比より大藤津得丸。軍藏船權現丸へ乗り候ひて。船執行仕罷在候。然處。右軍藏大坂表借用多く。同處留船相成候。付。其後白江町長次郎と申者の船へ乗候而。三四年も上下仕候所。右長次郎儀も。大坂表借財多く。同處留船相成候。然處私風と病氣被取付。十四ヶ月知人の方罷在候而。養生仕候處。快氣致し候へども。病中の物入。彼是。都合七百目位の借用相成候。依之御國許へ罷下り候儀も難相成。彼是心配罷在候内。知人の許より申聞え候。兵庫足屋仙吉と申者の船。水夫無之由。此船相乗候て。持可申旨申聞候。付。右仙吉船相乗候而。三四年も蝦夷松前の方へ通ひ。賣買仕罷在候。然共格別之利益も無御座候。付。去霜月より大坂柏屋勘兵衛と申者の船へ乗り候而。江戸行き荷物諸色積入。去霜月廿八日同所出帆仕候處。順風にて急き紀州三濱と申處へ着申候。翌日も相應の順風と存。同處出帆仕候處。四時頃より西風強く。東南を向候て。風任せ。流候内。一向山も見え不申相成。風彌強く。其上沖中の事御座候へ。船持留がたく有之候。柱を切り。荷物を打捨候て。

相凌候處。彌風波強く相成。橋船二艘共二つ吹折れ。船も打折候。付。如何共致方の便無之。沙合合せ流行申候。然處。三月末とも覺候時分。二三日の間水切。一統難儀仕。助命之程も難計御座候。付。乗組中髪を切。神佛へ誓願仕候處。冥慮叶候哉。其夜四ツ時比。一も候哉と覺候時刻。俄大雨降出候。付。櫓より桶を掛け。水溜二つ程取入候。一難を相免れ候。内拾三人乗之。内貳人病氣。付。乗組中。彼是氣を付候へ共。永々の漂流も勞候哉。相果申候。何方之沖共一向相分り不申候處。四月十日比。一も御座候哉。遙異國船と見請くる大船相見え候内。次第近寄候。右唐船より橋船を叩し。迎罷出候。付。一命も難替。直様乗組中拾壹人共。異國船へ乗移申候。然共一向相互。何を申掛候ても。相分り不申。繪圖面打出し。日本の富士山などを繪かき。此山下より風放たれ流候哉とまで。手様していたし候。付。其通りと相黙頭罷在候。左候て菓子杯喰せ。彼是一統氣を付候。付。乗組中拾壹人共。安心仕。乗船いたし居候内。何方へ列行可申哉。右之通り大船。帆柱拾壹本も立て。風任せ。廿四日も走りし處。柱へ上り。速目鏡にて日本の山見え候。付。四五日之内。日本の地へ着可申手様。て爲知候。付。皆々相歡候内。申聞候通。五日目相成。彌日本の山と見え候て。漁船相見え候。漁船より異國

菓子組

- 一 饅頭 五十
- 一 羊肝 七棹
- 一 薄皮餅 三十
- 一 茶 十九まい
- 一 まんぢう 三十
- 一 鶯餅 八十
- 一 松風せんべい 三十枚
- 一 澤庵の香の物丸のまゝ 五本
- 一 米まんぢう 五十
- 一 鹿の子餅 百
- 一 茶 五盃
- 一 まんぢう 三十
- 一 小らくがん 貳升程
- 一 ようかん 三棹
- 一 茶 十七盃

神田

丸屋勘右衛門

五十六

八町堀

伊豫屋清兵衛

六十五

麹町

佐野屋彦四郎

二十八

千住

百姓武八

三十七

- 一 今坂もち 三十
- 一 煎餅 貳百枚
- 一 梅干 壹壺
- 一 茶 十七盃
- 一 酢茶とんよて 五十盃
- 一 茶漬 三盃

飯連 常の茶漬茶碗にて。萬年味噌よて。茶つけ香の物ばかり

丸山片町

安達屋新八

四十五

麻布

龜屋左吉

四十七

淺草

和泉屋吉藏

七十三

小日向

上總屋茂左衛門

四十九

三河島

三右衛門

四十一

丸田小説

五十三

- 一 同六十八盃
- 一 醬油二合

- 一 飯五十四盃
- 一 たうがらし五十八

- 一 同四十七盃

鱧連いづれも其
鱧の茶づけ

りなきすぢ

一金壹兩貳分

本郷春木町

吉野屋 幾左衛門

七十五

中きぢ

一金壹兩壹分貳朱

深川仲町

萬屋 吉兵衛

五十一

同

一金壹兩貳分

淺草

富田屋 千藏

飯七盃

兩國米澤町

米屋 善助

四十八

一金壹兩貳朱

飯五盃

蕎麥組各二八中平盛
尤上とば

新吉原

桐屋 惣左衛門

四十二

一五十七盃

淺草駒形

鍵屋 長分

四十五

一四十九盃

池の端仲町

山口屋 吉兵衛

三十八

一六十三盃

神田明神下

肴屋 新八

二十八

一三十六盃

下谷

藤中 之人

五十三

一四十三盃

小松川

吉左衛門

七十七

一八寸重箱よて九盃

豆腐汁三盃

右にゑるす数人の濱町小笠原家の臣。某との會よゆきて。見つるよ違なしといへり。人の飲食の量。大概限りあるものよて。いと疑ひさまてなり。されど予いぬる日。お玉が池なる

縁家よゆきしとき。新川の酒問屋衆名の忘れたる喜兵衛といふもの来て。このもの水を飲むこと天下第一なるべしと自負するよしなれば。いざとて一升餘も入るべき器に水を十分入れて。出だしよ。忽貳碗をのみほして。さていふ。おのれ既^レ飯を喫して。いくほどもなけれむ。多くのみがたし。食前ならんよ。今一貳碗は容易しといへり。予が目撃せしものこの喜兵衛が水と。九鬼侯の醫師西川玄章が。枝柿を百食ひしとなり。かゝれば大食大飲の人口。腸胃おのづから異なるどころありやしらす

海棠庵記

○風流祭

つくしの道のしりの國風流。ふりうといふ神神さざ有りけり。そそ八月よりなが月かけて。新しねを狩り得て。そつ穂のかけちからをたむけよホウひらほりのしろ酒をかみて。處々の産神の御社よどものまなる。年ごとの定まれる日次もあり。そた稻どもみな納めたる後^レ祭るもあり。あるこそその月の初^レ。神閨といふ事して。日をうら問ふもあり。されば二度の月見るところを。けふくれの邑。あまの彼のさとのなといひのしりて。民のかまどに。けぶりよざしく立ちけぶる成りけり。殊^レことしの豊けきたのみを得たればと。か

ねてより悦びあへれば。いとゞしく競ひつゝなんもの来る。こゝかしこのさまども見あつむるよ。いさゝかづゝのたがひめをあなれど。大かたにおなじさまよど有りける。みこ神典しなどかきいだす前^レ。傘鋒といふものを立て。御社の前^レ居て。大なる鼓^レ向ひ。撥を額^レ當て。おなじさまよそうぞきて。面持足ぶみ。いとまづけて。歌をなんうたふ。さてかたへのものども付きてうたふ。諸あげともいひつべし。謡ひ終るを持ちとりて。うつなるが。女撥男撥などいふ名ありて。打手ども飛びちがひ。入りかたりつゝうつ。拍子いさゝかもたがを。聲を揃てやおそとや。しごととして打つ。笛。鼓。鞆鼓やうのもの合するも有り。鉦をも交へうつも有り。神々しさいんかたなし。里かぐらともいひつべく。いよしへめきたり。かくて。みこしをかき出だすより。御跡^レ立ちてうつを。道ゆきといふ。拍子又ことなり。橋を渡るとさや又拍子をかへて。橋かゝりよて二かへり三かへりあそびてゆくなり。又別神の社の前をまたるよも。かたのごとく。手向つゝゆくよ。村長が門のへよと。かねて大春をなん持ち出て置くなる。太鼓をすうるまうけ成りけり。こゝよてもかこよても。二歌三歌どまひあそぶなる。かくしつゝ日暮れて。歸りてと。曉かけて遊ぶなれば。こゝかしこのつゞみの音。よるひるたえまもなくぞ聞ゆる

豊秋を神よまをまときとかぐら。月のよかけて鼓うつなり
又おなじころをよめる

豊秋の稻かり月と露よぬれ。時雨よぬれて立てる民のも
夕月の影も利鎌よかよふまで。秋の山田を狩りくらしつゝ

いよし年。江戸に在りけるをり。山東醒齋よ問ひとられ。なよくれの物語せし序よ。風流祭
のことを語り出でたるよ。いとよろこばひて。ほごの中よりとり出でて見せらる。右の
記を引きて風流渡大路云々。傘鉾如常云々とかいふ事ありしとおほゆ。又醒齋語らる。右の
今の大城の御能よ。としあるとき蓬萊風流とか。鶴龜風流などやうに稱へて。驚大藏など
いふ家の子のものまなる。これいよしへの神祭よせし風流の。繞よ残れるなりけりと
かたりき

解云。この風流祭の。いよしへの田舞のなごりなるべし。田舞のこと。拙考あるま。いと
長やかなれば。いとまあるをりよ。別よあるまべう思ふのみ
風流祭よ讃ひ采し歌

高さ屋よのぼりてみれば。煙たつ民のかまととよざらひよけり



風流祭の圖

君が代の久しかるべきためしよ。かねてぞ植ゑし住よしの松二道

長からうきよけの花のなからで。いらぬ栗の花のなかさや

さぐりの引きよのなうらて二道柴よこそなれハリオリハリいせ人こひがごとしけり

といふ句うたを

家持歌

かさぐりの云々

庭燎歌

み山よとは云々

こそ風流祭のさまを盡しかきてよと。公和の乞ひるまよ。そのあらましのかたちをかきたるよ。又その言書をもと。そのかされて。端よこまるしつるなり。いとよいかよもしつれて。いひまほしきこともおほかたともらしつ

西原 晁 樹

この記事の。このごろつくしの校江より贈りこしなりけり。兔園のまとあよも。此會既よ終りなれば。なよをがなまるしつけなんと。かねてのおもひ起しよかども。いぬる月のなかばごろより。いとく事の蟬集して。これかれ捜し索め得む。とやけふよもな

りぬれむ。せんかたなきの一二條をとう出て。社友の席本よ披講をと云ふ

文政乙酉嘉平朔

海棠庵再識

○邪慳の親

南部一の戸よをめる名忘れもの。いかなる子細か有りけん。妻の病中といひ。殊よ六つよなる一人の娘名忘れを捨て。江戸へ出でたり。妻の間もなく身まかりて。娘を伯父なるもの方よ引きとられ。成長しけるよ。針商人吉五郎といへるものよ嫁しけり。娘とし頃父よ逢ひたく思ひ。手すぢもとめて。便をさけば。今の江戸よて醫業をして居るよし。夫吉五郎よ。其事を告げて。何とぞ一度の江戸へ出でよ。父の行方を尋ねたまよしをせちよ頼みければ。吉五郎も尤なる事よ思ひ。幸ひ此春も針の仕入よ。江戸へ出づるなれば。つれゆかんとて。夫より旅の支度をしつよ。一の戸を立ち出でよ。江戸京橋みまやといへる針問屋方よ着さぬ。こよの毎年仕入よ来ぬる時。吉五郎が定宿なれば。夫婦ともよ。此みす屋よ逗留して。毎日父のありかを尋ねけれども。元より江戸よての名もあらざ。所も定かならねば。手がよりよせんよしも思ひわかで。ある日淺草のかたよ出でたる時。花川戸よ自得齋といふ賣卜あり。此所よて父のゆくへを占ひもらんとて。其所よ立ちより。さまぐとあ

りし事ども語り聞せける。此自得齋。則此娘の實父なりければ。おるまの歡び大かたならむ。夫より父の宅馬道壽命院といふ寺の地内あれば。娘を伴ひ。我宅に兩人とも止宿させければ。吉五郎も安堵して。その身の上方に費用あれば。おるまをば父に預け置きて。上方へ登りける。此おるまの事し十八歳まで。おかも容儀よろしければ。父の自得齋道ならぬ戀慕の情おこりて。ある夜娘を祀さんとしければ。娘の大きに驚きつゝ。さびしく父をいさめければ。其坐のそのまゝと思ひやみぬ。されども是より娘を大よよくみて。吉五郎のかへらざる内。勤奉公に出だして。金よせんとおかりけるを。娘よ告ぐるものあれば。娘の猶更かましく思ひ。京橋をるみまや方へよげゆき。父の恥を申すに似たれども。淺草の居がたし。何とぞ夫吉五郎の歸るまで。かくまひ置き給われとて。おまのよしを語りければ。みを屋のなさけあるものよて。さらば吉五郎の下らるゝ迄。おなたは居給へとて。かくまひ置き。猶又吉五郎方へも。早飛脚よて。大事出来たれば。とく下り給へといひつかのしけり。叔自得齋の娘を尋ねける。定めてみすやへ行きたらんとて。みすや方へ来て。娘を出だしてくれよといひけれ共。さまゝよこしらへて。あせざりければ。大よいかり。彼是むつかしくいひかけ争ひしが。理よかつよしのをかりければ。みを屋よ

り娘をおつがりしといふ一通をとりて歸りぬ。かくて自得齋の。又奸計をめぐらしつゝ。その身急病よて。いと危きよし人をもて告げおらせけり。娘も此事まことと思はね共。こるゝ父をたづねきつるものゝ事なれば。もしさる事のあらんよ。後よ悔ゆるも甲斐あらじとて。やがて父の宿所よ走り来て見れば。紫の如くおら言よて。自得齋の娘を見るより。おどりがゝり引きよせて。いたく打擲し。其上娘の懐胎よて。五月よなるよしなるを。おろし藥をのませて。流産させければ。遂よ血のぼりて狂氣しけり。夫吉五郎の。大坂よありしが。江戸よりの状に驚き。取るものもとりあへむ。夜を日よ繼ぎて下りつゝ。まづ京橋をるみす屋よて。様子を聞きて自得齋が宿所よゆきて見るよ。妻のおるまの亂心しつゝも。夫のかへり来つるを見て。いさゝか正氣よなりたるやうなり。されどもこゝよあらん事むづかしかるべしとて。湯島金助町へ借屋もとめて引きうつりけり。抑金助町よ。太兵衛とて。伯樂を渡せよするものあり。おまゝとて。奥州へ往來せしものなれば。吉五郎との相識るどちなり。故よ彼をたよりて。おま同じ長屋を借りて。夫婦うつり住みたるなり。かくて二三日も過ぎける程よ。おるまの亂心も治しければ。大よ歡び吉五郎の禮ながら京橋みすや方へ行きける留守へ。亦復自得齋来て。いよゝ勤奉公よ出ださんとて。引

またてゆかんとせしを。かたそらありしとした錢を取りて。投げつけたる。父の顔もあたりければ。大に怒り。腰なる短刀を引きぬきて。一突は娘をころしけり。長屋の子ども驚きさきさきけれど。自得齋の悠々として。さのみ騒ぎたつゝ及ばぬ。親も慮外せし娘なれば殺したりとて。聊も騒ぐ氣色なし。されども其まゝようちおさがたく大勢あつまり。自得齋をからめて上へ訴へ出でしとなり。これに文化十四年二月朔日の事とぞありける。

評曰。自得齋のかるすの實父よてりあるべからず。あるまじき占ひを頼まれし時。これぞといへる親子の證據もなく。殊に邊鄙のものと思ひだして。いかよもよくたばかりて。此娘を賣らんと思ひ。賣卜をまゐるほどのものなれば。よきやうに詞を合せ。まことしやかよもてなして。實父なりと偽りしものなるべし。いかゞ國のそてに住むものなればとて。親子の恩愛を忘らぬものやとある。ざるを實のむすめは不義をまかけ。且娘をのませて。墮胎させ。さらし怒りまかせて。殺害する事。よあるまじき事なりといへり。

○犬猫の幸不幸

いぬる十一月廿三日。内藤新宿なる菰籠屋橋本惣八が家にて。河豚を料理ける時。その骨腸を家のうらなる子犬と。家飼うたる猫と食ひける。忽口より白き涎をふき。くるくるとめぐり。七轉八倒して。いとくるしげに見えし程。犬のそのまゝ死しぬ。猫は座敷へよろめき上りつゝ。折ふし座敷の腰張をせんとて。つのもたといふものを煮て。盆に入れて置きたるを。此猫そのつのもたを喰ひける。見るが内よくるしみの氣色うせて。平日のごとくはなりけり。これつのもたは。魚毒を解きものなるか。それをまゐりて。猫の食ひけるか。又いぐるまきのまゝ。何となくくらひしか。自然とつのもたの功よりて。魚毒を解きたるや。とまれかくまれ。犬は不幸にして死し。猫は幸にして免れたり。畜類をら瞬求の間。幸不幸かくのごとく。其數あるものなり。

編者曰。此間、數行を脱したるものなるべし。

文賢一首の秀歌をよみよき。そのうた

まこやかまみのを養ふ老らくよ。あやかりたきの音も聞きつる

この一條は尾州名古屋人田鶴丸ぬしの物がたりなれば。鶴のそなしを龜屋が聞きとり。千秋萬歳萬々歳と。目出度筆をとむるよなん

文政乙酉臘月朔

文寶堂散木志るま

○替婦殺賊

近北の事なり。武州忍領の邊へ。冬時に至れむ。越後より来る替婦の三絃を彈じて。村々を巡りつゝ。米錢を乞ふありけり。或冬忍領の長堤を。薄暮に通過せる。忽後より呼び掛くるものあり。替婦（編者曰。此處もまた脱字あるべし）

即自ら吹くところの管頭（ガビ）を指し向くる。乗じ。替婦摸索し。我が烟草は火の通せざるまねして。大人口づから吹きたまへといふ。盜何の思慮もなく。力を入れて吹く。及びて。其機を測り。忽ち盜の烟管を握り。躍り掛りて。カに任せて咽喉を突く。盜不意を討れて。大に狼狽して。仰けし倒れぬ。替婦直に我が纏袍を摸取し。虎口を遁れて。無ねて知れる村家に投宿し。右の状を語す。翌朝村人堤上より米て見る。盜遂に一烟管の爲に。急所を突かれて死せりと云ふ。七尺の大男子。一替婦に斃さる。又天ならずや（武州忍の在なる。吾次郎といふ者の話あり）

遊庵主人記

○本草綱目云

鹿角菜性食トサカノリ

主治 下熱風氣瘰小兒骨蒸熱勞服丹石人食之。能下石力解麵熱

○倭名類聚抄云

鹿角菜ツノノマタ崔禹錫食經云。鹿茸狀似水松。和名豆乃萬太文選江賦注云。鹿角菜漢語抄云和名同上

○救急選方云

食章魚中毒本朝經驗鹿角菜湯浸化飲之。亦解諸魚毒

右本章よりトサカノリとありて魚毒を解する事に見えざれども。倭名抄よりツノマタとあり。救急選方による時。フノリとありて。諸の魚毒を解くとあり。さればツノマタもフノリも同物にて。こまかき所を布苔に敷し。あらき屑を角岐となすものにて。一種一名として。鹿角菜はフノリツノマタなる事あきらけし。さるゆゑは河豚の魚毒を解くるものなるべし

乙酉臘八

文寶堂再識

兎園犬猫の禍福の條はあわせて御らん可被下候

いさの数 えそ鴉圖考 三十一字

人の息の数。西土諸家の跡をなじからむ。一晝夜より一萬三千五百息。一晝夜をといへる。古米の説なり。或は二萬五千二百息といひ。天經或は三萬六千五百息といふ。晉書かくの如

く大異同あるよりて。人疑ふ所なり。弘賢これを試みし。人の長短よりておなじからず。五人試みし。第一長大の人の一萬八千六百息。其次の二萬二千五百六息。至りて短少の人の三萬四千七百四息。いたれり。其次の二萬二千八息。然れば古采一萬三千五百息といひ。多きに至りて三萬六千五百息といへるも。共偽にあらざるべし。

醫賸多紀安曰。人一日一夜。凡一萬三千五百息。方以智云窮之。蓋洛書之數也。而攷諸書其數

不一。張景賢說一萬三千五百二十息。小學紺珠引胡氏易說一萬三千六百餘息。朝鮮金悅神梅月

一萬三千六百呼吸。一時吸為一息。則一息之間。潛奉天運。一萬三千五百年之數。一年三百六十日。四百八十六萬九千六百息。天經或問二萬五千二百息。呂監行言緒云。一氣之

運行出入於身中。一時凡一千一百四十五息。一晝夜計一萬三千七百四十息。釋氏六帖引晉

息經云。一日有三萬六千五百息也。何夢瑤醫編云。內經曰。脈一日一夜五十營。營運也。經謂

人周身上下左右前後凡二十八脈。共長一十六丈二尺五十運。計長八百一十丈呼吸定息脈

行六寸。一日夜行八百一十丈計一萬三千五百息。按此偽說也。人一日夜豈止一萬三千五百

息哉。據何之言。佛說西說並多於一萬三千五百。未知以何為實數也。

乙酉歲春兔園之一

○麻布の異石

輪池

春秋傳。石の物いひし事を載せて。神靈の憑りたるよしを論ぜり。古采其例多けれむ。今贅するに及ばず。抑余が住める麻布の地。見聞せし異石五種あり。其一。秋月家の園中。三尺許なる寒山拾得の石像。いつの比にや。行夜の卒の蹤より慕ひ来けるを。斬り拂ひけりとして。其瘕痕を存す。其二。長谷寺の内。五六尺許なる夜久神の石像。縋索の諸願をかくる。其驗多し。是も件の園中在りし。長谷の住持靈夢よりて。爰に移すといふ。其三。山崎家の邸内の陰陽石。これを結の神に比して。その願をさくとぞ。其四。五島家の門前大路の中央。經尺餘の頑石凸起してあり。道普請の礙りなりとして掘りける。其根金輪際までも入りたりとして。元の如く捨て置さぬ。往來の人鹽を手向て。足の願をかくる事。半藏御門内の石に同じ。其五。森川家の別墅。二尺餘なる烏帽子形の石。日月の像顯れ出でたる有り。件の園丁茂左衛門といふ者。靈夢よりて。その郷里越後國頸城郡吉城村の畠より得たりといふ。目出たき石と申すべきか。以上の五石。麻布の地に現存して。人皆これを禮拜すること。米家の昔に異ならむ。余天下を巡遊して。異石を歴觀せしこと多し。遠き諸州の灼然を略して。近き麻布の隱微を表するのみ。江都の廣き。本所の駒留石。牛天神の牛石。其餘地藏觀音に至りて。僕を更ふとも其說盡しがたかる

予が家の傍。字を鷹石といふ町あり。昔鷹の形ある石を掘出して。靈異あり。今のな
し。この處。唐豆腐を製して。岩石と名づく。今石のちをみ。兩三甍を獻じて。兎園の一
笑を乞ふのみ

臘月吉日

麻布村學究

こゝ輪地堂の携へられたれば。その編の間。寫しとゞめつ

先會。今日の主の出だされし無名鳥假。蝦夷驕と名付けられしを。當直の日携へ出て
。或候。見せ參らせしかば。是。いまいまかといふ鳥なり。熊本侯の寫真の中。見えたり。
。依りて今。蝦夷いすかとよぶなり。併ながら此圖の尾のされたる鳥を見てうつした
り。長さ尾のさきのさけたるありとのたまふ。さらば全圖をかし給。らむ事を乞ひ申し
。今。人。貸したれば。返されし時かしてん。其とり某候。雌雄か。せ給へば。參りて
見るべしとのたまふ。則某候。乞ひ申し。かむ。いつてもと評させ給ふより。二三
日過ぎて參りしかば。さもと人して鳥籠二つ持ち出でさせ給ひ。初めて見る事を得たり。
無ねて携へし主の圖を展てくらべ見れば。此圖の雌の方なり。雄のさまたせたり。雌の

尾。或候の。給ひしごとくなり。雄の方の尾の先分れを。して尖れり。是。摺されたる。
もやあらん。然。あれど見し儘を寫し歸り。人。仰せて畫か。せたり。圖。別按むる。熊本
侯の寫真。畫くひちかひたれば。いまかの名たが。を。このたびあたりし。大婆の似た
れども。畫くひちかひたれば。いまかの名如何あらん。鳴聲。フルコルの笛。よ。て。至りて。微
音なり。色も。聲も。驕。ちかき。や

乙酉歲暮兎園之二

輪地

卅一字の歌を演の真砂のことく盡くる期を。しといひ傳へたれど。四十七言をもて。三十
一言を取り用ふれば。盡くる期なきこと。あらじと思。なる。なり。我。か。りし時。隅東
先生のいこれし。或人四十七言の内。て。三十一言を除き。これを一字づ。取り替へ
上下顛倒して。乘除し。幾億萬。至りて盡くと考へしものありしといわれ。今その人の
名を忘れたり。又其書。志か。せし物も傳。らむ。つとめて考へしことの傳。らざるも本意
な。し。か。も。ひ。世を早。う。せし我。養子。清通。が。兄。前。原。辨。藏。の。も。との。古。川。山。城。守。を。學。び。て。算
術。を。達。した。れば。或。時。此。事。を。語。ら。ひ。て。別。術。を。施。した。り。其。數。左。の。ご。とし

貳百肆拾七京貳仟伍拾億捌仟肆佰零壹萬貳仟參佰零參

たゞしこれの短歌のみなり。長歌。旋頭歌。混本歌。字あまりの歌のこの外なり

乙酉歳暮鬼園之三

輪池

○丑時夢詩歌

下毛野國足利のかたほとりよ。よよ丑の時まありといふべきをせしむ。まさめに見つと
そこなる人のかたれるさまをよめる

橋庭麻呂

あやしきと。火よぞ有りける。うちあめる。時こそ有りけれ。もえたてむ。けつをべもなし。
世中の。人の思ひも。おのづから。まかこそ有るらめ。よの常の。外へも出てえぬ。たをやめ
の。たつや心を。黒髪の。思ひ亂れて。いなたま^頂よ。ともし火さくげ。むなさかよ。ます鏡かけ。
ひたりてよ。かなくさもたし。みさり手よ。かをつちもたし。ぬばたまの。やみのよふけの。
丑まぎて。うしとも言ひむ。神のます。もりのまめなと。いきのをよ。かけつゝをきて。おひ
しける。なみ樹の松よ。左手の。釘とりおさへ。みさり手の。つち振り上げて。ねたましや。あ
なねたましと。かきみだり。逆立髪よ。さかたてる。角をさくげし。ほのほとも。鏡よりつり。
かゝみとも。胸よたく火の。おそろしき。姿てらして。とこひ打ち。音もとろろよ。山彦の。と
よむひさきど。よそよきく。身よもこたへて。身の毛さへ。いよたちよける。たをやめの。い

かよもえたつ。こゝろなるらむ

たをやめのとこひのろひとくつくさや。いづくのたれか身よひびくらん

下野州足利里。有世所謂丑時進香者。世之人無有視之。而里人獨視之。告之橋庭麻呂。庭
麻呂以國歌記之。余亦作七言古體。以廣異聞

夜入四更人語歇。落月光滅冷透骨。情面閻羅懷肉刃。足躡木履度幽峻。自謂。無天地人間知。
松杉深處有所思。胸懸明鏡頂戴火。火能照鏡鏡照姿。數幅白衣白於雪。朱唇黑髮烏雲垂。右
手金鎚左手釘。釘則五寸鎚倍之。三釘四釘七釘。四十九釘數盡時。受釘老杉宛百丈。更無
一葉留在枝。奈何使無心根柢。枯稿不終千萬歲。此時山魃林魅絕。天根地紐似可裂。吾聞。荆
楚俗能呪詛人。宜掘兩穴。奈何獨將窈窕身。妬刃毒手好刺人

乙酉子月

快雪堂主人岡雄

○文政乙酉御幸記

廿三日御幸之御歌。いまだ手よ入り不申。御當日廿五首但御題頂戴して。其外の御歌多
し。廿五日之御歌出と申す事にて。最早内々の揃居候へ共。いまだ表向奉行も。夫故秘し
出だし不申之由。手よ入候の々早々達し候様申候。尤此度の御無題なし

山洞様。修學院御茶屋より御内々上御殿上人御供にて。飯山へ御上り被遊。絶頂にて御樂一曲有之。尤三管。夫より東ひらへよほと御下り御歸り被遊候由。御丈夫之事と皆々恐入候由。窮遂軒にて。御樂三曲。下之御茶屋にて御樂三曲ほど御座候よし。承り申候一供奉公卿方御装束書より。珍敷御色目も御座候よし。近々手より入たく入御覽可申候一御當日關白様御先より被爲入。准后様より御さそひにて被爲入候由一周防守様より。晝頃爲御機嫌伺御出。御還り之節。御路外御歸り。直に御參院。御末廣貳本。御絹三足。御拜領之由。御同人様當日御殿上物。表向鮮鯛一折。御内々御殿上速鏡二つ。御組重。御猪口。御小皿五十枚づつ。中々御煎茶色々。下々御煮漬物御菓子と申を事候別々下々迄被下候。青籠まんぢう。焼鯛。是は御供之面々此分より而行渡り申候由

○文政八年十月廿三日於修學院御當座

冬山 散紅葉落つるこのみをかっひろひ。かつ分けのぼる冬の山道
 忠良 みゆきまて君がながむる山々の。冬のまかたもめづらしきかな
 家厚 冬がれの山のこたかくとき木も。みとりあらそ生ひまけりぬる
 永雅 やまぢ行く袖のあらしもさむからで。冬をよそのの木ぞとえある

見ねふもとかく朝霜も冬の色。ひかりかくある山松のかけ 實久
 冬野 霜ふかくおけと言葉のいろそへて。冬枯まらぬ野への松がえ 胤定
 資愛 冬も猶る風なびくけふよあひて。御幸をあふく野への民ぐさ
 公祐 冬がれの野へのけしさをめづらしと。けふしも君のみそなりすらし
 降起 秋草の露をかけふる花もなき。霜よかれ葉の野への見渡し
 大任俊矩 冬がれし野へのみゆきのあととめて。つゝる袖もちよつもるらし
 泰行 とし／＼のみゆきのひかり見る野への。草葉の霜の花もそひけり
 重成 冬がれの霜のみちしむみならずし。みゆきよつかふ駒ぞいさめる
 基返 いく度かさそふあらしもちりぬらん。落葉をまたる冬の山みち
 隆光 君が爲まげる真砂の白たへよ。かくとも見えぬ道の朝霜
 永胤 置く霜を袂よまらし此あさげ。とけ行く道のこまもいさみて
 爲則 岩がねの落葉色とるたき波よ。まぐれのいとけふいかゝらむ
 公久 やま風よ峯のもみぢをふきたて。錦ながらの冬の瀧つせ
 親實 山かぜのさそふこの葉もおのづから。よりあせせたる瀧のまらいと

冬かけて残るもみぢ葉枝をがら。こほりよとちよ瀧の白いと
 時雨ふる音かと思ふ山の瀧。雲のとまりの軒に聞えて
 まつが根よいづるいつみの池なれば。冬も緑よいく世澄むらむ
 冬ながら氷もそめぬさゝ波の。花の春かとむかふ池水
 春の名の日影ゆたけき此いけの。波さむからむうかぶ松しま
 みそなす此山かげの池水も。ふゆのひかりよさぞこほるらん
 見渡すよきしねの嵐さえく。波うちよまる冬の池水
 冬田 かり衣思ひたゝむ朝まだき。冬田の面の霜に見ましや
 せきわけしあぜの流れの水かれて。かり田の面は霜さゆるなり
 豊なる御代ぞとあるやかる跡の。いなよきまけき霜のあら小田
 稻雲冬獲晚登田。鳥雀驚人収穂邊。一段荒寒終事後。霜花結成白花檀
 冬あるさひえのあらしよふもとなる。かり田の苔やこのと散りまぐ
 題者奉行等
 有長 重徳 忠良 爲訓 爲則 有言 爲和 政通 樂山 公説 通修

○文政八年十月廿三日於修學院御當座 假座

爲 則

十月見征舞 かく計秋の錦をそのまよ。千しほかりなを冬のもみぢ葉
 みゆきまる山路のまむし冬来ても。のこるもみぢよ秋を見せけり
 名もあるさ雲の隣の軒近き。ひときよ秋を殘をもみぢ葉
 露しぐれそめよし雲よ此ごろも。のこるもみぢの御幸まちけん
 君も臣も見し長月よかいらむて。そむるちしほは冬河山かけ
 のちとほくままよ御幸よかみな月。ちらぬかひある山のもみぢ葉
 ちしほまでけふの御幸のをりよあへ。秋のこしたる木々のもみぢ葉
 のべ山邊秋のこも色もいく千入。けふの御幸をまちしもみぢ葉
 みねつよき比えのねかけて冬枯け。あらぬ山とも見ゆるもみぢ葉
 神無月よみの御幸よつかへ来て。ふかきめくみをもみぢよそ見る
 飛霜著樹作多工。十月山顔水面紅。别有光輝迎玉輦。宛如師障似屏風
 枝かひす松よならびてもみぢ葉も。さかりの色を冬よ見るらし
 ちりむてぬ木々の梢の冬よなほ。色うるいしくのこるもみぢ葉
 かくもけふみそや春をまつの鳥の。冬よもちらぬ峯のもみぢ葉
 有長 正通 家厚 有言 永雅 重成 資愛 隆起 樂山 公久 公説 泰行 永胤 有長

きみ さまがけふみゆきまちえて冬までも。ちしほと残す山のみぢ葉
 やい 山陰に嵐もまらむ冬かけて。見まる紅葉やみゆきまちけん
 まい またぐひあらしもふかむ神無月。御幸よめづる木々のみぢ葉
 にい よきにしきけふの御幸よ冬来ても。猶立ちそふる山のみぢ葉
 のい 軒ちかくそめものこさむ冬きての。けふも待ちえしもみぢとど見る
 こい 此冬のけふを御幸とそめく。て。色あさからむ残るもみぢ葉
 りい るり光のます山かけて秋の色を。此面かのもよ残す木々かな
 もい もとよりも御幸を待ちし紅葉か。まられてふゆぞ残る山陰
 みい 御幸をむことしも待ちて嵐吹く。冬も紅葉のちらむやあるらむ
 ちい 千重百重なほ山姫に冬かけて。霜もみぢの錦おるらん
 をい おのづから錦とぞ見ゆる神無月。まぐるをかの山のみぢ葉
 もい もよしほの冬までこえて山陰の。御幸も秋とむかふもみぢ葉
 てい てる色を君みそをいせ冬来ても。よしきはえある山のみぢ葉
 あい あきの後もこころをそめて神無月。名よたつ春よむかふもみぢ葉

實久 韶仁 親實 重徳 忠良 爲知 公祐 祐貞 通修 爲訓 大江俊雅 爲則 基遠 雅光

いふ 空暗れしけふの御幸のあまつ日よ。冬とも見えむてらをもみぢ葉
 隆光
 ふい 空暗れしけふの御幸のあまつ日よ。冬とも見えむてらをもみぢ葉
 隆光
 題者奉行等 爲則 胤定

右二編の十二月朔。輪池堂携来於席上所披講者。併録于篇左
 ○騙兒悔非自新

加賀の金澤の枯木橋の西なる出村屋太左衛門といふ商人の兩替舗に。淺野川の東の橋
 詰あり。文化九年癸酉の大つこもりよ。卯辰山觀音院の下部使なりと偽りて。出村屋が
 舗よ来つ。百匁包のまろがねを騙りとりたる癖者ありしを。當時隈なくあさりしかども
 便宜を得ざりしとぞ。かくて十あまり三とせを経て。文政七甲申の年の大つこもりよ。出
 村屋が兩替舗よ。人の出入の繫き折。花田色のいとふりたる風呂敷包をなけ入れて。こち
 ねんとしてうせしものあり。たそかれ時の事なれば。その人としも見とめをして。追人と
 も甲斐のなかりけり。さてあるべきよあらざれば。太左衛門にいぶかりながら。件の包を
 釋きて見るよ。うちよのまろがね百匁ばかりと。錢十六文ありて。一通の手簡を添へたり。
 封皮を折きて。その書を見るよ。十とせあまりさきつころ。やつがれ困窮至極して。せんを

べのなきまゝに。膽太くも惡心起りて。觀音院の使と偽り。當御店（まがら）にて。銀百匁を騙りとり候ひき。こゝをもて火急なる艱苦をみづから救ふものから。かへり見れば。罪いとおもくて。身を容るゝ處なし。よりてとし来力を竭して。やゝ本銀をとゝのへたれば。その封貨を相添へて。けふなん返し奉る（國法にて。彼人百匁毎に銀を包みて。一封とし。印を押して行ひしむる。封貨十六匁。文を取ることを。是則紙の質を充るといふ。よりてその十六匁を添へたるあり）りよし罪をゆるされなば。かの洪恩を忘るゝとさなく。死（死）かへるまで幸ひならん。利銀（い）なほのちくくは償ひまゐらすべきよなん。あなかしことばかりよ。さきが名氏を去るさねども。あるじいさらなり。小もの等までこの文は就き。その意を得て感嘆せぬなかりけり。同郷の人。中澤氏（名）。今茲（文段）正月十一日即願寺といふ梵刹（て）にて。太左衛門（あ）あひし折。彼の顛末をうち聞きて。件の手簡を見てけるよ。手迹もその書ざまもいといたう拙なけれど。さゝやかなる氏などのとざなるべしと思ふといへり。折から。尾張の人の篆刻をもて遊歴したるが故郷へ歸ると聞えしかば。そがうまのこなむけよとして。件の事の趣を綴りたる漢文あり。この夏聖堂の諸生石田氏（名）。江戸よりかへりて。舊故を訪ひし日。松任の驛なる友人木村子鶴の宿所（て）にて。中澤氏の記事（を）を聞して。感嘆大かたならざれども。惜むらくは。その文殊儷なり。よりて綴りかへよきといふ。漢文亦一編あり

且編末の評（云）。嗚呼一人之身。為非幾則愚夫猶惡之。及其悔非改過。則君子亦稱之。書所謂惟聖不念作狂。狂克念作聖。一念之發其可不慎哉。孔子曰。過勿憚改。孟子曰。人能知耻則無耻。信哉。夫人不知耻。則非幾暴戾無所不為。苟能知耻則立身行道。豈難為哉。於是知國家仁政之效。有以使民遷善而不自知者。孔子所謂有耻且格者。可徵哉。予のその文の巧拙は抱れるはあらねども。只勸懲を旨として。蒼隸農夫もこゝろえ易き假名ぶみよまつるのみ。さげれその事のもじめ終りを審し傳へざりし。記者の漢文は倣ふたる筆のまゝあらぬ故なるべし（銀を騙せられし時の形勢。銀を返すし時。國主は許へたるか否の事原文はもれたり）

○破風山の龜松が孝勇

天明八年冬十二月。湯島一丁目板木師平五郎が板せし御免龜松手柄孝行記（云）。一此度信州佐久郡内山村百姓惣右衛門事振（一）啖（れ）候處。若年の悴龜松即座（一）振を抱き留め。鎌（一）て殺し候次第

元遠藤兵右衛門様御支配所

當時佐藤友五郎様

信州佐久郡内山村

百姓惣右衛門悴

龜松

申十一歳

右村之義。信州。上州國境破風山のふもとにて。惣右衛門儀。高堂斗餘所持。家内五人ぐらし。して。居宅より三町程隔り。宇を逢月アヒツキと申を所。猪鹿ふせぎの番小屋へ。當天明八年九月廿五日夕方悴龜松をつれまゐり。龜松の草をかり。惣右衛門と小屋にて火をたき居候處。右惣右衛門うしろのかたより狼来り。足へ喰ひつき候を。ふりかへり候へば。唇より腮へかけ喰ひつき候間。狼の耳をつかみ聲を立候。付。龜松聞きつけかけ參り。所持の鎌を狼の口へ入候得共。かつら際よりかみをられ。用立がたく。惣右衛門所持の鎌を龜松取揚ケ。尚又狼の口へ柄の方を捻ぢ込み。うしろへ引きたふし。兩人にておさへ候得共。惣右衛門の數ヶ所喰われ候事故。働さ成り無打倒れ候。付。狼起上り候を。龜松石を以て狼の口へ差し込み。鎌の柄を打込み。牙をかき候得共。狼掻付き相働候。付。龜松大ゆびにて。狼の兩眼を操り抜き。打た。き新仕留申候。惣右衛門事の處々くれ候得共。各所無之故。龜松

分抱いたし。宿へ連れ歸り。翌日より療治藥用等仕候處。追日快方之由。候。龜松儀年齢より小柄にて。虚弱。相見え。中々右體の働さ可致者。相見え不申候間。驚き退も可致處。親大事と存。若輩。不似合。働致候段。誠。古今の大手柄。候。斯幼年の身にてさへ。ケ様の働致し候。况大人。おいてをや。誰も心懸け。かく有たき事なり。うらやむべし。右龜松儀父惣右衛門。狼。出合候節。相働狼を仕留。父を助け候段。幼年にて奇特成仕方。付。為御褒美銀貳拾枚被下之。右。先頃御代官大貫治右衛門様撫見として。御出之節。野先。にて御聞被遊。則當人御呼出し。始末御尋之上。御書上げ。なり。右之通。此度御褒美被下候事。誠。前代未聞。世上親孝行の教。も可相成と。板本。仕り。蒙御免費。申候以上

天明八年十二月

明神前通湯島堂丁目板元板木師

平五郎

與繼云。本文のいと拙く見ゆるを。とがま。一寫し。の。實を傳へん爲なり。この印本を今も藏弄せし人もありてん。まかれども紙の數。つか。三丁むかりのものなれば。永く世に傳はらんことのかたかるべきを。いとをしむのあまり。けふのまとの料。してけり。原本の體たらくと。世。サゲなど唱ふるもの。ちまたを費りあるくと。異。して。地名

人名もいと正しく。且御免の二字を冠せしものづらかなり。孝子の事を板して賣りあるくこと。これらや始なるべきかと。家嚴いへり。ふたゝびおもふ。この龜松が事。孝義録に載せられたる歟。家嚴もおぼえむといへり。猶考ふべし。

○瑞龍が如兒

寛政文化の間。軍書を講談して。生活よししたる瑞龍軒。前の瑞龍が子にて馬谷百軒等が姪なり。第一前の瑞龍。第二馬谷。第三百軒この三人の兄弟なり。百軒の母山が社中にて。俳諧の判考なり。この中馬谷尤世は知られたる。當時中山物語といふ俗書の世に行はるゝことありけり。こそ京師の人の手は成りたるや。あらぬ事をのみ書きつめて。禁忌に觸ることのさへなるを。奇を好むもの虚實をも得考へぬ。俗客の玩ぶこと少からむ。こゝをもて。貸本屋をどいふ者の。二本も三本も寫し取りて。こゝかしこへ貸したりけむ。おぼやけも聞し召されて。嚴禁をかへられ。寫しとりたる本屋ども。おん咎を蒙りて。寫本のすべて焼き捨てられ。それをとり扱ひたるもの共。おのもく過料をたてまつらしめ給へり。こそ享和中のことよぞ有りける。かくて文化中に至りて。件の瑞龍軒難波町にたりなる居宅にて。かの中山物語を講談してけり。其書を裏に禁斷せられて。見まくほしとおもふ者も多かりけるや。夜毎一人のつとひ来て。聴くものおびたしかりけるを。市のかみより隱密一人を遣して。聽索ようちまじらしつゝ。夜毎に聞かしめられしを。知るもの絶えてなかりしとぞ。かくてこゝその講談もこの席を限りて。講じ訖ると聞えし宵の程。瑞龍はその席にて忍に搦め捕はれて。やがて獄舎に繋れけり。叔事の頭末をおこそか。問はれし。件の書おちかき比。反故中より獲たりしかば。世あたりの爲にせんと思ひし外の候はむ。禁斷せられしものならんとい。かけても知らを候ひきと。おそるく陳せしかども。その書を禁止せられしが數十年前のことならむこそ。速くもあらぬ事なるを。おらむとまうすことありある。知りつゝ講談をたりし。不届なりと讞斷せられて。速島にや流さるべき。市にや棄られんなどとして。世評も亦まちくになり。しかるに瑞龍はひとりのみすめあり。この年甫めて十二三なるべし。その姓孝順をりければ。父の禁獄せられしより。號哭して寢食をおもはむ。町役人等もろ共におん慈悲願ひとかいふよしをもて。ねきぶみを捧げつゝ。市のかみの廳にまゐる毎。みづから親の罪にかいらんと乞ひまうして。哀傷悲泣人の視聽を驚し。追ひ立てらるれども。得退かず。死をだも解せぬ有さまなれば。人みを不便におもはぬなし。このと度かさなりけるまゝ。おぼやけもその孝信をあらせ給ひけん。瑞龍の思ひしより。その罪ゆるく定めら

りけるを。市のかみより隱密一人を遣して。聽索ようちまじらしつゝ。夜毎に聞かしめられしを。知るもの絶えてなかりしとぞ。かくてこゝその講談もこの席を限りて。講じ訖ると聞えし宵の程。瑞龍はその席にて忍に搦め捕はれて。やがて獄舎に繋れけり。叔事の頭末をおこそか。問はれし。件の書おちかき比。反故中より獲たりしかば。世あたりの爲にせんと思ひし外の候はむ。禁斷せられしものならんとい。かけても知らを候ひきと。おそるく陳せしかども。その書を禁止せられしが數十年前のことならむこそ。速くもあらぬ事なるを。おらむとまうすことありある。知りつゝ講談をたりし。不届なりと讞斷せられて。速島にや流さるべき。市にや棄られんなどとして。世評も亦まちくになり。しかるに瑞龍はひとりのみすめあり。この年甫めて十二三なるべし。その姓孝順をりければ。父の禁獄せられしより。號哭して寢食をおもはむ。町役人等もろ共におん慈悲願ひとかいふよしをもて。ねきぶみを捧げつゝ。市のかみの廳にまゐる毎。みづから親の罪にかいらんと乞ひまうして。哀傷悲泣人の視聽を驚し。追ひ立てらるれども。得退かず。死をだも解せぬ有さまなれば。人みを不便におもはぬなし。このと度かさなりけるまゝ。おぼやけもその孝信をあらせ給ひけん。瑞龍の思ひしより。その罪ゆるく定めら

れて。遂に追放せられけり。こゝまたくむまめの孝行ゆゑなりとて。親も歡び人も賞賞する程。件のむまめのある豪家の子の婦。懇求せられて。ゆくりなくよすがいで来しかば。瑞龍もその家より扶助せられて。おんかまひの場所ならぬ近郷。半生を送ることを得たりとぞ聞えし。夫孝の百行の本なり。至尊のこれをもて民に教へ。士庶も亦これよりて身を備む。その國を治め。家をととのふるの要道。何ごとか亦これよかへん。感するは猶あまりあるもの。かの孝男女のうへはあらむや。そもくこの兎園小説。去歲の志のす下つかた。家嚴のかりそめと思ひ起し。まづ北峯ぬしよかたらひつ。この春諸君の同意を得てしより。月毎の集會間斷なく。今こそ十有二集。満つるよなん。この満會。何をか書かんと思ふも。をこのまきみながら。こゝは孝義の三編を綴れるよし。是をもて自警め。且人の子のいましめよもなれかしとしての。ござなりれる

時文化八年乙酉冬十二月朔。呵研推墨沐書於神田鳳簫菴 琴興嶺繼
甲申十二月八日耽奇漫録追加

予が家。藏弄せる達磨の木像。雲慶作とあり。我の家嚴此木像を耽奇會に出だし。折雲慶。運慶別人なる事。且雲慶の何れの世の佛工なるや。未詳のよしを書れたり。まかるよ。

きのふたま〜 鎌倉志を繕閱せし。卷の二光圓寺の本尊類焼阿彌陀の縁起の條。建保三年京都。大佛師あり。雲慶法師と號す云々とあり。この下にも。雲慶云々と書けり。本文より。三ヶ所見たり。て考ふる。運慶。雲慶同人なるべし。もし運慶のじめの雲を書き。後運の字に改めたるか。さらむ縁起の誤りか。志よその辨なければ。いかよと定めがたけれども。こも亦一勘は備ふべし。この一條は耽奇録中よし。おかれんことを希ふのみ 乙酉抄月兎園納會

○賀茂村の坂迎ひ

京 角鹿比豆流

伊勢太神官の廣前。太々神樂捧け奉るとして。かの御社。春毎參詣する事。六十六國。殘る處もなし。都の町々近き村里老たるも若きも。かたらひつ。二十三十ある。百も満てる人の。願ひて家歸る日。家族うからまたしきかざり逢坂山の水うまや。集ひ。待酒扱かひし。宴をなす。是を坂迎といふ。こゝより家までのかへるさ。迎の人と共に誦ひつれて。都の町くたりさ。さき行く事引さもさらむ。こをみる人大路。立ちつ。けり。三月廿一日上賀茂の一群松林の加茂塘をまぐる。鞍馬口の乞食の兒等いて。錢を乞ふ事頻りなり。加茂村の百姓さか迎の日。唐坂といふ菓子二ツづ。あたへ。また人數こゝらなれ

は菓子代にあし二筋あたるが。古き例なりとかや。酒工酔ひ去れたる若人。誰れも何れもいたれぬもなく叱りさいなみ。子等がたまを叩けり。おれらが事をれば。やがて目と泣きて。賀茂ものしかたゝきたりと告げしかむ。折から御影供とて乞兒も酒のみおたるが。やがてそやりかゝ走りいて。六七人連ひ采りぞのくじる。雙方酒力を借りていともかしましな。かたお追々もせ集り。八十人よもおよべり。賀茂のやつら一人もかへさじして。礫石雨の如く投げ出だして。おめささけぶほど。五六十人の賀茂人をべき様なく。蹴踘差ぬきいたして。こゝろしひなどをるほどよ。刀底も損れしもの。礫よていためられたる人もおほく。相引も引きたり。後の日鞍馬口の小屋の頭ども。不潔なるもの共。所を追放つべきよしにて。詫たれど。賀茂かたも狂水よおかされて。まさなき事やありけん。めて度神詣の踊るさなれば。たゞおたやかなれとて。事すみたりと。三谷吾妻が物語りけると。荷田の信美大人の口づからをるし侍るなりけり

○希有の物好み

元録の頃京室町通三條の南。櫻木勘十郎といふ人ありけり。古器物書畫の鑒定をもよくせり。希有の物好みて。衣服より足袋帯に至るまで。色々の縞を着用し。扇子。脇持柄糸。鏝。印籠。草履まで縞ならすといふ事をし。朝夕の食物繪のものとより。刺みものなり。煮物などにも大根。牛房の類のすぢある品をもちひ。椀折敷までも縞のもやふをどのものもける。されどもまげて異を好むゝあらず。只天性かくありしとぞ。家居もせよめづらしく。表二階の格子もさまゝの唐木にて。縞よくみたて。店先も罌格子といふものを立て此所ゝ大きな登貫木ありて。青貝にて唐草の模様あり。ひさしの大垂木など。細き柴竹の寒竹よて。さまゝの縞よくませ。板中庭ゝ泉水ありて。金魚あまたをち置く。そこより居間の二階へ。階梯を渡したり。其階梯も唐物作りの磁質株高欄付けてけり。又中庭の北面なり隣りの壁まで。縞よぬらせけり。かゝれば世ゝ縞の勘十郎と云ひけるとぞ

○古代の呼名

江州伊香郡金居原村百姓

- 梨 之 木
- 藤 之 棚
- 萬 代
- 上 之 山

堂之坂
川端

右之村方。山中にて炭焼を業に致し居候。往古に一村不殘。右様の名を付居候由に候へ得共。追々何次郎。何右衛門など、改名致し。當時宗門町。右六人の者。右様之名を附居申候

同郡奥河並村百姓

太夫

右村方にて。婦相果候夫。何れも太夫と。年々宗門帳ニ相附居申候。如何成故と相尋候へば。夫相果候婦を。後家と申をも同じ事と申し居候

右彦根家密田甚右衛門殿の語なり

○蒲の花かゝ美の上

久かたの日影うとき谷を出て。木傳ひあさりなく鳥も。友を求むといふなる。物のりやうなる人として。いづれか友を思ひざる。をかもふよも忘れぬべし。利慾よかたらひ。誦樂よつどひ。酒食よよりて親しかりし。思ふよ似たるも。忘るよとやかり。まな

びのみちのひとしくて。こゝろざしの異ならぬのみ。忘れんとすれど忘れがたく。おもふよもなほあまりあり。をを誰どと人よ問われん。備前庵よままものなかりき。この人や。學びのみちよこれよひとしく。心ざまさへ似たりけり。生れし郷の異なれども。おなじ甲よと聞えしも。大かたならぬをくせなりけん。よよふた轡の論なく。むつみかたらひぬる折々よ。いられしことの耳よとまり。なつかしくもかなしくも。ねざめぬ老が曉よ。をぞこしかたの胸よみちて。像よたつこともありけり。おほよそこの人の行状。藤田ぬしの書きつめたる。墓表よよりてしらるべけれど。猶もらしつと思ふこと。なきよしもあらざりけり。いとめづらしくもくましくも。さゆ侍りかたきこかせなりし。そのことの趣を免園のそしよあるしつけて。くよしたちよまめさむ。たれか亦ふしをうちて。こと業のあらべをたすくべきと思ふもをこのまごながら。深谷かくれよ友よぶ鳥の。聲よしも似てやみがたきよ。水ぐみのあと。淺きとさらなり。山の井の影うつしくも。人のしらんことさへよ。いとぬぬ。げよおろかなるべし

文政八年乙酉冬十二月朔。このふみを綴りて。みづからそしがきせるもの

神田の隠士 瀧澤 解

人の心のかくれ沼の定かより目見えぬものから。そのよきも終らあらわれ。そのころ
 きも終らあらわれ。よきもわるきも。おしなべてなき後こそ定かなれ。さばれそのよき
 人といふとも。祿もなく。位もあらで。名を後の世に遺せるもの。只その人の徳あり。
 學びのちからよらぬなし。こゝも亦その一人あり。吾友脩靜菴のあるは則是なり
 とも。脩靜菴。本福田氏。後その先祖の氏郷朝臣の族より出でたりと聞く。及び
 て。氏を蒲生に改めけり。これらのよしの。塾教は具れば。こゝに辨せむ名は秀實。一名は夷吾字は君平。脩靜はその号。
 下野州宇都宮の人なりけり。明和四年丁亥某日日生れぬる故をもて。その父これ一名
 を命じて。伊三郎といふといふ。亥の和訓は即為なり。爲伊の假名だがふといへども。伊は
 猶亥のゐのこゝろなるべし。その家半農半商にて。ともしあぶらを需たり。父没して兄
 家を嗣ぎぬ。只脩靜のみをさく。讀書を嗜みしかば。耕し耘ることを欲せず。又商人のわ
 ぎを樂む。おなじ郷は石橋といふ先生ありて。經學を脩めて。且施を好み。其家ゆたかな
 りければ。天明三年淺間山焼けて。關東いたく饑乏たるとき。倉粟をうちひらき。四百たわ
 らの米を散じて。郷黨鄰里を賑しけり。只この施行のみならず。或は路を造り。橋をまつら
 ひ。隱徳慈善を宗としたれば。人みな徳とせぬものなく。名をうちこちよ知られてけり。脩

靜といとてやくより石橋翁の門に入りて。勤學研究こゝ二年あり。かゝりし程。大母の
 物がたりよよりて。祖先の賤しからぬを知曉し。みづから氏を改めて。志いよ堅く。凡
 下野人の風俗を朴訥にして強く悍し。脩靜はこれよかふる。志氣逞しく貧しきを解け
 る。よしや忠義の拘となるとも。亂離の人とならむとて。志きり。獎み學びけり。志かれど
 も章句ををさめず。國史舊記を涉獵して。いかに古學を起さんとほりたる心いとせちな
 り。剛腸かくの如しといへども。母よつかへて孝なりければ。母もまた愛ぬることのあた
 り。子よりも深かるべし。脩靜が壮りよなりしころ。其兄の身まがりけり。これよより母田
 園をなかばよかちて。脩靜よとらせんとしてける。脩靜いたくこれを推辭て。且母を諫
 めていづく。母が兄不幸よしてなかせらよ身まかり給ひ。且その子の尚をさなし。ざるを
 今多くもあらぬ田園を。吾儕の爲よかたせ給ひ。をさなきもの何よよりて荒年の
 飢寒を凌かん。およそ兄弟叔姪の。故なく田園をよかつもの。親族怨みを結ぶの基本な
 り。吾儕は一步の田を得ずとも。ともかくもして。一期を送らん。姪は母の嫡孫な
 り。渠が身ゆたかなるとき。母も亦優よをいさん。いつくしみをいろひまつるひ
 とり姪の爲のみならず。すなわち母の爲なれと。なく。ことごときを盡し。かば。母の

これを賢として。遂にその意に任せしとぞ。是より後もとよかくは家の親みよかづらひて。志をたてながら身をこがまよもせざりけり。是よりさき寛政二年の冬。琉球の使人入朝しつと聞えしよ。故ありてかのもとがらと應接をしつるもの。宇都宮よかへり来りけり。脩静一日これを訪うて。足下のこたび球人と應對したりと傳へ聞きぬ。何等の說話なりしと問ふよ。その人答へて。いなきせる説話もなし。只四表八表の語次よ。球人よこれ問ひていづく。皇國の誠よ文あり。武あり。大かたならぬよき國なれ共竊よこころ得がたき様といふ字よ。三體ありて。尊卑の志をわけらるよ。或の永さま。或の美さま。つくむひ様といふよし。いかなる義理のあるやらんといそれしよ。困りたりとうちほよよみつよ告げよけり。脩静これを聞きしより。憤り胸よみちて。嘆息の外こと業もなく。そがまよ宿所よ走りかへりて。ひとりつらく思ふやう。むかし南北朝の内亂より。應仁の兵火よ至りて。天朝の舊典皆ことごとく亡失し。文華のながく地を拂ひて。世に戰國となりし事。既して二百餘年。その惡俗の餘毒。流れて昇平の今の世まであらひ清むるものよ足らぬよこそ。附庸弱小の球人よすら。侮らることのやまからぬ。いかでこれ古學を興して。國體を張り。天下の爲よ死力を竭して。國恩よ報すべしと。いよく思ひ定めつ

よ。指を噛み。血を深めて。孝子之情有終身喪。忠臣之心無革命時と。大書しつ。志願の臍をぞかためける。かよりし程よ。歳月を歴て。脩静江戸よ往來しつよ。林家の門人よなりしかは。帯刀して儒學を倡へ。當時高名の儒者。國學者。文人。墨客とまじりて。遊學すること亦年あり。まかれどもその持論事情よ愜ぬ。或はこれを迂濶とし。或はこれを狂妄として。嘲り噓ぬの稀なりしを。脩静ものよ屑ともせで。いよく守りてみづから貶さむ。その友よ語りて云く。むかしの儒官あきらかよ。天朝の故實よ通じて。六經をもてこれが資したり。こよをもて名正しく。事行れざることなし。今の俗儒は。天朝の故實を知らむ。夷順逆の理よ暗くして。名を亂り。言を紊るもの。百五十六年采。比々として皆これなり。その位よ在るもの。その道を行ひ。その位よ在らざるもの。その言を行ふこと。古今一致難易送よありといへども。吾憤をもて志を立て。古學を興して。逸史を修め。力を經世よ竭して。もて國恩よ報じ奉らんとほりすること他なし。彼世よ阿りて。利を護り。泉皮よ坐する草鞋大王みづから名教の罪人たるを知らざるものと鄰をなきじと思ふのみ。この事同士の爲よ語るべし。悠々の徒と詭るべからむとぞいままきける。此ころよりして脩静九志を編述の志あり。いよしへの山陵多く荒廢して。その迹定かならざるものあり

と聞く事久しきをもて。まづ山陵志より窺ゆんとて。獨行して京に赴き。南海を越え。淡路に渡る。素より路費の乏しきを憂とせむ。險を履み。風雪を犯して。六十六國そのなかばを経歴し。あるに里老に問ひ。或は舊國を考へ。諸陵存亡の趣を目撃したりける。苦辛をその著述の爲に解せむ。日月のたびねに移れども。その志移らむして。いよく精力を盡しけり。かゝりし程に。丁卯の年。北虜邊塞を擾るゝの風聞あり。脩靜江戸に在り。かのことを傳へ聞きて。憂ひ且憤り。得堪へむ。まなち不恤緯五編を著し。上書して。これを國老の執事またてまつりし。おん取あげのなかりけり。とかくする程に。山陵志一卷やうやく一稿を脱きて刺本にせまくほりする。脩靜素より播磨の儲をければ。同志に告げて。未刺己前に入銀を促し。且その支鍵屋靜齋等が貸けを借りて。製本全く成りしかば。これを京師に獻り。及關東の搢紳并に有職の人々よまゐらせけり。しかるよその論處士浮浪人の。あけつらふべきこともしああらむ。贅言分は過きて忌み憚らざるは似たりとて。脩靜を市のかみの廳に召して。その條々を諾られし。脩靜まなち律令を引き。古實を證して。答へまうまことの理を辨ひしかば。かきねて咎めぬなかりけり。これより脩靜慷慨嘆息して。身の禍を見かへらむ。日ごろの剛腸十倍して。記文一篇を綴りてけり。その事

禁忌に觸るゝをもて。市のかみや聞えよけん。召し問はんとせられし。林家の門人たるよしを聞かれて。まづ祭酒に告げられしかば。祭酒まなち脩靜を招きよせて。件の記文をまゐらせよとありける。脩靜答まうまやう。件の拙文は一時漫戲の稿本なりしを。何がしに貸したりしが。いく程もなく失ひて。今一ひらも候を。仰の趣かしまり候へども。なきものなればせんすべもなし。この儀ひたすら賢察を願ひ奉ると陳じしかば。祭酒すなわち脩靜を退かせて。又家臣をもて問はしめ給ふ。脩靜陳むること初の如し。家臣はこれをまこととせむ。なほさまぐに諾りしかば。祭酒これを推し禁めて。威をもて逼るゝ要なきことなり。利害を説きて諭さば足りなん。問ふこと再三再四してまうすことの違ひぬ。實は失ひたるならん。おさねくとどめさせて。宿所にかへし給ひしとぞ。程経て後聞えける。この事世間聞えしかば。あるも知らぬもおしなべて。駭嘆せむといふものなく。疎きに愚として。これを嘲り。親しきと憫め共數ふるよしもなきまなち。あなや脩靜は。不測の罪に身を喪ふ歎と詰みし。祭酒愛顧のとりなしよりけん。又その母に孝なるよしさへ正にあられたるよやあらん。やうやくに免れて。させる御咎もなかりけり。脩靜江戸に僑居してより。文化の始めまで駒込吉祥寺門前をり。七

年庚午の春二月更ニ卜居して。石町なる鐘撞堂新道へ移りヨけり。駒込ニをりし日より。教授ノ口を鯛ノものから。山陵志ニ相つニまきて。又職官志を彫らんとスまれば。財用足らで窮ニれども。志氣早く傑出シて。持論ヲ聴くべく。文章觀るべし。又ある時ニ。交遊宴會の席ニつらなりて。脩靜特ニ強飲シ。劇談ヲ放言シて護らむ。その體たらく傍若無人ニ似たりといへども。方正ニ硬直ノの情。言外ニあらニわかれて。國を憂ふるの心。一日半胸も挽むことなし。しじめ。脩靜が山陵訪求の爲ニ。京ニ赴きしとき。彼地ニ絶えてある人なし。當時小澤蘆菴ノ。古學を好みて萬葉風の詠歌ニ名たかく。世ニをねたる陰逸なりと。かねて傳へ聞キしかば。渠がたすけを借らむニとて。その京ニ入りし日ニ。やがて蘆菴が宿所をたづねて云々トおとなふ程ニ。小澤が僕出で迎へて。いづこニよりと問ふ。いひよるよしニもなきまニ。脩靜まづ伴りて。某ノ下野なる宇都宮のほとりニよて。蒲生伊三郎と呼ぶるものなり。琴を好み候へ共。田舎ニのよき師なし。あるじの翁ノ琴の妙手ニておハするよし。東野の果までかくれなし。これニより。おん弟子ニならまくほりして。そるニぐと來つるよて候といふ。その僕ニころを得て。興ニ赴き云々と告げヨけん。蘆菴ノ聲を高くして。あなむやくニもとゐることかな。汝出でまか答へよ。あるじニ久しう客を辭し。交りを絶ちたれば。

は。都のうちだニも親しう物せるニ稀なり。琴ノわかニりしとき。かきならしたりけるを。あちこちの人ニ知られて。彼ニまかせよ。此ニ教へよといゐるニがうるさければ。ちかごろうち推きて。薪ニかへたり。かニれば所望ニまたかふべくもあらむ。他ニゆきて求め給へといふ聲の蒸襖一重を隔て。定かニぞ聞えける。脩靜ノ僕が報るニ及びて。そがまかニといふをしもまたむ。さらニ又推しかへして云。翁の御答ニこニもつむらニもれきたり。某ニほ一言あり。願ふニ在けて聞キ給へ。それニ下野なる儒者なり。まかニの志願あれば。まむニ江戸ニ遊學し。こたみ都ニのほりしかども。相識れるもの絶えてなし。翁の古學を好み給ふと。その氣質の俗ニならぬ。かねて傳へ聞く物から。いひよるよしのなきまニ。琴を學ばん爲ニとて來りつるといひしなり。こそ長者を欺くニ似たれども。そのそら言ニ已むことを得ざりし實情より出でたれば。ゆるされてたいめせられ。退げ肝膽を吐き。志願を告げて。翁の資けを借らんとほりす。かくてもころニ稱ニむ。退げられんこと勿論たるべし。今一たび和殿を勞せん。このよしとりつぎ給へといふ。蘆菴もこれを洩れ聞きて。さりとニ思ひかけざりき。くしまれ人なり。たいめせむニくニもことあらんとて。こなたへと申せとて。やがておもてをあらせけり。脩靜ふかく歡びて。い

とてやくより思ひ起し、志願のよしをとき示し。山陵志著述の爲。ふるさみさゝきを
たづねんとて。たびねをしつる事の趣。しかぐとかたりいづる。蘆庵ひたをら。感嘆し
て。足下の得がたき學士なり。さる志あらんよ。二が庵杖をとめて。こゝらわたりの
みさゝきを。まづかゝ訪求し給へとて。亦他事もなくもてなしけり。これより脩靜の日
毎に古陵をたづね巡る。ともすれば日くれてかへるを。あるじのみづから風爐を焚き
て。浴みさせぬ。老人の心づかひをむねぐるしとていなめども。従わざ。これらのこと
ひたをら。客を愛する故のみならず。これも亦かゝる奇人。宿まることの歡びしさ。
足下の疲勞を慰めて。恙なかれと思ふよし。國の爲にちからを盡き。人の助けをならんと
てなり。必いなみ給ふなとて。後々までもまかしてけり。かゝりし程。脩靜のある夜。更
闌けて。子たつのころ歸りしかども。蘆庵のいねを待ちてをり。例の如く浴みさせ。飯をす
ゝめて。さていふやう。これ足下は宿せる日より。蔬菜の外は物もなく。させるもてなしを
せざれども。老僕を休らねんとて。手づから風爐さへ焚くを思ひくみ給はせ。古陵
をたづね巡ればとて。今までのえうなからん。道がさくうてか。老人は物をおもひせ給
ふこと。こゝろ得がたしと嘆きけり。脩靜聞きて。貌を改め。翁のうらみ理りなり。二が非

按。等持院の北郊石不動の北に在り。尊氏の法號を。等持院と云ふ。この寺は。足利氏十三世の本俵あり

を飾る。あちねども。更たけたるに聊ゆゑあり。憾悔の爲に笑ひし備ん。けふは某の天皇の陵をたづねたりし。日のくるままでたづねもあいで。思ひをも等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りてとし来のうらみ心頭より起りて。たへられぬ。墓にむかひて罵るやう。梟臣尊氏なほ靈あらば。今いふことをたしかに聞け。汝の一旦治まりたる建武重祚の世を亂して。逆を取り逆守りし毒を後世に流し。より。二百十数年。干戈をさまらす。國の舊典もこれが爲に焼亡し。王室も亦これよりて卑く。古帝世々の山陵すら迹なくなりて。われらよさへ飽まで物をおもひまる。皆悉く汝が罪なり。天罰當り知るべしとて。杖をもて石塔を思ふまゝ。うらちたゝき。かして寺門を出づる程。物ほしうなりしかば。道のほとりの酒屋に立ちより。怒りまかせて飲む程。六七合を盡したり。さて酒屋をば出でしかど。酔よて足も定まらぬ。此まゝよてかへりゆかば。必翁に叱られん。なかに醒してゆかんと思うて。株尻をかけしより。うまいやまけん。時も移りておどろき覺むれば。更たけたりと語る。蘆庵は噴き出だして。思ひを呵々とうち笑ひ。さても世の中。似たる馬鹿ものもあればあるものかな。これも亦いぬる年。ある日。靈山のほとり。道逢して。長瀨子の墓所を過ぎしとき。さまが宿帳なきにあらぬ。ゆきも得やらをよらまへ

て。長孺子不滅の罪あり。こぬしみづからこれを去るや。和ぬしハ豊大閣の外族として。位高く且采地も廣かる。心ざま武士ハ似む。伏見の籠城ハ敵の旗色を見て。鬼胎を抱き。鳥居元忠等を棄殺しよせし。不義なり。事たひらぎて罪を蒙り。そつかハ命を助けられしを幸ひよして。耻を知らむ。心よもあらぬ世捨人貌して。えせ歌多く詠じたる。一盲衆盲を引しより。歌のあらべのわろくなりて。今よ至るまでなほらぬ。これ不滅の罪よあらむや。眞罰かくのごとくならんと罵りながら。杖をあげて墓を毆たる事ありけり。こぬよく似たるよあらむやと語りもあへず。聞きもをいらむ。ひとしく腹を抱へしとぞ。むかし兵國よさるものあり。さばれ楚平王ハ讐といふとも。その親の爲よ君なり。さるをその墓を發き。その屍を鞭うちし。過たるよ似て餘情なし。もし伍子胥をして。投化せしめ。この時よしもあらむめ。必階を降るべし

蒲生君藏墓表

常陸 藤田一正撰 源千之 并篆額

昔者中郎氏。學周孔之道。養素丘園高尚。其事一出。而翊

中宗中興之運。再造邦家。經綸鴻業。大纓冠之勲。塞天地。是以藤姓之胤。世秉國鈞。實與社稷

同休戚。而枝葉蔓延。殆遍乎海內。其薨也。學士紹明。欲傳令名於不朽。製碑文以示後世云。距今千有餘歲。其文雖不可得而見。然大人君子。墓碑有文。蓋此爲始。淡海文忠公在。大寶養老之際。奉詔刊修律令。其喪葬令曰。凡三位己上。及列祖氏宗。並得營墓。凡墓皆建碑。記其官姓名之墓。當此之時。朝野尚文。亡論其名公鉅卿。迺至遐陬僻壤。國造郡領之墓。亦有立石銘文者矣。其後浮屠盛行。而葬祭之禮先廢。文章與時運汙隆。而紀述德業。莫或之葺。慶元己未。偃武修文。慘觴之士稍衆。碑碣之撰不尠。亡論其閥閱之家。迺至文人儒士。山林隱逸之流。苟有稍足稱述者。亦皆有以立石銘文者矣。嗚呼。君藏關東布衣。發憤著書。欲明我神聖之道於中國。徵之以西土周孔之教。終身軼軻。齋志以歿。曾無一資半給之閔其身。而尺寸之功不克施諸當世。然其浩然之氣。託諸文章。卓々其不朽者。可以與古人爲徒矣。其墓之有表。豈得已哉。君藏諱秀實。一名夷吾。字君平。下野人也。本福田氏之子。自改氏蒲生。淡海望族也。系出藤原朝臣秀卿。至會津參議氏卿。而大顯。先世屢遷。徒野與之間。其宗爲有土之君者。亡嗣絕祀。百數十年矣。君藏迺其庶孽。苗裔云。東野之俗。素樸悍。君藏少以氣自豪。讀書不治章句。慨然有經濟之志。及壯好遊。足跡殆遍天下之半。然未嘗登仕路。故雖身在都會乎。常有山林樸茂之氣。其平生所持論。未嘗少自貶以求售。故圓枘方鑿。俗儒笑以爲極迂極澗。而君藏自信愈篤。恒謂其

友曰。吾以編戶餘夫。不能治生商賈。又不敢仕官為吏以舟斗之祿。讀書作為文章。亦不能與曲學阿世之徒為伍。朝齋暮鹽。坐取困窮。子亦知其所以然乎。吾少時嘗在家讀書。先祖母自旁語我曰。昔蒲生氏之自會津徙封宇都宮也。其庶孽帶刀其者。食祿三千石。納邑聚福田氏女為妾。有身。適會蒲生氏再遷會津。帶刀亦隨而徙焉。時留其妾父家。既而生男。妾父母愛之。不忍其遠別。伴告以女子。因鞠于其家。後冒母姓。遂為編戶之民。是於汝高祖之父也。汝讀書者。善記之。吾於發憤立志。而究古學。欲修曠世之隆典。以報國恩之萬一。庶幾乎其不奉先祖矣。吾生也晚。不逢大化大賢之世。大猷淡海二公之相業。非所企及。雖然在其位者行其道。不在其位者行其言。稽古徵今。通達國體王政之要。在納民於軌物。俾在上之人明祀典。以教孝敬。四海之內。各以其職助祭。則天祖之所以昭臨六合者。萬世無墜矣。富諸侯以奮武衛。安百姓以固邦本。是吾願也。昇平二百年。不值天慶天正之亂。秀鄉氏鄉兩朝臣之將略。無復所施。雖然安不忘危。古之善教天下。雖安所可虞者。夷狄盜賊。正名分以定民志。禁左道以塞亂源。使吾說護行。則速安安之鴆毒。驅戎狄之豺狼。不啻致一時摧陷廓清之切。俾斯民永無被髮左衽之患矣。斯吾志也。志願如此。悠悠之徒。易足共談哉。君臧又曰。仲尼稱。吾志在春秋。春秋經世之志道名分。周公遺法存焉。故為政正名。夫子所先。我秋。是膺周公之訓。今世俗儒。以文亂名。

俗吏同權亂法。亂法者罪止其身。亂名者其言載簡冊。而流毒於後世。夫神州則天地之正氣也。陰陽不和。寔為中國。中和乎。而甘美豐饒。文教所及。其養以給。精英發乎。而堅剛銳利。武威所加。其功以成。限以天地。莫有外寇之患。開闢以來。天祖之胤。世々傳統。君臣上下之分。嚴乎無紊。宇宙之間。孰能及我神州者。故日出處天子。日沒處天子。雖交大國。不敢苟讓者。惜夫名也。今俗儒不知名分。動虧國體。苟眩乎小大之勢。而不顧其名。則愛新覺羅氏之正朔。亦可稟而奉之。鄂羅斯國之察罕汗。亦稱為女帝也。可乎哉。丁卯歲。北虜擾邊。君臧時在江戶。聞之憂憤。迺著不恤緯五篇。諸國老門下上書獻之。不報。先是。君臧嘗聞克先帝王之山陵。或有荒廢者。欲告之當路。以圖修復。躬自登視其地。參考古圖舊記。作山陵志。平生精力。半在此書。書成。獻之京師及關東諸公用事者。有司嫌其論遠非處士所宜。召詰之。君臧乃引律文。誦故事以對。於是君臧慷慨自奮。欲為天下言世人之所難言者。雖由是獲禍。而不顧。故時人目君臧以狂妄。殆將罹不測之罪。盍或有知君臧之為人者。憫而救之。同獲免。君臧素剛腸。不能俯仰當世。以取容迺澆以酒。時或劇飲大醉。頽然自放。而憂國之念。未嘗頃刻忘也。間居講學。以懲忿塞欲。不敢與世抗為務。迺號其所居之菴。曰修靜。以自警。謂修身在此。而成名亦在此。教授之暇。專力著述。始君臧著革弊賦役等諸論。號曰今書。以規當世得失。至是更撰職官志。欲

以次編神祇姓族等志併與山陵為九志。未及悉成。以疾歿于江戸橋居。時文化十年癸酉七月五日也。享年四十有六。君歿壯而丁家艱。服除遊歷四方。故晚而娶。其配多氏。紅葉山伶官某之女。無子。君歿之歿也。其交遊尤親且舊者。相聚而哭之曰。斯人也。作山陵志者。其於喪祭之禮。最致意焉。不幸無嗣。襄事之責在朋友。其可不盡心乎。迺葬之江戸北郊谷中龍興山臨江寺域内。既而以余與君歿久相識也。託以表墓之文。迺書以遣之。使之鐫諸石曰

嗚呼君歿每以關東布衣。自稱難不免阨窮。猶為天下奇男子。豈可與彼閭里儒。臬號稱先生者。同年而語哉。吾聞其臨終。尚稱天地之正氣。且有三賢之說云。留精靈於天地之間。將俟其人而授之。古之所謂死而不亡者。其君歿之謂耶。噫。微斯人。吾誰與歸

文政元年歲在戊寅秋八月

墓石 縱曲尺三尺四寸餘 橫曲尺壹尺二寸五分

碑文 一千八百六十一言 篆額題目撰者姓名共十有三字

統計一千八百八十六字

解云。墓表則稱其私謚。予記文則稱其號。此以有所忌故也。乙酉冬十一月廿三日。予携興繼到臨江寺。謁亡友蒲生子之墓。即便薦行潦祭之。祭訖以蠟墨搨拓碑文。未兩三頁。短景已暮。

倉卒之際。磨滅之多。還家視之。不易讀者過半矣。因推文以意臆寫焉。恐有誤字。俟異日再搨當校訂者也

乙酉の去りをついたち。兔園小説集の満延にあると志て。竟宴のころをよめる

書きつめしふみをむなよゝおのすべさ。ささおあそこの菟園の友垣 解

おなじ折興繼に代りておなじころを

宇治のさみのささみよ似たることの葉も。ながめよりとき冬の花園

兔園小說
第二集
大尾

雨森芳洲小傳

○雨森芳洲小傳

雨森芳洲の對馬侯の文學なり名の東又誠清字の伯陽東五郎と稱せり芳洲のその號又
網尚堂といひき平安の人或は伊勢の人ともいへり幼して醫を學びぬこの時伊勢の
人高森某醫を以て名ありき一日人謂ひて曰く書を學ぶもの紙費甚醫を學ぶも
の紙費えこの語信然りと芳洲傍に在り之を聽き竊に謂へらく紙費あるは猶可な
り人それ費をべけんやと是より斷然醫を學ばず年十七八にして江戸に往き儒を木下
順庵に學ぶ才藻卓絶順庵稱して後進の領袖とを遂にその薦により對馬に仕へて文教
を掌れり一作記芳洲外國の語に通ぜり毎に韓人と説話するに譯者を假らば韓人嘗て
戯れて曰く君善く諸邦の音に通ず而して殊に日本に熟すと正徳辛卯朝鮮來聘の時
に新井君美寵遇甚厚し專その事を掌り多く舊例を革む從來朝鮮書を幕府に呈するに
日本國大君の稱を以てせり君美改めて日本國王と稱せよめぬ芳洲乃書を君美に與へ
てその非を論じたりその略に曰く向聞這回信使之來也。接應事例有異前時。而其說
皆出於執事之主張。思慮既精。處置適宜。正交隣之禮。省無名之費。使沿路臣民無所患苦。
苟微執事孰能及之。真所謂仁人之言。其利博哉者也。尋承內議有稱王之舉。而其說亦出於

執事之主張。僕一聞之且驚且痛。竊怪以執事之學問見識。素明春秋之義。而平刺顛倒。一何至於此哉。區々橋性不忍。誠默成事不說之戒。雖出於聖訓。改過勿吝之義。將望於執事。幸採察焉。竊惟國家源平相軋以來。王綱日弛。不絕如綫。徒擁虛器爲域內之共主。而世掌兵權者。名雖大臣。實乃國主。爵祿廢置皆出其手。遂使域內之人。不知有體天並日之聖統。巍々然據億兆臣民之上。冠裳倒置。莫此爲甚。唯有臣子恭順一節。可以當簞羊之告朔者。不敢公然自稱王號於朝鮮耳。夫稱我爲君。而我不辭。我即君也。呼我爲臣。而我不怒。我即臣也。歷代將家不敢自王。而朝鮮稱以殿下之書。欣然輸納。未嘗爲之一辭。是以王自居也。則與夫自王者固自無間。然此猶有可恕者存焉。今乃廢歷代特起之定例。創一切無稽之新規定。上則失恭順之義。下則悖祖上之法。吾以爲凡爲臣子者。固當從容規諫。繼以犯爭。務使其君不陷于偏上欺下之地。然後乃可謂不負聖賢之君矣。若有一言半句。涉于怨憑。必使爲魏家之荀彧。則不但自誤。且以誤君。吾知執事之必不爲此也久矣。似聞有諸侯王例之說。此甚無謂。何則。或稱日本國武藏王。或稱日本國關東王。是可無間。而知其爲我國諸侯王也。若專以國號架王字之上。則爲國內無上之尊稱。豈非昭然欺。設或如此。而可以爲我國諸侯王。則彼其朝鮮國王者。亦將以爲其國諸侯王。烏乎可也云々。然れども君美遂に納れざり

き芳洲もと白石と均しく木下順菴の門人として相識ると三十年而して交情相協いむ常は白石を稱してその心術測るべからむといへり芳洲嘗橋窓茶話を著し怪窩羅山よりその師順菴及社友の名あるものを挙げたれど獨白石に及ばざるの亦此を以てなり芳洲勸學老いて滋篤く其の子第に教ふる懇々倦まむ年八十一始めて國歌志し古今集を誦する一千遍又自賦する一萬首人その精力に服せり寶永五年正月六日歿す年八十八芳洲人と爲り道德を重んじ常は曰く吾飲食衣服より以て宮室爵位に至るまで絶えて偏好なし故に閨厨寂寥家門無事之を鬼神に質して愧づることなしと又物徂徠と交親しきを以てかつて子顯光をして徒ひ學ばしめき幾何もなくしていらく茂卿の一代の豪傑なり然れどもその人を教ふる浮華を尚びて德行の原かき久しく少年輩を託すべからむと遂に解せしめたりとど者其所橋窓文集。橋窓茶話。橋窓漫錄。多波禮草。朝鮮略說。隣好始末物語。鷄林聘事錄。交隣提醒あり子孫相繼ぎて學職ありきと云ふ

たそれぐさ

雨森芳洲著

たそれたるもの言葉も。かしてき人のえらぶといへるをたよりとし。見しきよし。おもひし事どもを。そらよかきつゞけて。世のそしりいかにとおそろしけれど。それがのちなる人の。よのをしへともおもへかじと。たく火よやさもやらむ。のこし侍るなりふるき記録のふみを見るよ。ちよなき人のいへる事。いつの世よてもおこなわれやすく。ちよある人のいへる事。用ふるものもすくなし。ちよある人の言葉。ちよある人こそ。さる事ありといへ。ちよある人。いつの世よてもまくなければ。ちよある人の言葉おこなわれざるべなり。歎くべきのとなをただしきなり

虞翊がいさめをもちひむ。税布をましより。羌人謀叛せると。漢史よしるせるをよみて。感じて此書をつくれり。それゆゑ。此ことばをもて。巻をひらくのはじめとするなり

世のみだるなり。いつとても男女のみちたゞしからざるよりおこれり。人々のいへるこ

となれども。まことよしる人すくなし

詩始關雎。易基乾坤。まことよしる真知之爲貴也

此國の假名よて書ける文ども。言葉のうつくしくたへよして。人の心を感じしむる事。まことよれひとのいふよや及ぶべき。されどしるせる事。わかきおひたつ人などよ。しらせん事いかにと思ふ事多し。世の中よかゝる事もありやとおもひなば。人の心をそこなふのよしなるべし。世のみちのおとろへたるより。かゝる文もいでき。又かゝる文をもてこやせるより。世の道いやましよおとろへたるならんと。かゝる文もいでき。又かゝる難波のえだちより。あめがしたひとつよすべし後。年々もよとせよとるかあまり。幕のつかさ。なよよやよなり給へど。まことをうなの道。いなといへる事。世がたりよもさかむ。世の中めでたからんためしぞと。ありがたくおぼゆ

三種の御寶。天地開けし始より。御寶よそへて。みつのことわりをつたへ給へると。諸家の記録よも見え。其ことばさまよなれど。うつくしみ。あきらかよ。たけしといへるほかにあるまじ。此三つのことより。あめがしたしろしめす。うへなき御たからなれど。周の道も昭穆よりおとろへたるがごとく。いつとなくやうくおろそかよなり。い

ともかしこきあまつひつぎの。隱岐の國よあまび給ふよいたりて。冠裳さかしまよおき。この御たからかくれさせ給ひて。かみしもやまき事なく。戦國の世とをなれりける。されど天のめぐりのたえまなく。雲霧のあとたえ。てる日とよもよ。みつの御たから。また世よあらわれたまふより。今の世とをなりたり。ひじりの御時しらねと。とぎぬ御代と。もろこし人のいひつたへしも。かくこそあらめと。ありがたくおぼゆ。されば此御たからのあらわれ給ふも。またかくれさせ給ふも。かみつがたの御せめなれば。其ことわりをつくさせたまへかしと。いひひのりおもふと。或人のかたりき

此國を。吳の泰伯の後なりといへる。唐の世。成亨とよしのなりし時。此國の人。もろこしよきたり。いひ出だせる事なりと。唐書よ見えたり。いかなる人の。かくいひし。史記よ泰伯無子といへるを見れば。其説のみだりなる事あきらけし

國史を考ふるよ。天神瑞穂國を。瓊々杵尊よさづけ給ひしかど。其後そるかとしをへて。神武帝の御代よいたり。難波より東。はじめて職方よ歸せしと見ゆ。二尊のうみ給ふ八しま。おほかたの今の西海道よて。からよちかし。隱岐。佐渡。越のしま。いづれもからよむかへる國なり。そのちかきあたりよ。風よをなされて来るから人。今も多し。一書よ素

蓋焉尊しらざる國よくだりましてとあり。又韓地からくよ遼うあつくさまとあるを見れば。みことその地を經略し。ねのくよとさだめ給ふや。あめよりして。出雲の國。簸の川のほとりよくだりまし。大己貴神をうみ給ひ。それよりチノクニ根國よいでましぬと。出雲も韓よむかへる國なり

自注。むかし三韓をからといひ。西土を諸越チヨクといへるよ。いつの時よりか混じてからともいひ。もろこしともいへり。誤なり

八雲。八咫ヤスなどいへる。此國よての。木の成敷よしたがひ。八の敷をたふとぶとぞ。もろこしよての。六部。からよての六曹と。つかさをまかちしを。此國よての八省とささめられしと。そのころなりといへる人あり

おほいよたな飢饉うあせし時。もろこしよての人あひむといへる事。紀傳よいかほども見えたり。此國よての。つひよまかぞ。けものウこウさウ。いみてくウぬウあウめれと。或人のかたり神き。かみの使つかひなりといへる。とりけもの。そのうち氏子こウくウぞ。かみの鎮しづめたまへる山ウ。こがね。しろがねありても。むさぼれる人。ひらさあけんといせむ。いつまでもかくありたき事なり

此國のごとく。おほきなる弓をもちふる所。外よなければ。もろこし人の夷といへる。もろこし國をさしたるよ。大連。少連といへるも。此國の人なるべし。孔子の九夷よをらまくおもひ給ふも。此國。孝順の俗ある事など。さウ傳へ給へる故ウやと。或人のかたりき。もろこしの外なる國ども。狄といひ。菟といひ。蠻といへる。北南西ともよ。けもの。むしウのつきたる文字なれど。ひがしの國ウ。仁よしてウのちながウきウゆウ。さウいなきなりと。もろこし人のいへることばあり。もろこし代々の記録をもけみし。又からの風儀をもしたしく見るよ。げよもとおもふ事おほし。されど仁といへるも。そのみちを得ざれば。まことウの仁よあらむ。いのちながウきウも。其人々の心よこそよるべけれ。ありがたき國よ生れたる人ウ。その道をつくして。もろこし人の言葉ウ。うそならぬやうよまへウまへウや此國の人ウのころすなほよして。夏商の風よちかし。聖賢をして。今の世よあらしめむ。おほかたの忠實の間をもて。をしへとし。事々周家の文章よしたがひ給ふまじ。むかし王政のさかんなりし時。おほやけの官職規禮をこじめ。もろこしをのりとせられしかど。衰季のしかたもまじりたれば。此國の風俗よもあらむ。三代の道よもちがひたる事すくなしといひがたし。世のふみこのめる人の。やウもすればもろこしの事をひ

きて。古今のことなるありて。風俗の同じからぬといへるよ。心づきなきといふとら
めし

自注 三月の服。夏后氏の禮として、同姓不相娶。周禮のみまかりといへり。ひと
つをあげて。其他をしるべし

もろこし代々の風儀を見るよ。漢の時まで。いよしへのちかき故よ。さなかりしか
ど。まだいよものごとくつつけまごし。いづれよあたりともと。おもふ事とやかく議
論して。無き事を有る事となし。小事を大事となし。おほやうならぬと覺ゆる事多し。ひ
とことをあげていそげ。御製の詩を。其一代のうちよ。翠下の詩とおなじくえらび出だ
し。一部の書として。世よおこなふ事。このくよ代々の撰集のごとくし。又ほ法師女ほうし。を
うななどいへるものよ。なかよかきつらね。ごがおさふしする所よかけおかば。なれけ
がまといひ。又ほ不敬といひて。もろこしよて。つみをかうふるなるべし。これこそ
ことよりさる事なれど。ほかの事よかしうつり。ものごとかくありて。のりのあみさ法網
びしく。わが豊葦原の。ゆたかよしてありがたき風儀よ。およぶまじ。ことのまかちも
なく。ひとまぢよかれをまなびて。これをいとふべきよしもあらむ。ゆい／＼その時。世

のいきほひなれむ。またこれをおして。かれをつみまべきよしもあらむ。文のつひえ
り。小人もて僂なりといへる言葉。おもしろしとおぢゆ

自注 文のつひえ。大史公曰。文之敬。小人以僂。注。文尊卑之差也。僂無悃誠也。細碎也。

白虎通作簿

ひじりの風儀よも。せむしと見ゆるもあり。またうや／＼しからぬと見ゆるもありとぞ。
もろこし漢より後の風儀。せむしなどいふべきよ
ある人もろこしの風儀をまたひ。ごがほねを。徑山寺のかたをらよそうふれと。遺言しけ
るとなり。せめて三代の時ならびこそ

今の世よも。遣唐使もがまといへる人ありしよ。菅相公の見たまへることいみじきこと
ありなりとおもひ給ふべし。日出處天子。又ほ東天皇などよ給ひて。もとより彼國
とりあぐべきよもあらむ。須美羅彌古都スミラミコトとしたまひなむ。いかよもそのつかひをもち
れ。書をもこたへさふらふべけれど。つかひを接するの禮儀をこじめ。書中の文句。いづ
れほかの蕃王をまつの式違ひあるまじ。曲江集などよみてあるべきなれど。遣唐の
御使なきよまかじと。或人のいひき。ごが國の人。高麗のつかひの下よ就かざりし事を。

きて。古今のことなるありて。風俗の同じからぬといへるよ。心づきなまきといへるら
めし

自注 三月の服。夏后氏の禮にして。同姓不相娶。周禮のみまかりといへり。ひと
つをあげて。其他をしるべし

もろこし代々の風儀を見るよ。漢の時まで。いよしへのちかき故や。さなかりしか
ど。まだいよものごとく。ろつけまごし。いづれよあたりともと。おもふ事とやかく議
論して。無き事を有る事となし。小事を大事となし。かほやうならぬと覺ゆる事多し。ひ
とことをあげていこ。御製の詩を。其一代のうちよ。羣下の詩とおなじくえらび出だ
し。一部の書として。世よおこなふ事。このくよ代々の撰集のごとくし。又ほ法師女ほうし。を
うななどいへるものよ。なかよかきつらね。まがきふしする所よかけおかば。なれけ
がまといひ。又ほ不敬といひて。もろこしよて。つみをかうふるなるべし。これこそ
ことよりさる事なれど。ほかの事よおしうつり。ものごとかくありて。のりのあみさ法調
びしく。わが豊葦原の。ゆたかよしてありがたま風儀よ。およぶまじ。ことこのまかちも
なく。ひとまぢよかれをまなびて。これをいとふまよしもあらま。めい／＼その時。世

のいきほひなれむ。またこれをおして。かれをつみまへまよしもあらま。文のつひえ
り。小人もて僂なりといへる言葉。おもしろしとおぼゆ

自注 文のつひえ。大史公曰。文之敝。小人以僂。注。文尊卑之差也。僂無悃誠也。細碎也。

白虎通作簿

ひじりの風儀も。せむしと見ゆるもあり。またうや／＼しからぬと見ゆるもありとぞ。
もろこし漢より後の風儀。せむしなどいふべきよや

ある人もろこしの風儀をまたひ。まがほねを。徑山寺キンサンのかたをらよとうふれと。遺言しけ
るとなり。せめて三代の時ならべこそ

今の世よも。遣唐使もがまといへる人ありしよ。管相公の見たまへることいみじきこと
ありなりとおもひ給ふべし。日出處天子。又ほ東天皇などよし給ひて。もとより枝國
とりあへべきよもあらま。須美羅彌古都スミラミコトとしたまひなむ。いかよもそのつかひをい
れ。書をもこたへさふらふべけれど。つかひを接するの禮儀をそじめ。書中の文句。いづ
れほかの蕃王をまつの式よ違ひあるまじ。曲江集などよみてあるべきなれば。遣唐の
御使まきよまかじと。或人のいひき。まが國の人。高麗のつかひの下よ就かざりし事を。

威光のごとくおぼえて。漢の匈奴をまつの禮よもちがひ。規模ならぬといへるよ。こゝろづきなまきもをかじ

もろこしの世界のなかまて。仁義禮樂おこりたる。聖人の國なれば。中國といへるよ。ことわりなりといへるもあり。また其國より見れば。いづれか中國にあらざるといへるもあり。韓人も其國をあがめて。えびすよのあらすといへるこゝろよて。東華ととなへ。もしもえびまなりといへば。こゝろよからを覺ゆと見えたり。國々の言葉ものがたりせしをりふし。東西南北ともよ。ことばのまだい。いづれも體をさきとし。用を後としさふらふよ。十五省の言葉むかり。用を先とし。體をのちとするこゝろふしぎなれ。其國のことむも北虜。南蠻。西域に違ひなく侍るなりといひしよ。韓時中といへるから人。さればこそ。こがからくよも。夷の字まぬかれがたくさぶらふとこたへ

世の中にあひもちなりと。いやしきこととびよいへる。まことよ道よかなへることむなるべし。みやこありても。おなかなければ。其國たちがたきが如く。中國ありても。夷狄なれば。生育の道あまねからず。藥材器用をこじめ。大事小事ともよ。たがひよたすく事多し。國のたふとさと。いやしきと。君子小人の多きとをくまさと。風俗のよしあ

しとよこそよるべき。中國よりまれたりとして。ほこるべきよもあらむ。又夷狄よりまれたりとして。そづべきよもあらむ。おろかなる人。おなかうどの。おなかうどなりと。人のいへるをきよて。こぢのよしるがごとく。なよのゆゑもなく。その國を。中國なりといふんとき。さる事よあるまじ

あしきとおもひし事も。世の中よいかほどもかゝる事ありとまけば。惡をよくむのこゝろ。まだいようすくなり。よき事なりとおもひし事も。世の中よまかまる人よまれなりとまけば。善をこのむのこゝろ。まだいようまくなる。これもよもきのうちのあきならぬ。いやしきうまれつこよりおこりたるなれど。世の中の風俗ごと。うへなきものとおぼゆれ

さくらんどのちみぢかし。いかなればかくあるやらんといひしよ。花多きゆゑよこそ。松。ひの本よのおよばむ。あめつちのことありまことよありがたくおぼゆ。國も家も繁華なりといへる。ひさしからむとまらべき事よやとこたふ

文かくとき。關守する事。此國のむかし。もろこしのごとくよとせざりきと。ある公達の。かたり給ひしとぞ。されどおぼまつりごとし給ふ御身の。ある大徳のありさまをかき。

あかぎねの碑よりちりむられしを見れば。大元帥といへるは關守し給ふ。やすからむおほゆと。ある人のいひし

此國の災異を見ておそる事すくなし。されど祥瑞をもて。へつらひのたまけとをる事も。またまくなし。元日は日食あれど。もつつかさ命じて。政治のよしあしをいひしむる事。あながち言をもとむるのまことあるよもあらねど。後の世よて。ひとつの儀式のやうなれり。告朔のひつじよおなじくもろこしよて。すてたるぞよき。此國よてそのまねし。まねをまねするよおよぶまじ

もろ人會議をる時。この事いかもひ給ふることへ。上をこゝかり。かたへを見あてせ。とやかくするうちよ。吾のかくこそおもひ侍るなれど。かしらだちたる人いひいだせ。おほかたの。おほせざる事なりとのみいひて。まじどくものなり。ちよある人も。ふとさして。さしておもひよりも侍らむといふまほかやある。これの會議よ似たれど。その實の會議よあらむ。もろこしをまなびて。めいゝそのおもひよりをかきつけて。たてまつるやうよありたきものなり

世の中のみだれんとをる時。必す所々盗賊おこる事あり。盗賊といへると。つねのぬ

を人よのあらむ。百姓の年貢運上。年々よおもくなり。かみよりつたへんとをれば。とがをかうふり。其まよてありなんとをれば。妻子をこごむべき様なきより。やむことをえむ。徒黨をむまび。亂をおこまよいたれり。それよりして。さまぐの變故いできたり。大藩。小藩。思ひく心の心よなり。大きなみだれとなるなり。脾胃をこねたる人の。百病さそひおこりて。死するがごとく。おそるべきのとなねだしきなり。まかるよ年貢運上のおもくなるもとをいへ。上たる人のおごるよよれり。凡そおごりといへる。華美榮耀を好むばかりをいひ。その分限よ應じ。いるをいかりて。いだを事をなすのまつりごとなきより。大家小家とも。常よ定まりたる。年貢運上のみよて。つくなふべきみちなく。民をまへたぐるよいたれり。國をたつるのそじめ。多くのものと質素よして。定まりたる年貢運上よて。經費よあまりありて。自然と仁惠のまつりごとおこなわれ。かみゆたかよ。下やま。めてたき世のありさまなれど。一葉ま。二葉ま。いそぢたち。もよとせたちたるのち。いつとなくものごと。おもくけつかうよなり。おほえむ分限の外よ出で。下をしへたぐるよいたれり。ひとことをあげて。い。器物もそじめの素器を用ひたるよ。いつとなく漆器よなり。またいつとなく彩畫を加へ。

またいつとなく金銀にてよそほふよいたる。夜服とても。はじめの木綿を着。いつとなくつむぎとなり。またいつとなくきぬとなり。それよりしてのどんす。ぐんちうなどいへる。もろこしのものをたつとび。又のらしや。しやうぐひなどいへる。蠻國の品を用ふるに至れり。かゝるたぐひ。ひとことならねば。いかでかいるものゝかぢ。いづるものかぢつくのゆんや。そのあひだよ。かごりを禁すること。まつりごとのかぢめなれとしれる。明君賢相なきよしもあらねど。おほかたの。小事小物のみ。こゝろを用ひ。大事大物の。いつとなく分限よこえたるといふよ。こゝろづきなければ。禍亂をまくへる。益となりがたし。

いつの時よかありけん。材木のつひえをいとひのりものゝ積ほとまりしとき。むかしはさゝら竹よ。硫黄をつけこれをつけたりといひしよ。今の世ひの木を用ふるいかゝなりと。こぎかしき人のいへるよより。さらばとて。つけ竹よあらたまりけれど。ほどなくやみてけり。小事よこゝろをもちふるもをかじ。またとなしのみさゝて。いまだこゝろみざる事を。みだりよいひもちふるもうらめし。

あめつちとひとしく生ひいでたる。こかね金。しろがね銀。あか銅がねを。みだりよほり出だし。

ありてもよし。なくてもまむといへる。異國の物よかへて。五行の氣を損じ。奢侈のみなもとを長むること。まことのをしむべきといふべき。くろがね鐵。此國の産するところ。萬國よすぐれたれば。あだ毒兵をかまよおなじとて。むかしよりこれを禁せり。是もよろづ世のため。農器のとがしからん事をおそるゝなどいひなさもあるべし。その國みちなければ。竹をさりたること。木をけづりたる戦よて。さししもいみじき百千のせさも。平地となれるといへば。兵器よによるまじ。されどさらぬぞめでたき。南蠻よきたれるくろがねよて。刃をつくり。ひとぐのもてとやせるを見れば。此くよのくろがねのみ。まぐれたりともいひがたし。からのくろがねも。此國よのまされりといへり。かねすくなくして。吹煉のつひえよあたらざるを。山する人のことばよのこかしといへり。

自注。胡居仁曰。金人不以布帛換金銀。是他有見識。

もろこしよの。金銀をくなく。此國よの多しといへる人ありしよ。ある人のいへる。さよのあらず。この國の。金銀をよしむこゝろなく。みだりよ山よりほりいだせばこそ。多くい見ゆれ。天地のものを生じ給ふ。おほかたのまぐる事もなく。またいたらざる事もな

し。此國のみ金氣あまりありといへることよりやあるべき。もろこしの金銀のあたひたつとく。此國のさなきよて。金銀のまくなき事しれたるよあらむやといへるよ。又或人のいへるよ。さよのあらむ。もろこしの金銀あらゆるかむをいひ。此國よの幾萬倍といふほどなるべけれど。これを用ふる人多き故よこそ。其價たふとく。すくなく見ゆるなり。此國のあらゆるかむ。其まくなき事。又もろこしよのこるかよちがひたれど。これを用ふる人またまくなき故。價いやしく多しとみゆ。たとへば興まぢ某といへるあたり。米多く。其あたひやをこしといへるがごとし。米の地より生むる事。一段よのいかほどいへるかむ。よそよ違ひて多よのあらむ。船のたよりあしく。他國へ賣り出だすよの勝手よろしからむ。おほかた其國のみよてこれを用ひ。其用ふる人まくなき故。價も貴からむ。よそよりの多きと見ゆ。某かくいへるよ。唐土をまされりとし。此國を劣れりとせんといへる心よのあらむ。世の人此國の金銀多しとのみこころえ。其實をしらざるゆゑよ。おもきたからむ。みだりよほり出だし。或のみだりよつひやし。或は他國よおくりて。此國のゆくゆくこざひとなる事を。かへり見ざる。かなしきのあまり。かくいへるなりとこたへしとぞ

此國の繇すくなければ。もろこしよりきたりうる人なくば。衣服ゆたかならじと。いひし人ありしよ。ある人のいへるよ。此國の繇もとよりまくなきなるべけれど。かひこも。くても。みな此國の産する所なれば。むかしの王后をこじめ。親。蠶の禮を行ひ給ふごとく。下の士大夫の妻までも。そのやしきくよ。くの木をしたて。あれさきよと。こがひまる風俗となりなば。繇のすくなき事やのあるべき。今も繇こしらへいだせる村里なきよしもあらねど。もろこしよりきたれる繇多く。しかも其あたひいやしきゆゑ。ほねをりこしらへても。うるよところの利まくなし。人々其益不益をかんがへ。かひこかふよのおよびざるなり。此後。天下後世の事をふかくおもふ人。上よたち給ひ。もろこしよりきたれる繇を禁じ。家々よ繇をしたて。かひこをやしなふ事を。をしへ給ふなるべしといへりとぞ

唐船を禁じ給ひ。藥材のいかをすべきといひし人ありしよ。ある人のいへるよ。それこそいとやすき事よさふらへ。買藥の司をたて。しろがねの數をさだめ。もろこしよのたり。藥材のみよのへ来り。藥店ようりこらへと下知し給ひ。なよのかたき事のあるべき。渡唐を禁じ給ふ。邪教のおそれあるゆゑとさよ侍るといひしよ。それの猶々

べき事なれば。これをふせがんみちいかほどもあるべし。まかし藥材のみとのへ
来れと。とじめの下知し給ふとも。後々よの其法みだれ。ほかのものもとのへ来り。上
おごり。下私し。罪人多くなり。其うれへ唐船の来れるよのまされる事あるべし。良法あ
りても。良人なれば。其わざのひまくひがたし。世の中よの敷くべき事のみおほしと
いへりとぞ

およそ法といへるもの。かろきおもきをかんがへ。其かろきをすて。おもきをとりて。一
定の法とす。ものゝながみじかあるを。かたなをもて。ひとつよきりそろふるが如し。さ
ればよろづよつかへなしといふ法であるべし。おろかなる人の。かろきつかへあるを
みて。よき法をすつることをしよ

むかしの公服の素襖ヌアツをかりなりしよ。其後いまの上下と云ふもの出て来。ひとへ。うらつ
け。もじかたぎぬなど。しなくありて。事とづらしくおほゆ。うらぎしたぎなど。ほ
かよ見ゆれば。ふるきあかつかたる。もちひがたく。おのづからとりつくろふよいた
れば。そのつひえもかざりあるまじ。むかしの素襖よかへらんよのまかじといへる人
ありしよ。又或人のいへる。さよのあるまじ。衣服の身よ便あるをよしとす。素襖の身

またよりあらざるものなりしゆゑ。いつとなくその袖を截り。まをちぢめて。今の上
下といなれるよ。今又むかしの素襖よかへらば。つけだけよひとしかるべし。えりあき
あきて長きしたぎの見ゆる。さまでおほいなるちがひなければ。つひえをとぶくとも。
何ほどの事かあらん。その上。雨などふり。とも人しかくともなきもの。かきのした
あまりて。ぬれしほたれ。とほみちゆく。も、だちとりたるも。さまたげ多かるべしと
いへり

此國常の衣服。いつの時よりか。かくのさだまりけん。つひえなる事おほし。人のせなかに
陽よして陰をよくむ故一重や。とないだ寒くおほゆ。此國の常の衣服よ。うへの二重四
重なるとき。そのさむきかたの。ひとへ二重ふたへなり。さればもろこしの衣服もさあれど
ことくよの人の。前のとほりを。ぼたんよしてしめ。うしろまへのかきね一様よするもよ
ろしとおほゆ。うらぎ。なか。したぎ共よ袖下よ縮入る事。寒氣のふせぎとなるよもあら
ぬよ。さぬ。またのつひえ。無益なる事ならむや。肩よりさき。ひざぶしよりしもの。さま
でさむからぬものゆゑ。かたよりさきよあたる所。手とほるまでよほそくし。縮入る
事もなく。そその脛かざりよせば。手をたらかじ。道ゆくよも。たよりあらんとおも

ふ。脊をちをぬひとほせるゆゑ。腰にあたりにたる所の。やぶれやすく。道ゆくよの足よま
 とふ。下部の者の。つましくりしたるありさま見よしとの云ふまじ。腰より下のぬひあ
 りせずもがな。かゝる事など。そのみちしりたる人よくのしくたづねて。まづ常の衣服
 を。たよりよろしく。つひえなきやうにあらたむべきなり。むかしの上衣下裳といひ
 て。かみしもふたつなりしかど。これもたよりあしき故や。そのうち。ひとつゞきよ
 なり。此國の常の衣服も。さあれば素襖がなとおもふころをもて。ひとつゞきなる
 くびを^衆までとなくうの^花ぎをあらたよこしらへ。えりのまるえりよして。袖の手さきか
 くるよまでよして。是を此國の禮服ときめ。五月より八月までの。羅紗。さよみ布。九
 月より四月までの。どんを類。さぬつむぎもめん。いづれもひとへよして。其分限に應じ
 て着し。今のよかまの。夏のひとへ。冬の綿入よし。こしをのけ。おきをぬひ合せ。二便の
 つかへなく。ただよつけきるやうよせば。常の服の脛かざりなりとも。よかまよの綿入。
 うのぎの。くびをよとやけ。さむきをふせぐよあまりあるべし。かやうよなど衣服あ
 らたまりなば。したぎのさまでとりつくろふよも及ばむ。つひえをえぶくべきよや
 と。ある人のかたりき。されどたやすき事よのあらじ

自注。衣服之制。果能如此。每一件省帛不下數尺。綿亦稱此。舉域内而算之。則爲不費矣
 衣服改制の仰せあらば。もろこし人のまねさせ給ふと批判する人多かるべし。されどお
 ほやけの冠服も。そのはじめ。此國よのなかりき。服のこしらへ。ある人のいへる。其
 大概なり。委くせんとならば。此國の道服をよじめ。異國の服まで。皆々あつめ。そのう
 ちよて。たよりよろしき。禮服。便服。尊卑。上下をわかち。あらたよこしらへてこそ。永久
 不易の服との成るべけれ。まことよたやすき事よのあらむ
 ある人のやしきをひがしむきよたてられしよ。年月のたつよしたがあひ。南むきこそよか
 らめといへる人。しだいよおほくなり。その後火災よあひてければ。今こそといひて。南
 むきよなりけるよ。もとのひがしむきこそよかりしよといへる人。またしだいよおほ
 くなる。これも火災よあひてければ。またひがしむきよなりたり。この比きくよ。もとの
 南向がなといへる人多しといふ。またとし月たちて火災あらば。もとの南向となるべ
 し。またよき事もがなとかもふよりして。こよありてはかしくよゆかん事を思ひ。こ
 れをなしては。かれをせん事を思ひて。心騒がしくなるなり。されど心よたると思へ
 るよき事。いつとも有るまじ。よしあしをよまされて。分をやすんせんよのまがじ

山科のかたをらよ。たごさきるおやこありしよ。道ゆく人金のいりたる袋をおとしかけ
るを。其子たかきをかよかけあがり。よびてかへさんとす。なよ事どとふ。しかぐと
こたふ。おとまもひろふも。世のならひなるよ。いらざる事よかまひて。ごがたごごをす
つるぞといひけるとなん。この人。荷賣丈人のたぐひなるべし

翠よ。仁徳帝の御殿をよじめ。諸帝のみさよご。今ものこりて。これを望むよ。おほやまの
ごとし

いよしへをこのみてちからある人。周の法よしたがひ。族葬をべき事なり。方孝孺の文
集よ。そのよけくのしくいへり。もつともなりとおほえ侍りき。此國よも。とほくおもひ
てかりたる人。國をたつるよじめ。村里へだよりたる。つかへなきところよ寺をつく
るもあり。人をとうふる所を。いちまちの中よかまへ。てら地のかざりあれば。年経たる
後の。ふるさとかをあびさて。あたらしきからをうづむ。まことよいたましといふべし
此國よの諫官もなく。大目附などいへる。御史の職よあたれど。彈劾の式。もろこしよ
ちがひたりといふ人ありしを。此國の今までのとほりこそと。あるみちしれる人い
れしとぞ。これにいさめなくともよろこといふよもあらざ。又もつづかさのよしあし

の。たごまよ及ばむといふよもあるまじ。國々のいさほひを見て。ぶかくおもひたる言
葉ならん。知る人ぞしるべき。もろこしよもいよしへの諫官なしといへり

漢の薛廣徳が。ふねのあやぶくさふらふよ。としよりしたまのむをば。みくるまを。血よてけ
がさんといさめしを。海よもあらぬこよらなる河かぜよふねのり給ひ。御遊ともな
りなんよ。あまりけうとくおほゆ。白麻をさかんといへるほどの人。七年まで何のいさ
めもなかりしこそたふとよと。明儒の論せる。まことよおもしらくおほゆ。されど宋儒
の。薛廣徳をよしとし。陽城をつくさすと論ぜり。これも亦おもしろしといふべし

その子のあしきをかなしむ。朝夕切諫せし人ありしよ。或人のいへる。其御身のよかき
時のものごと御おやのおほせのまよありしかとへるよ。まびしありて。きなく
さぶらひまことたふ。されど。いやしきことごごよも。年こそくまりなれと申し侍
れば。としたけ給ふのちよ。さづかひおほしめをほどよあるまじといひて。その子
なりし人をかたへよまねご。このほどみちゆく人の。言葉あらそひして。としたけたる
ものを。うちたよごなどしたるとなしき。給ふやといひしよ。いかよもやまからずお
ほえ侍るとこたふ。よそのおやなれど。年たけたるもの。うしとおもふさま。やまか

らぬ御事なるよ。またしき御おやの。あさゆふこゝろをくるしめ給ふ事。すこしの御心づきなまきこそあやしげなれといひしよ。そぢがほして。なよの言葉もなし。そのうちのおやこの中。むつまじくなりたると。かたれる人あり

或人やんごとなき御かたの。くまりあそばしをりふし。参りかゝれるよ。これのもろこし人のつたへし。無價のたからといへる薬よて。まぐばひ遊合のかずかさなりても。猶々めでたきなるとのたまひしまよ。くすりの五臓をして。たひらかならざらしむときつたへ侍れ。御いたみ所もなきよいか々とまうしよ。ほどなく御目ひらきたまひけり

くましの。そのしりたる不ど。それのよし。これのあしと。人のおもてをやぶりてもいふべきなれど。さあるくすしのまれなるこそうらめしけれ

世の中。かしこきをもてかしこきをあざむくもあり。又おろかなるをもて。かしこきをあざむくもあり。かしこきをもてかしこきをあざむくまでのなれど。おろかなるふりして。かしこきをあざむくこと。かざりなりおそろしけれ

それがしよかき時。武藏ありしよ。其比まで。人參を用ふるくすしとなだまれなり。

もしも人參を用ふるくましあれば。下手なりといへり。世の人。人參の功ある事をしらすとて。杉某といへるくすし。つねよろれへとして語りき。そのうち李士材。蕭萬與などいへるものゝ方書世に行われ。けふ此比に至りて。かろき病も。人參を用ひざるくましをくまし。もしも人參を用ひざるくましあれば。下手なりといへり。さるころ又むさしよゆき。杉某はあひしよ。世の人。人參の害ある事をしらすとかたりて。其事のみうれふ。徐景山が通分なりと不めけり。定まりたる見識ありて。世のとまりよしたがいざるこそたふとけれ

乳のみ子の瀧氣女をうなの血のみちよ。くましの方書を考へて。もれる薬より。世の人の家傳といひて。とりとやせる薬こそよけれといふ人あり。さる事よ

から人の物語。毒蛇のかみたる所。早速竹のつよよてつよくおしつけ。毒氣のつよのうちはこれあがれるを。利刀よてきりのぞけば。いたみもなく。かゝむかりされていゆといへり

からのくすしを見るよ。人ごとよ妙なるといふよあらむ。つたなきもおろし。されど脈をしり。くまりをもちふる事。此國のくすしよちがひ。くすしよちがひ。くすしよちがひ。

よより樂ひといふより。あるしを得る事あり。これを此國のくすし。單方なりといひて。さらへど。許胤宗が言葉を見れば。さよあるまじ

自注。許胤宗曰。古之上醫。病與藥適。唯用一物攻之。今人以情度病。多其物以幸有功。譬穢不知免。廣絡原野。冀一人之獲。術亦疎矣。

ある人その子を京より。くすしよさせし。さるものゝあしく。いかなりと。消息せしま。その事をいひてなげきし。法印なりし天台のひじりのいへる。もろこしも。此國も。くましの衣服をかされる風儀。そからをして同じきこそ。ふしぎなれ。ほとけも莊嚴よろしからね。庸俗の人の。たふとみおもふ事。うまきことごとりとおなじ事なるべし。されどほかのかぎりより。うちのかぎりなるよ。それがし京よりありし時。やどのあるじなるものゝかたりし。何のなよがし。豊後の人にて。そじめて京より来りし時。ともなふ人もなく。やぶれがき。かけ木履。いとさうぐしかりけるが。人柄おとなしきをたふとくおぼえ。諸人したひしま。今の世よ名をかぞふる人のうちとなれりと。かたりければ。言忠信行篤敬といへること。おかのかぎりよ。まさるべけれ。そなたの御子なりし人も。ひとくよしとこそいへ。あしといふなければ。のちよの時を得たま

ふなるべしといへりとぞ。ありがたきことばよ

むかしより。秦の始皇の事を論じて。とほくおもんばかるものを妖言とし。直言するものを。誹謗まといへり。かくありて。その國いかにかほろびざらむ。されどかゝることを。文字のうへよて見れば。めづらしき事のやう。おぼえ侍れど。世のおろかなるもの。いまもしかなり。人の家よ。生死病苦。又の水火のうれへなど。必あることなれば。あらかじめそのそなへなくて。かなぬ事なりといへ。いとふかじよの福来るとこそいへ。目よも見えぬ。いまくしき事なのたまひそとて。をうなとらへの。そらたてのゝしる。遠く慮るものを。妖言とするなり。又かゝる身もちよて。道よもあらむ。人のおもくもいかゞといへ。あるくちいひて。人をそづかしの給ふといひ。なまかなしむよいたれり。これの直言するものを。誹謗とするなり。いたまじきことなり。おもへばのろふといへる。いやしき言をれど。おもしろき言葉よ。人主をして此ころを志らしめ。誹謗妖言なりとて。忠直の人を。そこなひ給ふ事のあるまじ

舜水といへる人。明の末。其國の亡ぶるをかなし。恢復の志ありて。此國より来れるを。水戸よまね。師傳の位をもて。唐土よて。昔の封建の世よまされるかとい

ふもあり。又、末の世の郡縣こそまされりといへるもありて。その説さまゞなれど。此國は来り。はじめて封建の世の風儀といへるものを親く見て。まこと三代のひじりの法こそ有りがたく覺ゆれと誦られしとぞ。柳子厚が封建論。封建は聖人の心よあらむ。勢なりといへる。聖人の心よあらむといへるのうたがひしけれど。勢なりといへるのさもあるべし。郡縣の世を封建よし。封建の世を郡縣よする事。聖智の君ありても。たやすくなるまじければ。勢よまかせらるべき外にあるまじ。此國も郡縣なりし時もありしよ。いつとなくひじりの法よかなへる。封建の御代となり。上下其分をやすんじ。めでたくをめること。まことよいみじけれ。されば物ごとひどりの教よしたがひ給ひ。人の心のそこねざる御政おこなわれば。周家の八百のかぞふるよたるべしやとおぼえ侍るなりと。こゝろある人のかたりき

芸窓筆記。論封建曰。封建郡縣。孰優孰劣。古今儒家議論紛紜。余雖庸劣。二百四十二年。問春秋。一千三百六十二年。問綱目。略窺其顛末。間嘗以爲。郡縣不如封建。既而屢遊朝。鮮。觀其郡縣之俗。亦以爲郡縣不如封建。然則彼其以郡縣爲優者。乃古今儒家經遠之慮。未審。而折圭擔爵。躋々踰々上下安分。共躋太平。余以爲唯。有我國。物有固然。事有必至。

蓋郡縣之世者。天下人心。奔競是務。賄賂盛行。議毀併興。雖有善者。難以爲防而已矣。或問賄賂行焉。議毀興焉。何獨郡縣日鈞之利也。商者之違々。酷於王者之役々。勢使然也。から國のおもきつかさをする人。おほせいとがよあひしをりふし。朴射夫といへる翁。ひそかよかたりし。まがくよ。郡縣の世よて。下なるもの。上よすよみやすきまよ。自然ときかしらごともおほく。又よまひなひも。おこなわれ。あしたよ。さかえ。ゆふべよおとろへ。世の中志づかならむさふらふ。其御國の。みな人。その分定まりたるこそ。うらやましとおぼゆれといへり。これいふる事なり。よくおもふ人のしるべし。周の赧王の。避責のうてなをまうけ給ひし。さもあるべし。此國のかむつかた。つたへしそのくよぐのひろさ。むかしよおなじく。租税の納もかひりなきよ。債をえたるもの。その門よむしろしき。又よみこしよまがるも。たまさかよありといふ。ひとのかつるを見て。あめがしたのあきなる事をしるといへば。此後やすからをおぼゆと。或人のかたりき

狂歌といへるもの。いつのときよりかこじまりけん。あるたふとき人の。あまたあつまり給ひしとき。狂歌よくまといへるもの。伺候しけるま。借債のうたよめとありしよ。

めるとなん」もとよりもかりの世なればかるもよしゆめの世なればぬるもまたよし。此歌を見るよ。人のこゝろありといはんや

むかしの徳政といふ事。しば／＼ありしとかたれるを。世の中かくなりて。亂をさる事遠からむとしり給へと。ある道しれる人のいひしとぞ

あるものしりたる人の。あまたあつまりて。むかし物語を聞きしよ。げよもおもひ侍る。上おどり下たなひたる國の民ども。年貢運上のおもさよたへかね。かしらたちたるものなど。そのつかさ所よまうで。しとやかよそのくるしみをうつたへ。上のあわれみをもとむるを。哀訴といひ。あるはひとむら二村。又ハ一郡。二郡。もろびといひあこせ。國のかみの事とる人の家よおしり。口々ようつたへ。せひよと。くるひのゝしるを。要訴といふ。されば民の哀訴する。亂のこじめなれど。これハ人のふとやまひづきたるがごとし。おどろきおそれて。いま／＼でのしかたあしきをくやみ。またよき醫師もありて。そのやまひを療せば。あとの何事かあるべき。民のくるしむ甚しく。せんかたもなく。要訴するよ至りて。下のうらみよます／＼ふかくなれど。上たる人の。かへりてよくむこゝろのみ出で来。こじめの世の批判などおそれ。ことをかれかしとしづめな

どし。なだむるもあれど。たびかさなるよおよびて。かしらだちたるもの。とがよおこなひ。さびしくいましめてこそと。ちゑなき人の。智慧がましくいひなを。おろかなる人の。げよもおもひ。刑罰をもてをさめんとを。これハ補ふべき病を。下手なる醫師よさうだんして。猛藥をのみ。元氣を撃つよおなじ。まつりごとの道。かくなりて。亂をさる事遠からざるものぞかし。されどおもき病ありて。下手なるくましの藥のみても。朝よのみて。夕よ死するハまれなるがごとく。亂のこじめと思ふよりして。世の中のみだるといふまで。とるかとしつぎをふるものなるゆゑ。ちゑある人の後をうれへて。とやかくいふをば。うとましき事よ思ふもあり。又ハかたけらいたくおもふもありて。さる事やあるべきと。月日をくらしゆくうちよ。ほどなうふた／＼びとりかへされぬ。世の中とハなるなり。身もちあしき人の。つひよおもひよらざる病つきて。むかひよるがごとし。いよしへの文ども見るよ。いつの世よてもかくあるぞかなしき。おほやけのあまだくみともよし給ふかた／＼かゝる事をこそ。よそよおもひ給ふまじくなれと。むかしの事を。今のやうよおほえ。そゝろよ涙ぐみてかたりしま。後の世のいましめよもやと。志るし侍る

自注。あまだくみともよまる。共天工なり。國は輔佐たる人をいへり。書經は。天工人其代之

貨の國のもと。財の國のいのちなるゆゑ。平天下の章は。財をなす事をときたまへり。くいへをたもつ人。此道しらでやあるべき。ものよみせる人。仁義禮樂の事。文もあらぬし。ことばもいへど。財用の事いふにすくなし。是は人のをきこのみていへる事なれば。それいねをともと思ひ。義をさきとし。利をのちとして。人よゆづるもあるべけれど。たかきもいへしきもたからなくして。何事をかなすべき。許魯齋の學者は生をさむるをもてさきとすといへり。そしるべきはあらむ。されど財をなすといへる。そのつがひをほどよくする事をこそいへ。しもをそんじて。かみをまし。人をやせしめて。おのれをこやすはあらむ。

自注。たからぬ。漢書曰。貨者國之本也。唐書曰。財者國之命也。賈誼曰。積貯者天下之大命也。損下而益上。瘠人以肥己。竊之道也。

千里の馬をしりぞけ。雉頭裘をやき。宮女三千人を出だせる類を見て。上の御身より儉約を行ひ給ふこと。まことの費をこぶくといふべき。されど御心づきあるはすくなく。

下たるもの。こまかりていねを。儉約の名のみありて。其實なれば。國をたもつ益といなりがたし。

もろこし人のものがたり。或人ともだちかたらひて。山のふもとをとほりし。此山は虎ありて。人をくらふ。此虎をころしたるものあらば。十萬貫をたまふべしと。榜文たちたるを見て。大よよろこび。うでまくりなどし。そのまかけあがらんとをるを。かたへの人ひきとまめ。いのちのをしからせやといへば。たからだもちたらば。いのちの何かをしからんとてたへしとかたりき。おろかなる人のこころざし。まことよをかしま事なれど。たからあつめをるもの。人のうらみ。そしりをも。かへり見ず。さかりて入れば。又さかりて出づる事のいかほどもいでき。つひはその身もあやふくなり。家もほろぶるよいたれる。なまか此ものがたりよことならん。漢の帝の西園の禮錢をたぐへて。人のこころ日々よとなれ。火徳のきゆるをおぼえ給はす。董車が郡塙のこめをあつめて。ほどのうへは火ともを事をしらざる。まことよいたましといふべし。かゝるゆゑよこそ。たからあつまるとき。民散むといのたまひけめ。たからさかうていれ。またさかうていづといふ事をとひし。上たる人。下をしへたげ

などし。故なきまたからをあつめ給へば。あめつちもたひらかならむ。おほみづ。ひでり
 などして。おもひよらざる事よつひえ多くなり。又このかこきわざたち。これをし
 づめんとするよ。かぎりなきいくさのつひえいでき。くらよつみたるもの。いつとなく
 うせゆくものなり。とるまじきものをとるも。さかふといひ。あるまじきわざのひある
 も。さかふといへるなりと。あるみちしりたる人のこたへけるよ。そのたぐひ。下さま
 よも。まのあたりある事よこそさふらへ。いやしきあまびとなど。おほやけの。その事す
 る人といひあせ。ひとつの物を。ふたつといひ。おろそかなるものを。くらしといひ。
 上をおぎむき。多くのたからをまうけなどするもの。必を酒のみ色このみして。あし
 たよ得たるたから。くれよりしなふよ至れり。これもさかうて入れば。さかうていづ
 るよてさぶらふと。或としばえなる人のいひし。げよもと思ひ侍る

世の中ほど。おもふやうならぬものあらむ。たからに國のいのちたるをしらざる人の。
 みだりよつかひすて。代々のたからをもうしなひ。又たからに國の本たるをしれる
 人の。やぶさかよして。たからだよあらばとおもひて。世のありさまあしくなりゆくを
 しらむと。或人かをしみてかたりき

此國よの記録をくなし。おほよそ記録といふ。治亂興亡のあと。萬世までの勸戒となる
 をこそたふとめ。いらざるいくさ物語のみかきちらしたる。まこと紙のつひえとや
 いふべき。もろこしの事をひかんより。此國のなよがし。かゝるよきことばありき。又
 なよがし。かゝるよき行ひありき。なよがし何がし。さなくて。家もなれ。國ほろびた
 るなどいふ。人の心を感じる事。もろこしの物語を見るよ。とるかよまさるべきよ。記
 録のなまこそをしく侍れ。もろこしよても。記録をつくるよ。才學識の三長をければ
 といへり。たやまき事よのあらず

いづこの國よも。日帳。日記などいひて。かきあるしかく事あり。年をつみて見れば。牛よ
 汗し。棟よ充るほどなれど。おほかた。くもりこれたるなどいへるたぐひの事のみか
 きて。政務人事よあづかりたる。議論號令まで。くらしくかきたるの希なり。うたがひし
 き事あれば。としばえなる人こそとて。問ひて決まる事多し。それも五六十年よのまじ
 じ。記録さへたしかならば。幾百年ともなきながいさしたる人を。左右よおけるよおな
 じかるべし。されば此國の智恵。もろこしよおよばざるひとつ。記録よもしきゆ
 べ

世の中ほどあやしくをかしまものゝあらじ。もろこし人の記録をくわしくまると。まことよしみじき事なれど。記録を考へて。けやけき惡事をなし。この國より見れば。ふじぎなるとかもふ。其君其臣いかほどもあれば。かゝる時の。記録なきこそましならぬとおもふなるべし

自注。漢儒の經學をもて史術をかざるをこじめ。國をうばふ賊。堯舜湯武をもて證據とするたぐひの事をいへり

塞翁がうまのたとへり。得といへるうちよ失ふ事あり。失といへるうちよ得ることあれば。得るもよろこびとせるよたらす。失ふもうれへとするよたらざる事をいへり。よしあしといへるも。それよひとしく。秦の長城を築けるの。惡政の第一なれど。萬世のふせぎとなるを見れば。あしきうちよよき事あり。參耆ほどなる良藥のなけれど。補ふまじき病を補ひ。人のいのちをあやまるの。よきうちよあしき事あるなり。忠といひ。孝といへるほど。たふとさ徳のなけれど。鬻拳が兵をもていきめ。郭巨が子をうづまんとして。忠孝のうちよ。あしき事あるなり。ものごとかくとしりて。よくいましめ。つゝしむの。ひじりのをしへ。ものごとかくとしりて。なりしだいよまると。道家のをしへなる

べし

世のみだれたる時の。勇猛なる人こそたからなれとおがゆ。私のうらみをもて。人をころし。そのところをたちのきなどまると。まことよ大なるつみ人なれど。これのころみの人なりとして。いづれの國よも。かくまひかかむといふ事をし。それがしいとけなき時までの。亂後の餘風のどきやらむ。かゝる事たまさかありき

父母のあたより。ともよ天下をともしせむといへるも。周の季世。世の中亂國となり。このくよの號令。かの國よおよばす。凶をいれ。叛をまねく風儀。そやりたる時のことなるべし。今の時の。まことよやしまのほかまで。なびかぬ草木もなく。めでたき一統の御代なれば。人のおやをころせるものあらば。いかよもしてたづね出だし。其つみをたゞし給ふべきよ。その子よまかせおかれ。生殺の權を下よかし給ふの。いかなるゆゑよかぬしをころせるやつこあれば。とがなきおやあよまで。つみよおこなはるゝの。いたまし

ともみたむして死たるの。ひとかど功ありし人のあともなくなり。其じもなるものゝ。父母妻子ひきつれ。なきかなしみ。流浪まゐるありさま。いたましといふべし

宣華兩成敗といふ事。昏墨賊のころすといへる。春秋傳のおもむきよて。當然なりといふ事。あきらかなるよや

おほやけのたからものあづかりてきたくしむる。其つみぬまびとよおなじ。賊吏の棄市すといへる。宋祖の法よかなへり

姦夫淫婦死刑よおこなる。此國の法まされりといふべし。およそ亂國よ。重典をもちひ。治國よ。輕典を用ふといへる事もあれば。法をもちふる事。時代と國のいまほひとをかんがへ。斟酌するをよしとす

此國よ律の書おこなれざるを闕典なりといへる人おほし。されど鄧析が竹刑をつくり。子産が刑書を鑄たるを。いななりといへるを見れ。律の書をさもまされるよや。此ころの唐の刑法志よも論ぜり

服忌令。もろこしの喪制よなぞらへ。五服の親を。ことごとくかきあらはし。父母の喪。舊令よしたがひ。その外の日をもて。月よかへよとあらば。人々恩義の輕重をしり。をしへのたまけならんといへる人あり。げよとおもへり

世の中のさげさかな。とこのへもてなまといふ事。さまざまある中よ。鬼神のためよする

りといひ。いきたる人のためよするを。おもひ。ひかるきよりあひと

いへいとあつめ。をなつ花月きよめでなどする。なぐさみといふ。そのもてなし

といふものなく。いかでかよろこびをたまくべき。たれこむともな

こまりぬむかしより。いづれの國よも。その國々の音楽のあるなり。もろ

其外をらんだ。るすんなどいへる國まで。みなそのくよの音

ありなる事あるべし

いなれど。その樂のおなじからざる。時代のちがひあれ

なれしめば此國のときよをかんがへ。樂をつくり給

美の樂。夏よ用ふべからむ。夏の樂。商よもちふべ

て。もろこしからの樂。此國よもちふべから

ことこの樂を此國よ用ひたらましか

んとしく。人の心を感じて風をうつ

此國よてつくれるのすくなし。その
音舞容もこそあしかたむかりありて。唱歌のなし。

と。から人までも。めでたくおもひ。ふしぎな
なりがたし。音楽ほどたふときものなし。こま
り儚ると。ことごのみまも人のいへど。その國は相應
ことろおもしろく。いそしくなるべきを。しんよお
あらず。ことくよの音なればなり

し。樂のたぐひといふまものさまぐあれど。そのこそ
もちふまよしもあらず。襪のおほやけのふるまひより。下々
世ともなくもてとやし。しかもそのこそいやしからむともいふ
そのふるまよしたがい。唱歌をことぐくあらため。此國の樂とさため。
おごり。まことの樂をつくり給ふをまちなむ。をしへのたすけとなるとも。
なるまじ。されど其しやうかをつくる事。あらむ。もろこし。やまと

ま文ども。おほくよみ。いみ

かもやまとこ

つくる人ならで。つくるとも世

とつるみちの。そひまるとる時より

のまよ

たちたる時。心したいよとしりまらせ。をさな子の。した。そ
るをしへよしたがひ。さるもの。うまきかたよし。風よも日
かそび。くひものをさぐるこそ。あしけれど。おほかたのそ
まひもなく。まこやかよおひたつまよ。富貴の家より
などい入るもの。おびたしくつさそひ。風ひきたま
や。またの。御けがなともやとひて。やうらかなる
りよてかけなどして。そひまるとる時をとしめ。
あしのえたらさもおのづからおそく。うち
く。そだちがたさのみ多し。くすしの云
く。くをままじ事とおも入るあれ
て。いひもいださ。ある。お

るにおもふもあり。人の血氣を
ることあらん。ふるま言葉の。これ
なりといへるを。おもひあはせて。か

あまりよ。屏風ひきまわし。夜晝となく。いだか
みなくあつさよたへかね。かゆるくしていだ
社のごとく病みて死よけり。おとなのたへがたきを見
ろもなく。うつくしむとのそなふなるをしらぬこ
またあるべきよもあらねど。これよ似たることにおほし

せる人。民をうつくしむこころあかく。いかよもしてとおもふあま
文をも考へ。よその國のかくせれ。
りあつめ。これのかくせよ。あ
もこよなうくるしめりぞぞ。
しへけるよ。
ほからんやう

みの事のみおもふ人
ことよたふとくおが
や。郭公駝といへ

かじよりしかな
得失を論むべ

れて。父母妻
あり。かの
もあるゆ
つしめす
めと
か

かさま
ものよ

ての。もたら

めてまゝめる

なるかまされ

いよしへをさ

刑賦をもてするよ

えらび。そのくらゐ

小勇をしるのみなら

大臣の風ありといひ

かきまゐる人。おやかた

みありて。いやしき

と。漢のそじゆゑ似

かたのやうよか

なきよしもあら

其不學。可謂

之武人。如曾

一公孫弘。文

寵固位。欺

者。豈非

鮮有。不

世學

以飯

伏斬
心術
未見其
人多非賢
正而徒誦
心術如何與

ぶなどこやる
ゆる入の。あが
衰微をべしとま
凶先にぶとまるべ
しからむとまるべ

しあま。うまれつきた

る人。よくやしなひなば。もゝとせも。かたさよのあるまじきよ。酒色をなしいまゝよし
て。わか死するぞをしき。うまれつきおろかなれば。あれ人のごとく。かしらの雪のまの
むをかぎり。やまき心なく。辱をくしみて。なよのなす事もなく。その名ひときしをも
出でがたし。世のかしこき人の。ものごととわかゆき。かけ馬よ。むちうつやうなるよ。い
たづらごとよのみ。心をこせ。つひよの。くさ木と共よ同じく朽ちゆくぞをしき。世の中
よいたましく。かなしとおもふ事。まづしといふよりわかやあるべき。ちからなきもの
の。いかれと思ひても。心よまかせがたし。てまへよろしき人の。いくへよもこれをめぐ
み。人のためののみおもひ。つとめて仁慈をおこなひなば。その風儀。子うまごまでもつ
たがり。めでたき家となるべきよ。さのなくして。その身の人欲をもて。貸あつむる事の
みしりて。其子孫の人欲をもて貸すつる事のみしりて。長者三代をなしといへる言葉よ
ひとしく。庫は積たぐへたる物。終よのおごりのたすけとなり。失せまたることをし
けれ。土地人民をたもち。君といわれさせ給ふ御方の。あめつちのひらけし始より。其數
いかなどゝかぞふるやどよて。いさとし生けるものゝ。得がたさくらあよ給ふ御身
なれば。よろしき御まつりごとありて。その名。記録よもつたり。千世よろづよの後ま

でもあがめたふとぶやうよこそありたまよ。その御ころざしあるのをくなく。むなしくとしつきをかくり給ふぞ。いとをしよ

宋儒の學を。明の人の迂腐なりとし。道學の氣。またの頭巾の氣をといひて。あざけりたる事多し。堂よのぼれる子路も。夫子のことばをさかれるといへば。その見る所あきさよりをかしたおもへる。さもあるべし。されば明儒のことばを見るよまことよさやかよして。熱をとれるものよ。さよらなる風よ手あらふやうなれど。此風たけなば。かたきひいたらんと。おそれ思ひ侍る

程朱の學を論せる人ありしよ。愚誣の失あるを見て。詩書のをしへを廢するよひとしかるべしと。ある道しれる人こたへしとぞ

天下ををさむるものと。國よあることをしりて。まづその國をよさめ。國をよさるものと。家よある事をしりて。まづその家をよのへ。家をよのふるものと。身よあることをしりて。まづその身を脩め。身をよさむるものと。心よある事をしりて。まづそのころをたゞしくし。ころをたゞしくするものと。ころばせをまことよするよあることをしりて。まづそのころばせをまことよし。ころばせをまことよするものと。し

る事をいたまよある事をしりて。まづそのしることをいたし。あることをいたまよと。ことよいたるよある事を志りて。まづことよいたる。志かれば。格物致知。といへるに。天下。國。家。身。心。意うちよして。おのれををさめ。ほかよして。人ををさむる事の上よつき。それくの理をよさめ。よがある所のあきよかならぬやうよする事をいへり。おほよそ。理といへるに。かくあるを。かくするをといふ事ぞかし。たとへば。今のよじめて官府よ臨める人。日帳記録を考へて。故事先例をよとり。功者の人よもたづね。自分よもふかくおもひて。それくのよけを志り。事をとり行ふを見て。格物致知といふ事を志るべし。志かると。王氏の説よ。其身よかき時。筭を見て。その理をよめんとせしといふ事。傳習録よみえたり。これに格物致知の極功をときて。一草一木の微なるまでといへることむよかよこり。本注の物の事のごとしといへるを。くこしく見ざるゆゑよ。先王の大學をまうけて。人ををしへ給ふに。才徳の人をえらび出だし。士大夫のくらゐよおき。おほいよして。朝家の補佐。まこしよして。一郡一縣のつかさとし。天下國家の治平をいたしたまよんとの事なるよ。第一よ心を用ふべき。人倫の事をさしおき。たかんなといへる草木の理をよさめ。日をくらさば。上ののぞ

みよもそむき。その身のこゝろざしよもたがひ。大學のまうけの。無用の事となるべし。そのうへ王氏のたかんなの理をきゆめんとせられし。いかゞせられたるよか。ふしぎよおもへり。これの定めて。未定の説なるべし。また人のいへるよ。忠孝の理をきひむといふ。親は孝行をし。君は忠義をする。この理あるゆゑなりと。その理をきひむる事をいへりと。此言葉もちかくして遠し。親のわれをうみ給ふ故。孝行をし。君のこれをいへり。忠をつくすといふ事。なよかゝるありがたまきことならん。いかほどきためたりとも。此外のあるまじ。忠孝の理をきひむといふ。おなじくいさむるよも。君のいかにせををかして諫むるを。親を漸く諫むるを。君臣のものごとを義を主とし。父子の物ごと恩を主とし。君臣の間。道ありざればさる。父子の間は號泣してまたがふなどいへることをいへ。凡君父よつかふることを。千緒萬端みなそれくのをぢみちをさかちてあること。忠孝の理をきひむといひ

格物致知といへること。その説をつまびらかよせざる人の。必とりちがへることあるよ。から人のおどけむなしよ。ある人ゆゑなくして。あかただかよなり。水よおぼるよを見て。何事ぞやとといひしよ。入水の格物まるとこたへしとかたりてらひき。これも王

氏の筈よひとしといふべし

うしほのみちひ。いかなるゆゑなるかとといひし人ありしよ。氣升り。地沈めばみづあふれて潮となり。氣降り地浮べば。みづ。あままりて汐となると。むかしの人はいひおきし。さもあるべし。されどかゝる事。あむらくさしおき。ひたすら日用の事よ心をもちひ給ふべし。あからむ隠れたるをもとむとのあやまりのみおほかるべし。貞享某年流星ありて。あめのひがし南のすみ。ふかき谷のごとく。うちよくほみたるやうよみえ。舟を流したるがごとく。あかく。まさまじかりき。寶永戊子年よは。四國九州の地。白毛を生じ。長さの七八寸なるもありし。享保癸丑年よは。畿内の地よ。あづきの如く。豆のごとくなるものふりくだり。近江のうち。四五寸つみたる所もありたるといへり。これみな。まのあたり見たる事なるが。かゝる事いかにしてそのことよりをきひむべき。これの大變なるゆゑ。さゆめがたしといひ。手もち。足ゆく事。甚ちかきことなるが。いかにしてかゝる事といへる事。そのもとをきひめば。これ人の云ふよ及ばず。聖人といへども。まり給ふまじ。そのあるべからざる事。あるべしとせざることを。大知といへ。格物といへる事。あしく心得なば。程朱の意よもたがひ。世よ處をるたすけ

といなりがたかるべしと。ある人こたへしとぞ

太刀をよくつかひて。名人といへるひとのうちより。自然と心の體を志り。また身のもちやうを志れるもあり。柳生の何がし。澤庵和尚の袈裟を屏風よかくるを見て。太刀の法を悟りしといへり。さもあるべし。此ほどある人のこなしよ。みやこなる人。棋をよくせしが。其子よのをしへざるゆゑ。其よしをとへるよ。それがし。此棋よて。家ををさめさふらへど。とてもそれほどよなるまじとおもひ。をしへ申さぬとこたへしとなん。小藝小技よても。かゝるふしぎなる事あり。古人の言葉よ。天下の理の一なりといへば。ふかく心をもちふる志るしなるべし

棋のわかきものなれど。國ををさめ。いくさするよたとふべき事多し。ある棋をよくせるといへる人のことむよ。棋をよくせんとならば。まづ心の工夫をしたまへといひしとぞ。これよつねの棋うちよあるまじ

學問するほどよき事なく。又學問するほどおそろしき事あらじ。うまれつき正しき人のものまなびしたる。ちからあるもの。やそらとりでなどならへるよひとしく。いよ／＼まなびて。いよ／＼たふとけれど。うまれつきいかかとおもふ人の物志りた

る。たこれたる人。又いさけよあひたるもの。ちからつよくして。あかもやそらとりでなど志りたるよひとし。いよ／＼まなびて。いよ／＼あしく。もろこしの士大夫といへるもの。いづれか科擧よりすゝみ。學問せざるものがある。されど。民をそこなひ。國をあやまりたるなどいひて。今の世までもよくみせしめる人すくなきよあらむ。かくもんあたりとして。必やよろしかるべしといへんや。莊子の儒者の詩書をもて。つかをあむくといへる。誹謗よあらじ

自注。此ことむ。不善學ものを見て。疑を善く學ぶものよいたまよ似たり。其或有所レ懲而然歟

大事小事ともよ。其國々よ相應をる事あり。又相應せざる事あり。三代禮をおなじくせずといへども。時よより。風俗よより。一樣よなりがたきゆゑなるべし。もろこしごとのめる人の。此國よも。科擧の法あらばよろしからんといへる人多し。これの思ひざるこの甚しきよや。其法いかかしてたゞんか。くそしくおもこと。甚そのかたきことあるべし。また世のえきとなるべしや。いなやと。ふかくおもひ。さまでえきあるまじといふ事を志るべし

自注。此言以文應選本非斯國人所能。強而爲之。亦無益於治也。

もろこしの科擧といへる。その國のいきほひなれば。やむことをえず。かくいすれども。とくとしき法といふ。あらむ。およそ人をとる。そのころおこなひをこそ見るべき。文つくらせて。其ふみのよしあしより。人がらのたふとき。いやしきを。さめたらん。ふみたくみなれど。其身に用ふるよたらざる人。いかほどもあるべし。尤品中正などいへるつかさをまうけて。人をえらびし時もあるべし。是もその人のよしあしありて。たのみがたければ。その法もほどなくやみぬ。このくよの國のさま。周の封建よりかく。國々の士大夫。みな其祿を世々し。いとけなきより。としたくるまで。あさゆふまたしみなれ。人がらのよしあし。互にありたるうちより。それ／＼のかしらすべきものをえらびて用ふるなれば。もろこしの科擧にて。人をとるよ。こるかまさるべし。

むかし破古紙といへる藥種をあらむして。ふる反古を用ひたりと。人のまらへる事なるが。水飛の志やうをあらざるくまし。今もまあるなり。いつの時よかありけん。龜トをる事をあらむ。いさがめをとりて。やさけるよ。あまりよほひのけがらしく。いかは儀式なりとも。やめてこそとて。やみけるとなん。もろこしの事をまなぶとて。そのまことをうしなふ事。これよかざるべからむ。ある。からやうをたくみよかけるといふ人。筆法のうちよ。あぶみをふむがごとしといへる。いかやうの事なるかとたづねし事ありしよ。あぶみのまたさをくびすよてふむころもちなりと。こたへしとぞ。此國のあぶみをあらて。もろこしのあぶみをあらぬ言葉なり。をかしといふべし。

龜を鑽ともいひ。灼ともいひ。契ともいへり。鑽もうがつよして。灼は灼灸の灼と同じく。契は龜をうがつの鑿なり。此國は傳へしト法を見。又トの字を象形なりといひ。七十ニ鑽などいへる言葉を思ひ合するよ。此國は傳へし龜トは。古の道法ならんと覺ゆ。吐は普は加身は。依身は。多女は。といへる。魁のたしきよして。くしみつけ。さがり。あがり。りやうした。といへる。魁の變なり。細いへば。とゆるひた。とよりめ。ときれた。とさく。とそれた。とつひた。としひた。といへる。吐の變なり。ほさらひた。ほみた。ほされた。ほさく。ほそれた。ほつひた。ほかくめた。といへる。普の變なり。かみいさまひ。かみをたしひ。かみされた。かみをかたへ。といへる。加身の變なり。えみいさしひ。えみをたしひ。えみされた。えみをかたへ。といへる。依身の變なり。ため

うちとをれた。ためほかとれた。ためされた。ためぬきとほし。つきため。といへる。多
 女の變なり。おほよそ。卜法の跡を見て。よしあしを志るなり。卜の字。そのかたち
 して。たていつ。よこみつようがち。たてをもてやき。吐よりこじむ。くこしくおもふ
 一。よのつねのあらむ。とほかみそみためといへる。世の人もてこやせる説ども多
 し。ある人の臆説。とい水。ほの火。いしへの言葉まかなり。かみ。東方の震雷。木な
 り。今もふるま國の。いかづちする事を。をうなとらべの言葉。かみなり給ふといへ
 り。まみ。西方の兌金。兌の説なりといふ。よろこぶのまむなり。つねの言葉。まみを
 ふくむといへる。おなじ。ための民なり。民の人なり。春鱗。夏羽。秋毛。冬分。おのく屬
 する所あり。人の中央よりあらわして。六月の土に屬せるゆゑ。土をためといへるなり。龜
 卜の事。漢の時よりあきらかならざる。椹先生のいへるもうたがしく。今のもの
 こしよて。龜卜といへる。其名をかりたるのみして。まことの法にあらむ。此國よて
 口授秘傳なりといひて。ふるま事つたりがたし。をしむべしといふべし。又宋人の
 燕石に似たる事も多し

私云。依女の依。その假名。笑のまみの假名なり。もしこの吐普加身依女の文字。上

代よりかく書き来るならん。笑の説。總ならざるに似たり。凡古事記。萬葉集等の
 勿論。順の和名鈔撰せられし頃までの書を見る。假名を用ふること甚たしくし
 て。みだりに其義を誤ることなし。故に今清書する。前よのえの假名を用ひ。後よ
 笑の義と説るを以て。その假名を用ひたり。此書を清書する。かゝること尙少から
 ず。見る人此のころをえて見給はんことをこそ

内則のことむ。難をじてなき。みを手あらひ。口をさなどいへる。としわかなるも
 の。あさねして髪をもゆこむ。いねたるまよて。おやまうとめのみへ出づる。不
 敬の甚しきなるゆゑ。なるたけそやくおき。身じまひし。おやまうとめのおくるをま
 て。安否をとへといをしへ給へるなり。女の二十して嫁し。男の三十してめとるな
 どいへる。愛はおほる。あまり。その子の縁をいそぎ。親たるみちもあらざる。かき
 子どもをとりあせ。家法のそんむることいかほどもあるゆゑ。此大防を志めし給ふ
 なり。あながち。二十三とかざりたる。四十一して仕へ。五十して大夫とな
 り。七十してつかへをかへすなどいへるも。みな其こととりおなじ。ある人舜水のも
 よゆき。ものまなびせしをりふし。内則のことむ。またがひ。よこりのなく時おきて。

父母の安否をとんとすれば。父母いまだおき給はず。父母おき給ふ時をまちて。内則の言よちがひ侍るいかゞいたしきふらとんとひしよ。この國の儒家といへる人のかける文どもを見て。これほどの書物よみたる人。いかなれば。義理をしる事かくりときかとうたがひしが。ことばのちがひよて。意味の通ぜざるゆゑなりと。今こそしりたれとて。大よらこれしとぞ。舜水の通詞せし高雄某といへるもの。かくのかたりさ。さうめ正しからざればくらゐといへるよ。陸績の母の事をひき給ふを見て。肉のいつとても四角よし。野菜の寸をさめてさる事なりとおぼえ。書をよむ事のおきらかならぬといふなるべし。されど聖人の大防をやぶりて。心まかせよするといふよのあらむ

世よもてとやせるからやうといへるもの。まことのからやうよてさふらふやとひし人ありしよ。尊圓親王の手跡などこそ。まことのからやうよてさふらふ。今の人からやうといへるの懷素。又の米芾などの筆の妙ありて。ころびたふれてもその法をうしなひさふらぬ。變法を學びたるものゆゑ。まことのからやうよの遠くさふらふ。むかしより二王の筆を第一とせる。その法の正しきゆゑよこそさふらへとことたへしとぞ

ある人筆法を論せることばよ。此國のものかく事。尊圓氏の毒を流せるより。おとろへたりといへり。世の中よのしりてしらむといふ事あり。またしらむしてしりたりといふ事あり。此ことばよ知りてしらざる言葉なるべし。筆墨紙。またの風聲氣習のちがひよて。尊圓の筆など。からやうといへ見えがたければしりがたき。さもあるべし。されど壺の碑など見れば。むかし今よちがへり

いかよもして。もろこし人の真跡をもてまなびなば。からやうとなるべし。名人の筆なりとて。石をりむかり學びて。かたちの似たりとも。筆の意のもろこしよ遠かるべしと。ある人のいへる。ゆゑあること業とあるべし

此國の筆法といへる。壬辰の亂後。とりことなりて。此國よをめるから人のをしへしを。賀茂の甲斐つたへたるなり。されど今から人のものかくを見るよ。筆の意をなごだちがへり。から人の筆の意も。もろこしといへる同じからず

まつりごとといへるも。をしへといへるも。みな善をまよめ。惡をこらし。人の心を正しくし。風俗をうるのしくする事なれど。精粗のわかれありて。そのしめたちがへり。嬭婦の嫁せずといへるをしへられど。嬭婦の嫁すまじといへるまつりごとなきを見てま

るべし。ある。國をろしめしたる御人の。いみじき心ありて。道をたふとび給へるが。あ
たひをふたつよせざれと。市井よ下知し給ふ。これにまつりごとをもしり給ひを。をし
へをもしり給ひすといふべし。をしむべきよや。ある民のつかさせし人。たばこなどい
へるたぐひのものよ。しこみしてりれるを見て。しこみをのけ。それだけあたひをまし
てうるべし。もしも違背せるものあらば。其沙汰あるべしといひきかせけるとなん。か
くありてこそ。まつりごとをもしり。をしへをもしりたる人といふべき

いかゞしたるもの政をばよくすべきかと。ひしよ。行實ありてあられみふかく。家人み
なをかりやまふ人こそ。政のすべき。文學よよるまじとこたふ
世よ名をいへる學者。おほくあつめ。政をなさしめば。國をさまり。民をまからんといひし
人ありしよ。ある人のいへる。稷禹皋陶ありても。上よ堯舜ましまさむ。唐虞の治の
いたしがたかるべし。およそ學者たるもの。私の心あるよあらねど。おのゝその見
る所をかたくまもり。しかもその見る所よ。深淺強弱のちがひありて。一様ならねば。そ
れよ。裁斷し給ふ明君上よましまさむ。議論のみおほくなりてすむるべし。洛
黨。蜀黨などいへる。いづれも今の世までも。たふとびおほく學者なれど。たがひよあら

そひいみ。つひよおなじからざる。自然の理勢なりと志るべしといへど。古いまの
事をもしらぬ。庸俗の人よまかせて。政をなさしむることよけれといふよあらむ
むかしのかくなりしといへる事よ。今よおほいなるか。ありあるまじとおもふ事多し。

庄老の。太古の上下無爲也といへるうちよ。共工氏不周の山よふれたるとあれば。み
なく無爲なるよもあらむ。唐虞の代の比屋封をべしといへど。丹朱商均またの四凶
あるを見れば。人々賢智なりともいひがたし。されど今もあな人。りちぎなる風儀
多く。人のおほぜいあつまり。繁昌なるといへる所。いつなりがちなるやうよおほゆ。
むかし今のちがひ。すこしもあらじといへるも。またまどひなるべし。むかしこの所
よむらぎともなく。宮寺もなかりしよといへる。おほくちかきむかしなり。むかし
いふねをつなぎしといへど。今の海速くなり侍るなどいへる。いく千世ともしらぬ
むかし物語をいひつたへたるなり。ある年よりたる人の。ものつよきを見て。むかしの
人のきたひちがひたりといひしよ。昔も今よおなじ。きたひのちがひたるよあらむ。
そのうちのつよき物こそ。今よのこり侍るなりとこたへしとぞ

漢の高祖の。われ。まさよ天下をもて事とす。いまだ儒人を見るよいとまあらすといへる

ことを。宣帝の漢家おのづから制度ありといへること。又、龐徳公の儒生俗士の時務を知らむといへること。よき言葉といひがたし。されどあしき言葉ともおもふべからむ。人情事務をもしらざる人の書物のみよみて。これぞとおもへる事あり。混沌氏の九竅をうがてるに似たる事をくならむ。政に用ひて。害を生むる事多かるべし。今の世の。かくをさまりて。上下をまくすめる。いかゞしてかくなりたるかと。そのもとをかんがへ。むかしの人のごろだて風儀をまなびなば。禍亂災害の生むる事あるまじ

ものことありしりがたきよしもあらむ。ましてあまたの學者をあつめて。議論をさせなば。そのまじいよ／＼あきらかならんと。人々おもへる事をれど。さよ／＼あるまじ。綱鑑などいへる書物は名儒の議論をあつめたるを見てあるべし。封建の國をくさむる大事なるよしといへるもあり。またあしといへるもあり。伍子胥がち／＼のあたをむくいし君臣の大義なるよし。これもよしといへるもあり。たまあしといへるもあり。赤穂のな／＼がし。四十八人いひ合せ。其主人のかたきとりたるといへるたよりありしをりふし。おとな／＼し人、學者をあつめ。これいかに御裁許あるべきかと。いひし。

上座なる學者のいへる。しうのかたきうちたれば。な／＼の御かまひもなくをむなるべしといひし。そのつぎの學者のいへる。いかさま處置あるべし。そのま／＼よてのすむまじといひし。又そのつぎの學者のいへる。ほしいま／＼命官をころしたる人なれば。その志の感じ給ふとも。ひとかどの御さばさあるべしといひける。其後さくよ。むさしの何がし。これも世に名をいへる學者なりし。かの四十八人。名をこのみて。かゝる事をなしたりと。文つくりてせしめりといへり。つねの人。何のより所もなく。その身の心よ思へるま／＼いへるゆゑ。そのあやまり正しやすきなれど。學者の經傳をひきて論むるゆゑ。其是非たやすく。わかればたし。漢の宣帝の俗儒の時宜に達せず。このみていしを是として。今を非とし。人をして名賢まよひ。まもる所をしらざらしむるなりといへる。まことと格言なりとおもふ。さればおほくの學者あつまりたりとて。もの事明らかなるといふこと。とりやあるべき。子爵。子夏をしへの法ちがへ給へるを見れば。もしも政をともし給へ。そのおもむきまたちがふべし。みづのえねのとし。あをく。ちひさきむしの。つねよ／＼ともし火のうちよとひいるが幾萬億ともなく。田畠よつきければ。四國九州の苗みなかれうせ。やう／＼たねをとりと

むるもあり。またいたねともようじをへるもありて。米のあたひたつとくなり。うゑ死ぬる人おびたゞし。その波ナミ。東山。東海。山陽。山陰までよおよび。おほかたのうゑよちかづき。士大夫まで家人みなかゆをまゝりて。としをまごせり。此幾年か豊年のみつゞきて。祿をそめる人の。米のあたひのいやしきをうらみ。あき人のうれものまくなきを。うき事は思ひしよ。かゝるうとまじき時よなり。こじめて豊年のありがたき事を忘るるべし。世のおろかなる人の。目前の事のみおもひて。長久のおもんをかりなき。みなこれと同じ。かなしといふべし。ふるさ人の物語をさくよ。九十年まへ。かゝる凶年ありしとき。つたへたりといへり。それがし十二三のときも。凶年ありしかど。かくまでよあらむ。國をたもてる人の。つねよ米穀をたくわへ。凶荒またの變故のをなへとすべき事なるよ。さある國の。十よひとつもなければ。民のうゑよおよび。しよとつるを見て。手をつがぬる外のあらじ。民の父母といへる事。ゆめよも思ひよらざるがごとし。いかなることゝよか

いつの時よかありけん。とりあひありしをりふし。ふるさ文よ。よろしきそかりごともがなと。たづねありしよ。あるものよみしたる人。すゝみ出でゝいへる。むかし韓信といへるもの。その名をのこせる。粟沙といへる事こそ。今よ用ふべきなれ。又木をさり。道をふさぐといへる事もさふらへば。山手のかくしてこそといひけるまゝ。さらば其用意せよとありしゆゑ。いかゞいたし侍らんかと。事とる人たづねしよ。ふくろの布よても。もめんよてもよろしかるべし。木のいかよもして。人を大勢催し。ふとくおほいなる木をさらせ給へといひしとぞ。文のみよみて。まことのたたらさなければ。その言葉用ふるよたらす。書をもて御するもの。馬の情をつくさぞ。いよしへをもて。今を制するもの。事の變よ達せきといへる言葉あり。ふみよむ人のことろあるべきよや敬の字を。主一無適といひ。齊整嚴肅といひ。常惺々法といひ。畏といふ。いづれもその至極をとける言葉よて。ちかくとりていへば。ことろさわがしからせ。ものごと。とくとするといへるよりほかになきとぞ。此國の人のもろこしの字義ようときゆゑ。ふかくとりすぎ。かへりて受用のさまたげよなる事おほし
てならひまるよ。半字不成といへるから人の俗語あり。これも敬の工夫なき事をいへるよや
のびくとしたることろもなく。其かたち木偶人のごとくなるを敬すとおぼゆるもあ

れど。さよのあるまじ。瞻視をたふとくし。衣冠をたゞしくまといへるも。目づかひうろ
つかを衣紋つき。じだらくならぬといふことなるべし。程子を泥塑人のごとしといへ
る。一團和氣といへるよつき。思ひやりてあるべし

ものよみする人。身のまわりを。そこくよし。かみなどかきみだしたる。容觀玉聲などい
へるを見れば。さよままじき事なり

おもものといへるもの。から人のおびたるを見。その聲をさへて。歩趨の節。かくあるべき事
なりと。ひじりのよりのくひしきとけをこめてきとりさ

むさしのなよがし。經書のうちよて。一字づつあげ。そのころをいひせ。漢語よてこたふ
れば。それなまこと。會得よあらをといひて。愆の字を。おもひやりとこたへしを。第一
とせられしとなん。おもしろきをこへよ

父母よつかふるといへるを。父母よつかふるよとよみ。みちを行ふといへるを。みちをゆ
くよよみたしといへる人あり。おもしろき心よ。よみある文字あり。よみありてたし
かならぬ文字あり。徳の字。仁の字など。此國のことばよなほし。いかゞいへるとき。本
錢よかなふべきよ

ある人白きを見てしろしとまり。黒きを見てくろしとする。明德の發見なりとかたり
ける。善念のおこるをこそとよきよりいへるを。白きをしろしとし。黒きをくろしと
する。善念ならむとこたへしとぞ

自注。白白黒黒。是爲明德如何。曰。見父母以爲父母。見子弟以爲子弟明德也。父母則尊
之。子弟則護之。而見馬知其爲馬而羈之。見牛知其爲牛而鼻之。草爲草。木爲木。鳥自鳥。
獸自獸。莫不甄別而順處之。孰非明德之發露者耶。祭紂之暴。跖橋之盜。方其靜居而無
事也。東方發白而知其爲旦。長庚西湮而知其爲夕。明德昭然無時而休。然不謂之德者何
耶。失於大也。人之提腕而掣筋。亦無非力。必也。有孟賁夏育。而後謂之力。提腕掣筋者不
與馬何耶。亦失於大也

いかゞして學問の成就し侍るべきかと。ひし。師なりし人。みなたちよも戀をし給ふ
やといへる。その座の人。くつくととらひしま。いやさよのあらむ。としたけ給ひ
て。かしてよよき兒あり。こよのたへなる油木梳ありなど。あさなゆふな。めし
くひ茶のむよも。よまれ給ふまじ。その心のごとく。學問の事を思ひ給ふ。世よ名を得
ん人といなり給ふべし。それよをこしもちがひあらば。あれはろかよてをむならん

とあげき給ふべし。これをみづからその心をためむと申し侍るなり。賢を賢として。色
よかふといへるも。此こころよて。をかして事よのあらむといへり

孔門の高第。大夫の家よつかへざる。陪臣となる事を。さらひたるよのあるまじ。此時。
君よよく臣つよく。晋の韓。魏の趙など。齊の田氏一等しく。其國をうばひとり。諸侯と
なるべき。さざし一朝一夕の故よあらず。其いさほひすてよとむべからず。魯の三家
もそれよかひりたる事をければ。あらかじめこれをさげすんば。其時よのぞみ身をこ
づかしむるならんと。かねて思ひこかりて。つかへざるなるべし。漢の孔光揚雄など。あ
ながち。小人といへるよのあらねど。機を見る事の明らかならむ。寵利あまれざるより
して。莽賊禪代のあひだよあたり。汚辱の名をかうふるよいたれり。されば曾閔のつか
へ給ひぬ。いとたふとし。この臆説の。國外謝氏の説ともちがひ。小注の上等の人の。あ
へてなきをなどいへるよの。大よちがへり。もし一説よもそなふべきか

自注。孔子の公皙衰をほめ給へることばのうちに。天下おこをひなくして。おほくの
家臣となるといへる事史記よみえたり。とけあるべしとおもふ

天下を稱して聖主といひ。臣下を稱して賢臣といへる。上をことぶきまると。萬歳とい
ひ。諸侯をことぶきまると。千歳といひ。常人をことぶきまると。一百二十歳といへるよ
ひとしく。いづれも套語とあるべし。康熙帝の事をもちし人よたづねし。聖主とこ
たへしを。さてい聖人なるかと。此國の人のおもへり。さよのあらむ。羨里操。天王の
聖明なれど。臣がつみ誅よあたれりといへるを見て。聖の字ようたかひをなせる人あ
りしゆゑ。凱風の母氏の聖善なれど。それよ良人なしといへる。聖の字をあげてこたへ
き。後漢の光武帝の上章。聖といふ事をゆるしたまひざる。非分の套語をいとへる
なり。いみじといふべし

まことしきなるを牆といひ。おほいなるを城といふ。もろこしよてしろといへる。おほい
しがきをつきまひし。士大夫のいふよおよばむ。工商雜類まで。そのうちよまましむ。長
安城などいへるを見てあるべし。しろさだまりたるのち。たみおほくなれば。しろの外
よまむもあれど。城を築く本意の民ども皆城の内よすまひせ。あたありとも。そこを
ままじとの事なり。此國の。國の守のめめる所を城といひ。二の丸、三の丸などあれど
士大夫のみよて。工商雜類の皆々いしがきの外よめむ。いくさなどいふ事あらば。燒
むらひれて。きをつき。かつえるもの多かるべし。これのもろこしをまなびたきよや。さ

れどこれもよしあしのあるとぞ

春がすみなどいへるよの露の字よろし。いつの時よりかあやまりて霞の字を用ふれど。これのほてりする事よて。彩霞。またのよしきのごとしなどいへる。みなくくれなるなる事をいへり。水煙。山煙。煙景。煙柳などいへる。火をたくけぶりよのあらむ。かきめる事なり

士といふは。奉公人の事なり。子貢。子路のとへるもいかしたるとき。奉公人といふべきかといへる事なるべし。もろこしよては。學問する人を奉公人とし。此國よては弓矢とる人を奉公人とす。武をたつとび。文をたつとぶちがひあれど。農工商雜類の籍よあらむして。仕官のしるべきものなり。いづれも士なり

此國よ。今の役といへる事。からもろこしの言葉よの。官といへり。から人の來れる時奉公人よあひては。必ずなよの官なりやとたづねし。此國の人の朝官のみ官といへるとおぼえて。これの無官なりとこたふるもあり。又の役の官といふべきなるとしれるものもあれど。この國番一通りつとむる奉公人を役人といひにさるゆゑ。無官なりとこたふるもありき。大官小官の差別のあるべけれと。祿をこみて奉公する人よ。官のなき

といへる事。ふしんなりといひてうたがへり。それくの職掌をあげて。番一通りつとむる人の。直衛官などいふべき事なり。役といへる。もと士よりしもつかた。いやしきものゝ事なり。

無官の大夫などいへる。位階のみありて。なよの職掌もなきゆゑなるべし。これも教官といへるものよて。無官よのあらむ。もろこしからの人のうたがふなるべし

もろこしの詩。この國の歌。深奥なる事。かひりのあるまじ。詩のつくりよけれど。うたのよみがたしといへる人あり。是にさることあるべし。歌は此國の言葉なれば。かくよみては。歌よのあらぬといふ事。よめるものも。又見るものも。其かほとあれど。詩はもろこしのことばなれば。そこくよ作りても。大方きこゆるほどなれば。その身もよしとかもひ。見る人も妙なりとほめてやすより。歌のよみがたし。詩のつくりやすしといふなり。もしもろこし人。此國の歌よむ事あらば。歌のよみやまけれど。詩の作りがたしといふべし。詩の作りやすしといへる。詩をしらぬ人のことば。うたのよみやすしといふ。歌をしらぬ人の言葉なるべし。いづれかたやまき事ならん。文つくる事もまたこれよかまじ

唐詩鼓吹。唐詩選。いづれも唐詩なれど。撰者のこのめるをわつめて。書とせざるなれば。唐詩のまつたきよのあらぬを。唐詩鼓吹をまなびて。音調體製。唐詩鼓吹に似よれば。これを唐詩とこゝろえ。唐詩選をまなびて。音調體製。唐詩選に似よれば。またこれを唐詩とこゝろう。さよのあるまじ。詩の唐よりさかんなるのなしといへるの。別は其のけあるよ。歌をよくよむ人のおもひやりて知るべし

詩を作るよ。字法句法よ。こゝろを用ふるのあれど。律詩を作りて。章法よこゝろを用ひ。古詩長篇を作りて。段落過句よこゝろを用ふるのまくなし。これの詩を作る疏節なれど。まづこれよりこそ入るべけれど。功者の人の語りき

それがし詩を作りて。友なりし人よ見せしよ。詩の俗語をいむといふ事。人々のしりたる事なれど。俗意をいむといふよこゝろづけるのすくなし。此詩など俗意といふべしとをしへしかば。げよもと思ひけれど。うまれつきのまからしむるのあらたまりがたし。詩は別材ありといふの。此故よ

詩は韻をふみ。平仄をあらするの。いかなるゆゑなりと。しれる人。此國よのあらまじ。もろこし人ようたよませたらんよ。此國のみぞぢひとむよきだまりたる事。いかにし

て其のけしり侍らんかと。ある人のいへるをげよもとおもひ。もろこしことばよくすといへる人よたづねしよ。もろこし人のいひし言葉まで。自然と聲律よかを入るの。その國の風氣よて。かくのさふらふ。此國の人の。そのことばまなびたる。それぞまてのおほえ。いかにかきふらふべきと語りま

もろこしの字音の。四聲をなり。唇舌牙齒喉のわかちあざやかなれど。からの字音の。三聲のみありて。上聲去聲をかれを。されど唇舌牙齒喉のわかちあるなり。此國の字音の字ごとよ平聲のごとくよみて。上聲。去聲もなく。又入聲もなし。ふつくちきのつきたる字の。入聲なりとおほゆれど。これもくちよてとなふるとき。碎音となり。入聲のあらむ。唇舌牙齒喉。そのまかれ。なまよしもあらねど。國のならし。くちびるがちよものいへるゆゑよ。五音あざやかならむ。釋徒の誦經よ。いまも四聲をもちてよめるあり。これのもろこしよじたり。そのことばしれる祖師の。此國よも。五音をつたへんと。心をつくしをしへたるなれど。もと此國のなき事なるゆゑ。いまよなりて。其のりよあたらざる字音のみ多し。詩の音調をこそおもしとまれ。この國の字音よて。もろこしの詩つくるの。調子よかなぬ笙ひちりきをもて。樂をかなづるよひとし。此後い

ちよへたりとも。もろこし人。これのといへる詩つくる人のありがたかるべし

此國にて。五音相通といへる。もとから國より對馬よきたり。それよりこの國へ行れしゆゑ。むかしつしまいふはといへり。から國もそのもとい。西域よりいでたるをまなび。諺文といへるも。梵字よならひてつくれり。芝峯類説よかきたり。もろこし人の言葉も。七音の作。西域よりおこり。ながれて諸夏よ入るといへり。もろこしより見れば。西域といへる。とるか西の邊土なるよ。かゝることをせめて。天が下よみたしむる。まことよふしむなりといふべし。おろかなる人の。まよのよりどころもなく。此國よてせじまりたるやうよおぼゆるもかなし。されど此五音相通といへる。あめつちの間。自然の理數よりいでたるものなれば。そのもと。人のこしらへたるよあらず。西域より起りたりといへる事。涅槃經の文字品を見てあるべし

此國よかなといふものなくは。ひとく文字をしるべきよといへる人あり。これの。おもはざることばなるべし。もろこしの文字。西域の梵字。から國の諺文。此國のかな。其外。鞞鞞。紅夷のもの。みなくその國のことばよ應じ。たれせむともなく。をうをわらべ。下々までこれをもちふ。まことよ自然のことこりよ出でたり。かなといふものなくはといへる。其國々のことばなくはといへるよひとしめるべし

此國の詩作り。文かける人。其才學を見れば。もろこしのたれ。それがしなどいへるよ。さまでおとらじとおもふ人。いかなどもあれど。言葉のちがへるゆゑよこそ。そのみよてやめ。うらめしといふべし

から人と物語せしついでよ。我國の三聲のみなるゆゑ。詩までにつくれど。歌曲のなりがたしとかたりき。韓人のものと其ことわり明らかなる故。これのなり。これのならぬといへるおぼえあれど。此國の人の。そこよつくりて。詩なりとおぼゆるのうらめし

もろこしのことばしらをじての詩作り。文かく事なるまじと。もろこしことばまをべる人の。必いへるを。もろこしのことばしりたる人の詩文を見るよ。さまでかとりたる事なけれど。またある人のいへる。これのみをそのひとかたのみをしれることばなるべし。詩文の言葉の精華なるものなれば。言葉をしらをじて。いかにか精華をもとむべし。此國の言葉しらぬもろこし人。歌よむといふ。をかした事とおもふなるべし。されど詩文をよくせぬもろこし人。いかなどもあれど。もろこしことばしりたりとて。詩文

をよくまへまよもあらむ。まことの詩文といへる。もろこしの言葉しりて。しかも才
學まぐれたる。安倍のまよがし。釋空海などいへる人こそ。そちがなまくなかるべ
れ。それがしもろこしことばまこしにまなびたれど。詩作り。文かく事いしらざるゆ
ゑ。それがしのつたなきを見て。もろこしことばまてたまふなと。同志の人よ。つねよ
かたりき

かよそあらゆる文字。よみの此國のことばなれど。こゑのもろこしのことばなり。されども
ろこしのことばよ似たるに甚たまくなし。風氣の異なるゆゑよ。たちばなに准をあた
りて化して。根となるといへるを。ふしぎなりといひしよ。此國よても。みつかん。くねん
れなどいへるもの。其樹をうつして出羽に植うれば。みな根敷となるといへり。ちかご
ろある和尚の物語よ。さつまよりいづるべよみつかんといふもの。いろもうるにしく。
あぢのひもまぐれたれど。そのたねをとりてうゑしよ。和どなくもえいでたれど。みな
く抽となれりとかたりき。唐音もひとづたへ。ふたづたへまぎば。いつとなく。此國の
ことばとなるべし。唐音唐語をまなぶ人の。いつとてももろこし人よならふより外ある
まじ。黄蘗の課誦のみな。唐音なれど。何事ぞやと。唐僧のうたがへりといへり。これ

も數世の後よ。此國のことばとなるべし

もろこしごゑよて。上よりよみくだし。文幾の通むるといへること。ふしんなりとかもへ
る人ありしまよ。いかよもさおもひ給ふなるべし。されどものごとなるよこそさふ
らへ。それがし十四歳なりし時。もろこし人よ下知し給ふ文。あづまよりくだりさふら
へど。文字の道ちがへるゆゑよ。もろこし人よみかねさふらひて。譯者どもあつまり。
あらためて見せさふらひしと。あきものまとして。長崎よかよへる。稻某といへるもの。
語りしまよ。げよもとおもひ。二十四歳なりし時よりもろこしごゑをまなべり。はじめ
に。よその事まけるがごとくおがえしかど。としのかむ。そたちあまりかさねて。おんか
た此國のものよみまるとちかくなり。まのあたりの事。もろこし人とものがたりを
さへあたり。うまれつき敏く。いとけなき時より學べる人の。それがしがごとくよのあ
るまじ。世のさるごとくいへるもの。はじめのいひがたく。まがたけれど。のちよのつ
ねとなるがごとく。また無分別不了簡などいへる。無の字。不の字をさまよひふ。この
國のことばよのあらねど。なるゆゑよ。思慮よもおよばむ。耳よも入り。口よもい
ふ。もろこしごゑまなぶも。亦しかなりとしり給へとこたへさ